暁なつめ
NATSUME AKATSUKI
ILLUSTRATION
カカオ・ランタン
KAKAO LANTHANUM
戦闘員、派遣します！
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
4
戦闘員、派遣します！
角川スニーカー文庫

4
戦闘員、派遣します！
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
「六号がそこまで言うならしょうがないね！
悪いね、ベリアル、アスタロト。
お土産持ってくるから期待して待っててね」
この巻のメインヒロイン
リリス
LILITH
キサラギ最高幹部の一人で
通称“黒のリリス”。
六号に地球から招待されて、
上機嫌♪
ROKUGOU'S VIEW
リリス様でお願いします。
頼りにしてますよリリス様。

「見ろよアリス、
この星の蟻の巣には水攻めが効かないんだぜ」
キサラギ＝アリス
KISARAGI ALICE
キサラギ社の技術の粋を尽くした
高性能アンドロイド。
現在、反抗期の真っ最中。
「アリンコのクセにやるじゃねえか。
ようし、自分の小石アタックに耐えたら
褒美に角砂糖をくれてやろう」
「アリス、小石アタックでは巣に籠城されれば打つ手が無くなる。
ここは一匹捕虜にして、彼等の習性を調査すべきだ」
戦闘員六号
SENTOUIN ROKUGOU
さすりリ行動⑪全力で蟻の巣攻略

「戦闘員六号、こんな時こそ我々の出番だ。
あの迷惑なスライムを再び地中に押し戻すぞ。
こんな事をしでかした犯人探しはその後だ！」
「……これ、どう考えても
リリス様のせいですよね」
グリム
GRIMM
大司教だけど
とにかく重い人。
GRIMM'S VIEW
二人とも、さっきから何を騒いでるのよ
さすリリ行動②スライムから街を救う

「飛んでますよ隊長！ほらほら、あんなところでスポポッチがモケモケと戦ってます！」
ROKUGOU'S VIEW
遠くてよく分からないが、
追われている人影になんとなく見覚えがあるような気も……。
「どうだ六号、こういうのが文明の利器に触れた現地人の反応というやつさ。これだよこれ、僕が見たかったのはこれなんだよ」
「……おい、ちょっといいか？アレが話に聞いてた空の王じゃないのか？」
ロゼ
ROSE
カー〇ィみたく
コピー能力を持つキメラ。
いつか誰か食べられそう。
さすリリ行動③文明の利器で遊覧飛行

CONTENTS

COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!

口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン

戦闘員、派遣します！４

暁 なつめ

角川スニーカー文庫

21783

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

プロローグ

キサラギ本社の会議室で、報告書に目を通していたアスタロトが口を開いた。
「予定なら、そろそろアジトが完成している頃(ころ)ね」
報告書には、秘密結社キサラギ、グレイス方面アジト建設計画と書かれている。
前線基地を作るため、デストロイヤーを使って原生生物を蹂躙(じゅうりん)するらしい。
それを聞いたリリスがうんうんと頷(うなず)きながら、
「それじゃあ、援軍(えんぐん)として誰(だれ)が向かうかだけど――」

それじゃあ　提案として誰が向かうかだけど……」
「ここは私が！　最高戦力であるベリアルにはここに残ってもらった方がいいわ！　ヒーローとの決戦ではこちらも大きな被害が出た事だし睨み合いが続いているとはいえいつまたヒーロー達が決起するとも限らないからここは保険として……！」
息継ぎもせず口早に捲し立てるアスタロトに、ベリアルが口元をニヤけさせる。
「違うだろ？　報告書にあった、将来を誓い合う相手が出来たって部分が気になってるんだろ？　そんなだから六号にツンデレって言われるんだぞ」
「ツンデレって言わないで！　二人は不安にならないの!?　あの男はなんとかピンクにヒーローにならないかって誘われて、ホイホイ付いていきそうになった前科があるのよ？　現地人は長期に渡る戦争で男が少ないと聞くし、悪い女に騙されないか心配で……」

「いや、そもそもキミが悪い組織の女幹部じゃないか」
「そういうのはいいから！　それより、向こうへ行くのは私でいいわね？　それじゃあ早速、援軍の用意を……」
　そう言っていそいそと準備するアスタロトにベリアルが待ったを掛けた。
「待てよアスタロト、あたしだって向こうに行きたい。あっちには六号や他の戦闘員だっているし、何より面白そうなんだもん。未確認生物がたくさんいるって言うじゃん」
「これは援軍なんだから、そんな遊び感覚で行かれても……！　それにほら、まだヒーロー達との緊張状態は続いているわけだし……！」
　アスタロトが反論するが、さらにリリスも待ったを掛ける。
「そういう事なら僕だって行きたいね。未確認生命体に未知の鉱石。あらゆる謎に満ちたあの星には、科学者である僕が行くのが合理的だろう？　そ

れに、正直言って誰が行っても一緒(いつしょ)だよ。未開な惑星(わくせい)の商売敵(しょうばいがたき)ごとき、キサラギの科学力の前では敵じゃないね！」
「あっ、そういうのいけないんだぞリリス！　未開だのなんだのと見下して掛かると、負けフラグってヤツが立つんだからな！　六号が言ってたんだ！」
　いよいよまとまりがなくなってきた、その時だった。
「ならここは六号に選んでもらいましょう、この中の誰に一番会いたいか！　違う！　誰を援軍に送って欲しいかを！」
　必死な顔のアスタロトがガチャガチャと武器を取り出し訴(うった)える。
「「今会いたいって」」
「ええ、言ったわ、言いました！　それがどうかした!?　六号が寄越(よこ)した手紙になんて書いてあったか知ってる!?　モテモテだの婚約(こんやく)しただのロリっ子に食(く)ってもらうことになっただのおっぱい美女にキスされただの！　最初はいつもみ

たくおかしな事を言い出したかと思ってたけど、アリスからの報告書にも似たような事が書いてあったのよ！　昔からあの男は変な女に妙にモテるし、今も何をやってる事か……！」
　とうとう開き直ったアスタロトに、軽く引きながらもリリスが尋ねる。
「じゃ、じゃあ、六号に指名された者が援軍に行くって事でいいかい？　……まあ、ベリアルも面倒見がいいから慕われてるけど、僕の予想じゃアスタロトを選ぶだろうけどね」
「そ、そうかしら……。あの男の事だから、案外本当に現地妻を作ってたりして……。忘れっぽいし、そろそろ私の事を覚えてるかどうかも……」
　途端にウジウジしだしたアスタロトに、ベリアルが快活に笑い掛けた。
「アイツもあたしと同じバカ枠だからなー。そろそろ本当に忘れていてもお

かしくない……おい冗談だって！　そもそもなんでアイツがこの組織に入ったのか考えろよ！」
「うんうん、幹部の僕が言うのもなんだけど、キサラギの戦闘員は安月給の上仕事も過酷だ。なのに、あの根性無しの六号がずっとやってこられたのも……」
二人の言葉に自信を取り戻したのか、アスタロトが顔を上げた。
「そ、そうよね……。昔からあれだけ私に付きまとって、命懸けで尽くしてくれたんだもの。きっと私を選んでくれるわよね……！」
六号との過去を思い出しているのかアスタロトの口元が緩む。
と、転送装置が内蔵されたモニターに通信が入り、現地との回線が開かれた。
そこには、たった今話題に上っていた男の姿が映し出されている。

『こちら、戦闘員六号っス。現地にアジトが出来たんで、援軍の方をお願いします』

待ちに待っていたその報告に、アストロトは若干頬を赤らめながら――

「おいアスタロト。お前今、ちょっと胸元開けたろ」

「……あ、暑いから……」

1

寝泊(ねと)まりしている公園に、俺の叫(さけ)びが響(ひび)き渡った。

「ちっきしょおおおおおおおお！　何なんだよこの星は！　もうやだ、俺地球に帰る！」

アンデッド祭りが終わり、完成したばかりのアジトが目の前で吹(ふ)っ飛んでから一週間。

デストロイヤーまで持ち出したというのにアジト建設が失敗に終わり、さ

すがの俺達も消沈していた。
芝生の上に座り込み、ショットガンをキュッキュと磨いていたアリスが口を開く。

「悪の組織のアジトは爆発するもんだ。……とはいえ、さすがに面倒になってきたな。何より爆発の原因が分からねえ。アジト周辺はデストロイヤーで更地にしてやったし、森も広範囲を焼いてやった。破壊されるのを前提にもう一度アジトを建てて、攻撃の瞬間を捉えるぐらいか――」
「そんな悠長で面倒な事やってられっか！　大体、アジトが完成しなきゃ援軍だって来ないんだぞ？　最高幹部の誰かが来れば、戦争中のトリスはもちろん、商売敵に忌ま忌ましいこの森だってどうにかなるのに……」
アンデッド祭りは俺達の家に大きな爪痕を残した。

アンデッド祭りは衛達の隊に大きな爪痕を残した。
まず第一に、アンデッド祭り中に色々やらかしたスノウは減俸(げんぽう)をくらい、失った信頼(しんらい)を取り返そうと騎士(きし)の仕事に励(はげ)んでいる。
日夜血眼(ちまなこ)になって手柄(てがら)を求める姿は出会った当初からは考えられない。
次にロゼだが、パトラッシュとして生きていくと宣言したまま、未(いま)だ隊に戻ってこない。
毎日腹いっぱい食べさせてくれる上、年寄りに甘やかされる生活に、すっかり骨抜(ほねぬ)きになったようだ。

前回、ロゼがタイミングよく城の中庭に現れたのは、退職願いを提出に来たらガダルカンドと鉢合(はちあ)わせしたらしい。
もちろん退職願いは没収(ぼっしゅう)した。

アンデッド祭りが終われば正体がバレて帰るだろうと思ったのだが、見通しが甘かった。
　そして、最後に――
「ねえ隊長。さっきから何を怒ってるのか知らないけど、これでも食べて機嫌直しなさいな。日付けが変わる前から下ごしらえしたお弁当よ！　最近は公園に住んでるって聞いてたけど、芝生の上で食べるお弁当は美味しいわよ？」
　そう言って、嬉々として弁当箱を開いたグリムが、フォークに刺した唐揚げをこちらへと向けてきた。
「はい、あーんして？」
　苦手なはずの朝日を浴びながら、グリムが満面の笑みを浮かべてくる。
「…………あー」

仕方なく口を開ける俺の前で、グリムがパクリと唐揚げを頬張った。
「あげなーい。ふふ、隊長ってば冗談よ。部下の可愛いお茶目でしょっ？　しょうがないわね、今度はちゃんと……」
　グリムは何が楽しいのかクスクス笑い、再び唐揚げをフォークで刺そうと……。
　と、俺もフォークを手に取り、目の前の唐揚げをサクッと刺した。
「あっ、ダメよ隊長！　私があーんしてあげるんだから！　……あ、あれっ？　私にあーんしてくれるの？」
　無言で唐揚げを近付けると、グリムがちょっぴり頬を赤らめながら、目を逸らして口を開けた。
「あー……。ひょ、ひょっとはいひょう、そんなに入らない！　待って、イラッとしたの!?　油でベタベタになるからやめて！　ごめんなさい！」

無言でグイグイと唐揚げを押し付けグリムを泣かすと、取り上げた弁当をパクつきながら途方(とほう)に暮れた。

俺達に課せられたアジト建設と開拓(かいたく)計画。

これが遂行(すいこう)出来ない事には、地球に帰る目処(めど)が立たないのだ――

「そうだ、もう呼んじまおう」

何か泣き喚(わめ)いているグリムを尻目(しりめ)に、黙々(もくもく)と弁当を貪(むさぼ)っていた俺は気が付いた。

アジトが出来たら最高幹部を呼べと言われているが、爆発はしたものの一度アジトは完成したのだ。

「友達」と頑張(がんば)って作ったんだから、せめて美味しそうな顔するか、無言で食べ

るのだけはやめて！　たった一言、美味しいよって言ってくれるだけでもいいのに！」

という事で、一応アジト建設任務は完了した。

その後爆発し、消えて無くなりはしたが。

詐欺じゃないかと言われても、清く正しい悪の組織の戦闘員だ、なんら恥じる事はない。

「それに今度買ってやるって約束してくれた、指輪かネックレスはどうなったのよ！　別に物が欲しいって言ってるんじゃないの、愛の形が欲しいって言うか……！」

俺は残っていた弁当の中身を平らげると、

「おいアリス、やる事が決まったぞ！　とりあえずアジトは建てたんだ。明日

になったら幹部の誰かを適当に呼んじまおう。そんで、アジトはどこだって聞かれたら、爆発しましたが何かって開き直るんだよ。一旦こっちに来ちまえば向こうに帰るのに時間が掛かる。その間に幹部パワーでアジト爆発問題も解決してもらおうぜ」

「……構わねえが、誰を呼ぶかだな。たとえばアスタロト様はそういう冗談通じねえぞ」

「この男ちっとも聞いてない！　ええ、勝手にお弁当作ってきた私がバカだったわ！」

　アリスが呆れ顔で言ってくるが、誰を呼ぶかはもう決めてある。

「……どうしたグリム、泣きそうな顔して？　あっ、弁当美味かったぞ、ごちそうさん」

　先ほどから何かをギャイギャイ騒いでいたグリムは、何か言いたそうな顔

で呟いた。
「ズルいわ隊長……」
なにがやねん。

2

翌日。
「リリス様でお願いします」
『ええ!?　ぼ、僕!?』
キサラギ本部に援軍を要請すると、モニター越しのリリスが驚愕の声を上げた。
そう、俺が呼ぶのは黒のリリス。
確かな実験もロクにせず、俺をこの星に送ってくれたポンコツ科学者だ。

「そんなに驚いてどうしたんスか？　リリス様は科学者だし、未知の惑星に連れてくるなら一番向いてるかと思ったんですけど」
『いやまあそうだけど！　合理的に考えれば、それは確かに正しいけど！』
　普段のリリスは、見ていると不安になる笑みを浮かべ、変な物を作ったりしている陰キャなのだが、今日は何だか様子がおかしい。
「ところで後ろが騒がしいんですけど、アスタロト様はどうしたんスか？」
『後ろが騒がしいのはキミのせいだよ！　ちょっ、アスタロト、落ち着いて！』
　モニターの向こうでは、涙目のアスタロトがリリスの肩を掴み揺さぶっていた。
　やがて落ち着きを取り戻したリリスが上目遣いで尋ねてくる。

『六号、本当に僕でいいの？　その、戦闘力においてはアスタロトやベリアルの方が上だし……』
　真面目なアスタロトにこんな詐欺みたいな事をすれば制裁間違いなしだし、根っこの部分は善良なベリアルを騙すのも気が引ける。
「いや、俺達戦闘員でも敵の幹部クラスと渡り合えますからね。ウチの最高幹部なら楽勝です。頼りにしてますよリリス様」
　それを聞いたリリスがパアッと表情を輝かせ、照れ照れと頭を掻き始めた。
『六号がそこまで言うならしょうがないね！　悪いね、ベリアル、アスタロト。ほら、僕と六号はゲーム仲間だしさ、多分きっとそういう事だよ、うん。別に勝ち誇ってるわけじゃないからね、お土産持ってくるから期待して待っててね』

『ねえ六号、本当にリリスでいいの!?　あと、あなたからの手紙の内容が八割方意味不明なんだけど、もっと詳しく……』

『六号、元気かー!　最近、新入りの戦闘員が増えたんだよ。勇者だの魔王だの口走る変なヤツらだから、きっとお前と気が合うと思うぞ!　帰ってきたら紹介してやるからな!』

狭いモニターに三人が映り込む中、俺は変わらないその姿に苦笑を浮かべ、

「皆元気そうで何よりっス。それでは、秘密結社キサラギ、グレイス支部!　リリス様の御来訪、お待ちしてます!」

姿勢を正してそう言うと、モニターに向かって敬礼した。

――十分後。

仮のアジトにしている公園に、悲鳴じみた声が轟いた。

「アジトが無いってどういう事⁉　ちょっと意味が分からないんだけど！」

その声の主は、黒髪をおかっぱに切り揃えた白衣の美少女。

つい先ほどまでモニター越しに話していた、秘密結社キサラギが誇る陰キャである。

「俺達だって困ってるんスよ。だって、ようやくアジトが出来たっていうのに、またテント生活ですよ？　本部に連絡してトレーラーハウス取り寄せてくださいよ」

「ええっ⁉　待ってよ、テント暮らし⁉　僕は最高幹部だよ⁉　世界の大半を支配している、キサラギのトップの一人にして天才科学者だ！　なのに今

さらテント暮らし⁉」

キサラギがまだ弱小組織で貧乏だった頃ならともかく、今や都心部でプール付きの豪邸に住むリリスには、テント生活は受け入れ難いのだろう。

「テントどころじゃありませんよ。俺達だってここで文明レベルを落として暮らしてるんスよ？　知ってます？　こっちじゃケツ拭く紙も高いってんで、トイレットペーパーを横流ししたバカまでいるんですから」

ちなみに横流ししたバカとは、家賃を払えず家を追い出され、現在では俺達と一緒に生活しているスノウの事だ。

「えっ、ちょっ……！　それじゃトイレは⁉　ウォシュレットは無いって事⁉」

「基本的にボットンですよ。場合によっては穴掘って自分で埋めます」

まあ、とはいえリリスも武闘派組織の最高幹部だ。

贅沢を覚えたからといって、たまにはサバイバルじみたテント暮らしといい

うのも……。
「や、やだあああああああ！　帰る！　地球に帰る！　アジトが無いって事はエアコンなんかも使えないって事だろう⁉　パソコンも無ければゲームも出来ない、テレビも無いし、ネットも無い！　日曜朝の魔女っ子ぷいきゅあが観られなくなるじゃないか！」
「元々電波届いてないんでテレビがあっても意味ないっスよ。こっちには本物の魔女っ子がいますんで、そいつらで我慢してください。そもそも帰るって言ったって、アジトが無いんだから地球行きの転送装置が使えませんよ」
リリスが顔を青くして固まった。
というかこの人は援軍として来たんじゃなかったっけか、ノリが完全に遊びに来た感じじゃないか。
「わあああああ、騙したなあああ！　何がリリス様でお願いします、だ

よ！　人を期待させておいてなんてヤツだ！　詐欺だ！　こんなの詐欺だ！」
……黙って聞いてりゃこのクソガキが！
「なに被害者面してやがるんだ僕っ子が！　あんただって俺を騙くらかしたじゃねーか！　ロクな説明もしないまま、安全確認もせずにこんなとこ送ってくれた事は忘れてねーぞ！　そうだ、泣くまで揉んでやるって約束だったな！」
「なっ……!?　ま、待つんだ六号、僕の理論では安全は確認されていて……！　あと、そんな約束した覚えはないよ！　それに謝った！　僕、ちゃんと謝った！」
　喚いていたリリスが、突如キレ出した俺に怯え後退る。
「それに、俺が何やっても無条件で好かれる星や、美的感覚の違いで俺が超

イケメンに見える星、俺以外の男が存在しない星だってあるとか、散々期待を煽っただろ！　転送装置の組み立てと安定化で帰るのに一月掛かるとか、そういう大事な事は先に言っとけや！」
「い、言ってない！　僕はそんな誘い文句言ってない！　……いやちょっと待って。転送装置の組み立てと安定化……。準備に一月……？」
　リリスの顔が青を通り越して白くなる。
　どうやら置かれた現状に気付いたらしい。

「そうですよ。一から組み立てるんで、転送準備に一月掛かるんス。だからリリス様も、どんなに泣いて駄々捏ねたってこれから一月は帰れません」
「やだああああああああああ！　やだあああああああああ！」
「ちょっ、あんたキサラギの最高幹部だろ！　みっともないからこんな所で泣き喚かないでくださいよ、人が見てますよ！」

地に両手を突(つ)いて泣き出したリリスを、通行人が囁(ささや)き合いながら遠巻きに見ている。
この人は頭脳においては頼りになるのに、どうして普段はダメ人間なんだろう。
援軍を呼ぶにあたり、グリムを帰らせて正解だった。
上司のこんな姿は隊の連中にとても見せられない。
「ほら、駄々捏ねてないでトレーラーハウスの転送を申請(しんせい)してくださいよ。もしくは仮設住宅でもいいですから。リリス様もテントは嫌(いや)でしょ？」
「嫌だけどさあ！　……六号、嘘(うそ)の報告をした事は忘れないからね。地球に帰ったら君を軍法会議に掛けてやる」
しかめ面をしたリリスが端末(たんまつ)を手に立ち上がる。

「そんな事になったら俺も道連れに告発してやりますからね。知ってるんスよ、リリス様が研究の経費と称して私物買ってるの」
「六号、トレーラーハウスは一番良いヤツにしようか。ついでに嗜好品も送らせよう。名目は、戦闘員の慰労のため、とか言って高いシャンパン頼もう。ねっ？　ねっ？」
「リリス様、さすがっス。そういう変わり身早いとこがカッケーっス、俺達戦闘員はみんなリリス様に付いてくっス」
　揉み手する俺の言葉に、まんざらでもなさそうな表情でリリスがメモ紙を転送する。
「よしたまえ六号、褒めても高級シャンパンとおつまみしか出ないよ。ククク、その代わり次の社内アンケートではよろしく頼むよ？」
　アンケートというのはキサラギ内での人気投票みたいなものだ。

毎月発行される社内報にて憧れの怪人や幹部の順位が載せられる。
やる気の推進に繋げるのが目的との事だが、今のところ怪人や幹部達のマウント取りにしか使われていない。
「任せてください。理想の上司アンケート、憧れの構成員アンケート、あとは襲いたい上司アンケートにも票を入れときますからね」
「襲いたい上司アンケートなんて最低な物があるのは初耳だよ、誰がそんなの作ったんだ。それに票は入れないでいいからね。……おやっ？　トレーラーハウスやシャンパンじゃなくて、紙が送られてきた」
　リリスの目の前に一枚の紙が転送されて舞い落ちた。
　俺はそれを拾い上げ、目を通しながら読み上げる。
「『トレーラーハウスは大きすぎて転送装置に入らないため送れません。会社経費で送れとの数々の嗜好品につきましては、アスタロト様から「舐めん

た」との言伝をいただきました』……リリス様って本当に最高幹部なんスよ
ね？」
「なんでえええええええええ!?　だってデストロイヤーは部品に分解して送
ったじゃないか!?　あと舐めんなって酷くない!?」
　俺の手から紙を奪い、その目で確認したリリスが食って掛かる。
「トレーラーハウスはデストロイヤーみたいな必需品じゃないんで、わざわざ
分解なんてめんどくせえって事ですかね」
「……僕、幹部なのに……。これでも最高幹部の一人なのに……」
　——と、絶句したまま落ち込むリリスを慰めていると、やがてアリスがやっ
て来た。

「おう六号、どうだった？　リリス様を使っての物資要請は」
「ああ、アリス。お前が予想した通りダメだった。リリス様は思った以上に使えなかった」
「ちょっ!?」
　俺とアリスのやり取りに固まっていたリリスが声を上げる。
「だから言ったろ。リリス様は頭の良いバカなんだ。他二人の幹部と違って大概の要求は却下される、って」
「マジかよ、リリス様ってそんな扱いだったのかよ。引くわー。最高幹部として憧れもあったのに、なんか幻滅だわー」
「ちょっと待つんだ二人とも！　上司を相手に酷くない!?」
　そんな事言われても。
「俺悪の組織の戦闘員なんでサーセン」
「自分もアンドロイドなんでサーセン」

「僕が作っておいて何だけど、そうして六号と似た口調で言われると本当に腹が立つね！」

　二人でピッと敬礼していると、歯軋(はぎし)りするリリスにアリスが言った。

「自分の擬似(ぎじ)人格に六号のサンプルなんて使うからだ。これに関してはリリス様に猛烈(もうれつ)に文句を言いてぇ」

　えっ。

「何ソレ、聞いてないんだけど。いつの間に俺の脳みそサンプル取られてたんだよ」

「欠陥(けっかん)脳みそのサンプルなんて取らねえよ、そんなの使ったらパーになるだろ。自分はお前の専属サポートのために作られたんだ。六号の行動と性格パターンを学習して、それにピッタリ合う形で自分の人格は構成されてるんだよ」

なるほど、分からん。
「つまり、俺を甘やかしてくれる専属アンドロイドって事？」
「掠りもしてねえが、もうそれでいいよ。つまり自分の口の悪さは、お前をモデルにしてるってこった」
　ええ……。
「リリス様、俺、アリスほど口悪くないですよね⁉　血も涙もないドライなコイツに似てるって言われるの、結構ショックなんスけど！」
「上等だこの野郎、サンプル対象のチェンジだチェンジ！」
「喋れば喋るほど君達二人は兄妹みたいだよ。それにしても……」
　リリスはようやく落ち着きを取り戻したのか、改めて辺りを見回した。
「なるほど、ここが地球外惑星か。君達からの報告書を読んで、知的好奇心を散々刺激されていたからね。僕とした事が正直興奮を抑えられないよ」

酸素の濃さを確かめるように、リリスが何度も深呼吸しながら目を輝かせる。
「さっきまで散々泣いてたクセに、今さら科学者ぶったって遅いっスよ」
「う、うるさいぞ六号、今は感動の場面なんだから黙ろうか！」
　ちょっと赤い顔をしたリリスが空を見上げて語り出す。
「――かつて人類が、どれほど大宇宙にロマンを求め、そして地球外惑星への移住を夢見た事か分かるかい？　人類のテクノロジーをも超える、オーパーツの存在を空想した事はある？　地底人や海底人、火星人が攻めてくるのではと、子供心に怯えた事は？」
「見ろよアリス、この星の蟻の巣には水攻めが効かないんだぜ。ほら、こうして水を垂らすと、葉っぱブロックしながら水を掻き出すんだ」
「アリンコのクセにやるじゃねえか。ようし、自分の小石アタックに耐えたら

褒美（ほうび）に角砂糖をくれてやろう」
　話が長いのでアリスと蟻の巣攻めをしていると、リリスが俺達の隣（となり）にかがみ込む。
「なるほど、緊急（きんきゅう）時には巣穴の入り口をすぐ塞（ふさ）げるよう、入り口の下に葉っぱ部屋を作ってあるんだね。アリス、小石アタックでは巣に籠城（ろうじょう）されれば打つ手が無くなる。ここは一匹（いっぴき）捕虜（ほりょ）にして、彼等の習性を調査すべきだ」
「了解（りょうかい）した。この一番強そうなヤツを捕虜にするか」
　他（ほか）の連中なら話を無視され怒（おこ）るとこだが、好奇心旺盛（おうせい）なリリスは簡単に注意が逸（そ）れる。
　何か深い話をしようとしたリリスはこの日、ノート三冊分の蟻の巣攻略記録を手に入れ、テントでトランプして遊んだ後、ラッセルのカレーを食べてご満悦（まんえつ）で就寝（しゅうしん）した。

3

「――何をやっているんだ僕は！　これじゃあ六号並みのバカじゃないか!!」

翌朝。

目を覚ましたらしいリリスは奇声(きせい)を上げながらテントから飛び出してくると、俺を見るなり食って掛かった。

「六号！　人類最高クラスの頭脳を持つ僕に、君は何をさせているんだ！」

「蟻の巣攻め、楽しかったでしょう？　まさかアイツら、捕虜を取り返しに逆襲(ぎゃくしゅう)してくるとは思いませんでしたね。敵ながらアッパレですよ」

「本当にね。しかも敵(かな)わないとみるや、捕虜の身の代金のつもりなのか、まさ

か未知の鉱石粒を差し出してくるだなんて……。違う、そうじゃない！
蟻の巣攻めが楽しかったのは認めるけど、僕は援軍に来たんだよ！」
　本来の目的を思い出したのか、リリスが頭を振って声を上げる。
「頼りになる援軍でしたよ。俺とアリスの作戦のままじゃ、きっと巣に籠城されて……」
「その話はもういいよ！　まずはアジトだ！　それと商売敵の殲滅だろう！　アジトを建てないといつまで経っても帰れないじゃないか！」
　リリスはそう言うと忌ま忌ましそうにテントを見やる。
「栄えある秘密結社キサラギ最高幹部の僕が、まさかのテント暮らし！　六号、このままでいいと思うかい!?」
「昨夜は俺達と楽しそうにトランプして、美味そうにカレー食ってたじゃない

いスか」
「それはそれ、これはこれ！　……っと、そうだった。昨夜カレーを作ってくれたキメラちゃんと話をしようか。確か、あの子の過去を調査中なんだったね？　あと、戦闘員見習いとしてスカウトしたと言っていたね」
　カレー作ったキメラというとラッセルか。
　過去を調査中の戦闘員見習いキメラはロゼの方だが、話したいというなら呼んでこよう。
「――なんだよ、六号？　ボク、皆の洗濯物を洗うのに忙しいんだけど」
「おう、この人がお前と話したいらしくってな。昨日は紹介がまだだったけど、この人はキサラギの最高幹部の一人、黒のリリス様だ」
　最高幹部という紹介を受け、ラッセルがビクリと震えた。
「やあキメラちゃん。なるほど、小さな角と尻尾にオッドアイ。報告の通りだ

ね」
「え、えっと、どど、どうも……」
　キサラギ戦闘員達の強さや異常性を知ってるせいか、既にラッセルは及び腰だ。
　リリスはといえば、研究対象を見るような興味深そうな目をラッセルへと向けている。
「そんなに硬くならなくてもいいよ。君は自分の過去を知りたいんだって？」
「……？　いえ、ボクは別に過去には拘りませんけど……」
　ラッセルの言葉にキョトンとしながら、リリスは更に言葉を続ける。
「報告書にはそう書いてあったんだけど、おかしいね？　それじゃあ次の質問だけど……。どうだい？　ウチの組織には馴染めそうかな？　六号達からは変な事されてないかい？」

リリスは緊張気味のラッセルを安心させるように微笑むと、優しい声音で問い掛けた。

「変な事と言われても……。仕事中にスカート捲って覗き込むのは、邪魔になるので止めて欲しいぐらいかなあ……」

「ねえ六号。ウチは確かに悪事を推奨してるけど、こんな子にまでセクハラするのは……」

　おっと、ゴミを見る目を向けられてますね。

「でもスカート捲っても悪行ポイントが加算されませんから、コイツも本気で嫌がってるわけじゃなさそうっスよ」

「そうなの!?　い、いや、そんなバカな……」

リリスの目がゴミを見る目から疑いの目へと変わる中、
「仕事の邪魔にさえならなきゃ、スカート捲られるぐらい別にいいけど。バカな人達だなあ、とは思うけどね」
「もっと自分を大事にすべきだよキメラちゃん！　キメラだから恥じらいや常識ってヤツを知らないのか⁉　六号、危ういこの子は僕が保護するからね！」
何か重大な勘違いがあるようだ。
「リリス様、ソイツそもそも男の子ですよ？」
「君は何を言っているんだ」
真顔のリリスにツッコまれるが、
「六号の言う通り、ボクは男の子ですよ」
「君も何を言っているんだ」

——ちっとも信じようとしないリリスに、俺は証拠を見せ付けた。

「……ねえ六号、さすがに女の人に見られるのは恥ずかしいんだけど」

「だって、このままじゃ俺が変態扱いされるじゃん」

男の子である証拠を見せられて、リリスが地に手を突いて混乱している。

「キメラだから？　キメラは雌雄同性体だとか？　いやいや、報告書には確かに女の子だと書かれていたし、この短期間で一体何が？　ああそうか、心は女の子って事か。そうだね、キサラギは自由な社風だ、どっちの性別を名乗ろうがそれも本人の自由で——」

「女装させてるのはトラ男さんの趣味っスよ」

「天才だと持て囃された僕だけど、君達の事がちっとも理解出来ないよ！」

[illegible]困惑の表情を浮かべる。

バッと立ち上がりながらリリスが困惑の表情で言ってくる
「この事は地球の皆にどう報告すれば……。六号が、女装した男の子のスカートを捲ってただなんて、真面目(まじめ)なアスタロトが聞いたら熱でも出すんじゃないかな……」
「それを言うならリリス様なんて、女装した男の子のちんこ見た女じゃないスか」
「よし、今日の事は僕達だけの秘密だ！　キメラ君は確かロゼと言ったね。ロゼ君、お姉さんがお小遣(こづか)いをあげるからこの事は忘れるんだ」
　リリスはよほど混乱しているのか、この星では使い道のない諭吉(ゆきち)札を押し付ける。
「ボクはロゼじゃなくラッセルですけど」
「なんだよもう、なんなんだよ！　君達は僕をからかって何がしたいん

だ！」
——ラッセルには洗濯に戻ってもらい、リリスが落ち着きを取り戻した頃。
「リリス様、いつまでも遊んでないでそろそろ働いてもらっていいっスか？」
「遊んでるつもりはないんだけどね⁉　ああもう、アリス！　アリース！　こっちにおいで、仕事の時間だ！」
　リリスが、俺達のやり取りを遠巻きにしながら他人のフリをしていたアリスを呼ぶ。
「……自分、アリンコの巣に角砂糖落とす作業で忙しいんで、ここに居ていいか？」
「いいわけないだろ！　というかアリス、六号の影響なのか僕に反抗的になってないか⁉」

この星に来てからというもの随分落ち着きのないリリスだが、仮にもキサラギの最高幹部、今こそアジト建設を任せてしまおう。
「じゃあ行きましょうかリリス様。エリート戦闘員の俺ですら苦戦中のアジト建設ですが、リリス様なら楽勝っス」
「いつからエリート戦闘員になったのか知らないけれど、まあ任せておきたまえ。キサラギの科学力と最高幹部の実力を見せてあげよう！」

4

リリスという最高幹部を得た俺達は、あの忌ま忌ましい森の下に――
「見たまえ六号、道が綺麗だ！　たったこれだけの事で多くの情報が得られるのが分かるかい!?」
ちっとも向かう事が出来なかった。

「道が汚物塗(おぶつまみ)れじゃない事から、ここの住人達は汚物を放置すれば病を引き起こすと知っているんだ。単に綺麗好きなだけかもしれないが、我々が思う以上にこの地の医療(いりょう)は発達しているのかもね！」

　リリスは先ほどからこの調子で、街のあちこちを見ては足を止めていた。

「もしくは、この星では過去に高度な文明が存在しており、それが一度滅(ほろ)んだものの、口伝で一部の知識が語り継(つ)がれ――」

　俺は、子供のようにキョロキョロしながら目を輝(かがや)かせるリリスに向けて、

「リリス様、この街のうんこ事情はどうでもいいっス。それより早く街を出ましょうよ。でないと、リリス様はいつまで経っても帰れませんよ」

「そうだった！　いやしかし、これは本当に興味深くて……。あっ！　見ろ六号、あんなところに戦車があるぞ！　アレが報告書にあったヤツか！」

　街中にポツンと置かれた戦車を見付け、リリスがタッと駆(か)けていった。

「おいアリス、子供みたいなお前の製作者をどうにかしろよ」
「お前こそ上司を何とかしろよ。自分より長い付き合いだろ」
――リリスを引き摺りながらどうにか街の入り口までやって来ると、街の外に駐められたデストロイヤーに子供達が群がっていた。
それを見たアリスが子供達の下へ駆けていく。
「おうこらガキ共、デストロイヤーに触れるんじゃねえ！」
ショットガンに続き、なぜかデストロイヤーにも異様な愛着を見せるアリスは、愛機に触られるのが我慢ならないようだ。
「なんだお前、俺よりチビなクセにガキって！」
「あっ！　このチビ、よくチャックマンと一緒にいるヤツだ！　あっち行けよ！」

「ほんとだ、あそこにチャックマンがいるぞ！　こいつも仲間だ、石を投げろ！」
　見てくれが同年代なせいか、子供達に舐めた態度を取られたアリスがキレた。
「上等だクソガキ共が、お前ら全員泣かせてやる！」
　アリスは投げ付けられた石を受け止め、一番背の高い少年に襲い掛かる。
「お前女のクセに生意気だぞ！　……あっ!?　痛っ、ちょっ、待っ……！　ぎゃーー！」
　タックルして少年を転ばせたアリスはそのまま相手の片足を抱え、手に持った石で弁慶の泣き所を叩き始めた。
「おい、やめろよチビ！　ピッケが泣いてるじゃんか！」
「分かったよ！　俺達が悪かったからもういいだろ、しつこいぞチビ！　もう

やめてやれよ！　やめ……、やめろって！　もうやめろって!!」
執拗（しつよう）に脛（すね）を攻撃（こうげき）し続けるアリスを、他の子供達が慌（あわ）てて止めた。
大人げないアンドロイドの姿にリリスが困惑しながら言ってくる。
「ねえ六号、アリスはいつもこんななのかい？　君の影響を受けたとはいえ、子供相手に喧嘩（けんか）するとかメンテが必要なレベルなんだけど……」
「影響もなにも、アイツは俺より短気で好戦的ですよ。ちょっとアリスに加勢してきます」
「行くんじゃない！　アリスもその辺にしときなさい――!!」
――ようやく街を出た俺達は、相変わらずあちこちをキョロキョロするリリスを連れて、目的地へと到着（とうちゃく）した。
魔（ま）の大森林。
最初その名を聞いた時は何を大仰（おおぎょう）なと思ったものだが、今ならとてもし

つくりくる。
　完成したアジトが爆発した原因は未だ不明。
　こういう時は優秀な上司に丸投げしてしまうに限る。
「リリス様。一応言っときますけど、この森ちょーヤベーっスから気を付けてくださいね」
「ちょーヤベー森がどうした、僕は黒のリリスだぞ。報告書によれば、魔獣に蛮族、自然災害だったね。そして完成したアジトが謎の攻撃を受けたが、その原因すらも分からない、と。そんなもの……」
　リリスはそこまで言うと転送端末を弄り出し、
「そんなもの、核の炎の前ではほとんどの問題が解決され――」

俺とアリスに取り押さえられた。

5

アジト建設予定地で、ふて腐れた顔のリリスが膝を抱えて座り込んでいた。

「この星が興味深いのは認めよう。でも僕は、一刻も早く帰りたいんだよ」

「そりゃあ俺だって帰りたいですよ。だからリリス様に頼んでるんでしょうに、横着せずちゃんと仕事してくださいよ」

とんでもない物を使おうとしたマッドな上司だが、これでも幹部の中では常識的な方だというのがキサラギの恐ろしいところだ。

「リリス様はたまにバカだからな。地球がヤバいから移住先を探してるって

のに、占領地を人の住めない土地に変えちゃ意味がねえだろ。無駄に余らせてる悪行ポイントで、まずはアジトを作ってくれ」
「ねえアリス、君って僕の事をちゃんと創造主だと認識してるかい？　だんだん扱いがなおざりになってきてるんだけど……」
　最高幹部なだけあって、普段チヤホヤされているのに慣れたリリスが、雑な扱いに戸惑いながらも前に出る。
「仕方ない、これも早く地球に帰るためだ。最高幹部の実力ってヤツを見せてあげよう！」
　リリスはそう言いながら、バッと白衣の前を広げてみせた。
　それに伴い、マッドサイエンティスト自らが体内に埋め込んだ、メタリックな輝きの触手群が姿を現す。

袖口や裾、そして胸元から這い出た八本の触手の先が、森へと向けられ輝き始め――

「まずは森を更地に変えて、敵の領域を削り取る！」

リリスが発した言葉と共に、光の奔流が森を襲った。

触手から放たれた光は、その宣言通りに森を更地へと変えていた。

見える範囲の森を一瞬で赤茶けた荒野に変える辺り、さすが最高幹部、頭がおかしい。

「続いては物量だ！　僕の持つ多大な財と悪行ポイントで物資を搬入！」

リリスが端末を弄りだしてから数分後、俺達が基礎工事を行ったアジト跡地に、次々と重量のある鋼板が送られてきた。

それらの鋼板をリリスから生えている触手が捉え、剥き出しの地面へと敷き詰めていく。

触手の先から放たれた青白い光が敷かれた鋼板を溶接して……。
「リリス様、前から思ってたんですけど、その触手便利過ぎませんかね。俺にも埋め込んでくれませんか？」
「この触手は脳に多大な負荷を掛けながら操っているんだよ？　君の頭では、触手の一本を操ろうとしただけで容量オーバーで大惨事になるよ」
俺の脳が足りてないって事かと問い詰めたいが、天才と呼ばれるリリスですら八本を操るので精一杯なのだ、多分本当に大惨事になるのだろう。
「六号に腕が八本あったとして、それぞれの腕で全く別の作業が出来るかい？」
見ればリリスの触手達は、それぞれが独立した作業をこなしている。
ある触手は溶接し、ある触手は鋼板を運び、またある触手はリリスの背

中をポリポリ掻いて、別の触手が口元にお茶のペットボトルを——
「……見てると簡単そうなんでやっぱ俺にも生やしてくれません？」
「い、嫌だよ。触手は僕のアイデンティティだからね。怪人イソギン男を生み出す際も随分葛藤したんだから」
　俺達が苦戦していたのは何だったんだという速度でドンドンアジトが建設されていく。
　と、その時だった。
「あっ！　リリス様、アイツらです、カチワリ族です！　連中は魔獣を追い立ててけしかけてきますからね。モケモケやミピョコピョコもチラホラ見えます！」
「……アリス、モケモケやミピョコピョコって、その名前はどうにかならないのかね」

と、リリスが突然そんな事を……、
「何言ってんだリリス様、モケモケとか可愛いだろ」
「……？　なんでアリスが魔獣の名前に関係してんの？」
　そんな俺の疑問に答えるように、アリスが言った。
「お前には、自分が現地語を意訳して脳に直接送ってると説明したろ。オークだのグリフォンだの、地球に似たような外見の生物データがあるならともかく、初見の新種は自分が勝手に名付けてるんだよ」
「なら俺もリリス様と同意見だよ。もっとマシな名前を付けてやれよ」
「君達、暢気な事言ってないで警戒しなさい！　来るよ！」
　リリスが警告を発すると共に、カチワリ族に追い込まれた魔獣がアジト建設地に向かってきた。
　リリスの触手群が作業を止めて、一斉に魔獣達へと向けられる。

「前々から思ってたんですけど、リリス様の触手ってどこから生えてるんスか？　気になるんで剥いてみてもいいですか？」
「いいわけないだろう！　戦わなくてもいいから、せめて邪魔だけはしないでくれ！」
　リリスは律儀にツッコむと、白衣を開いたまま前傾姿勢を取り、カッと目を見開いた。
　目標をその目で捉えたまま触手の操作に全神経を注いでいるのだろう。
　八本の触手の先からは、電撃やレーザー、超音波や弾丸に至るまで様々な物が放たれる。
「リリス様ってびっくり箱みたいな人だよな」
「自分もそう思うが黙っとけ。聞こえたら面倒臭いぞ」
「二人とも聞こえているよ！　そこに居ると邪魔だからあっち行ってて！」

脳みそをフル回転させている反動からか、目を充血させながらリリスが叫（さけ）ぶ。

俺達が大人しく後ろに下がると、目の前では魔獣達との戦端（せんたん）が開かれていた——

「ハハハハハハハ！　見たまえ、六号、アリス！　やはりキサラギの科学力は世界一だ！　魔獣や蛮族が為（な）す術（すべ）もなく逃（に）げ惑（まど）っているよ！」

重度のアニオタで軽々しく人をパシリに使い、天才ではなく紙一重（かみひとえ）でバカの方かもしれない陰（いん）キャだが、さすがは腐っても最高幹部。

リリスは満足そうに高笑いを上げながら、俺達があれほど苦戦した魔獣や蛮族をたった一人で圧倒（あっとう）していた。

この人のタチの悪いところは、使用する兵器の残弾制限が無い事だ。

体内に埋め込んだチップでキサラギ本部に常に位置情報を送り続け、エ

ネルギーや弾丸は使った傍から自動転送により補充される。
　この星に来る事になった大掛かりな転送装置も、リリスの武器への転送補給機構を基に作られたそうだ。
「むっ？　反撃に出るようだね！」
　次々撃破される魔獣の姿に、不利を悟ったカチワリ族が手斧を片手に前に出る。
　カチワリ族の数は二十名を超えるだろうか。
　そんな蛮族連中が大きく振りかぶり、リリスに手斧を投げ付け始めた。
　だが、投げ付けられた斧の殆どは届く前に撃ち落とされ、かろうじて到達した物も、リリスの傍で蠢いていた二本の触手に防がれた。
　その光景を見た俺は、リリスが昔、銃弾が飛び交う戦場を散歩するよう

に歩いて行ったのを思い出す。
「……相変わらず反則だなあ」
　思わず漏らした呟きに、アリスも呆れながら同意する。
「触手といい〝黒のリリス〟って名前といい、リリス様の方が魔王っぽいな」
　しかも、リリスはまだあれで本気を出していないのだから恐ろしい。
　手斧の投擲も効果が無いと知り、カチワリ族が撤退していく、そんな中。
　異変を感じ取ったのか、以前重機を穴だらけにした美少女が木々をかき分け現れた。
　その後ろには腰蓑を着けた仮面の集団、ヒイラギ族の姿も見える。
　まさにこの森の番人達のオンパレードだ。
「リリス様、特にヤベーのはそいつらっス！　ヒイラギ族が踊ったら気を付けてください！　あと、地面から生えてる美少女は弾丸撃ち込んできますか

ら！」
　リリスから遠く離れた場所からの忠告に、
「それがどうした、僕は黒のリリスだぞ。ヒイラギ族というのは、太陽光を使って攻撃するそうだね。なら……こうだ！」
　リリスは不敵な笑みを浮かべると、その姿が透けだした。
　高価な光学迷彩を惜しげもなく使い、敵の光学兵器を無効化する気のようだ。
「なあアリス、俺も光学迷彩が欲しい。アレ使えば、悪行ポイントだって稼ぎ放題だと思うんだ」
「使い道は覗きとか覗きとか覗きとかだろ。先に言っとくが、アレは風呂場

ては使えないぞ。湿気が多い浴場では表面に水滴が付いて迷彩効果が半減するからな」

マジかよ、いつか手に入れたい装備リストの最上位の物だったのに。

と、目の前では姿を消したリリスに戸惑っていたヒイラギ族が、何もない空間から突然放たれる攻撃を前に次々と撤退していく。

さらに、半裸の森の美少女が攻撃態勢に移るより早く、リリスからの銃弾を浴びて悲鳴を上げながら後退した。

「見たかね六号、これが黒のリリスの実力だ！　ちなみに今の攻勢で、僕は本来の力の十パーセントも出していないからね！」

「はいはい、余力を残して圧倒するリリス様凄いですね。でも、そうやってパワーを温存する系のヤツが百パーセントを出した時って、大概死亡フラグが

立ちますよね」
「今のは嘘だよ六号、実は半分ぐらい本気出してたから！　そうだね、これからは常に百パーセントで行くとしようか、相手を舐めるのは良くないからね」
　アニオタなだけはありそういった例を多数知っているからか、リリスが直ぐさま手のひらを返す。
　リリスは、中断していた建設作業に戻ろうと魔の大森林に背を向けながら。
「しかし、六号もまだまだだね。君は未来の幹部候補なんだ、この程度の相手に苦戦されては困るよ。……でもまあ、最高幹部の三人の中で僕を頼った判断だけは褒めてあげる」
　そう言いながら、楽しそうに白衣のポケットに両手を突っ込んだ。

「だから六号。君は悪の組織の戦闘員として、大きな悪事に手を染め、幹部になる覚悟を示すんだ。とはいえ僕は、君のヘタレなところも嫌いじゃ無い。急がなくてもゆっくりでいい、いつまでも待っててあげるからね」

俺をからかうようにイタズラっぽく笑うと——

遠く離れた森の奥から一条の光が迸ると共にアジトが吹き飛び、格好付けていたリリスが地を転がった。

6

翌朝。

「ようアリス。あのポンコツ上司はまだ寝てるのか？」

[illegible]

「起きてはいるみたいだが、テントから出ようとしねえ。ドヤ顔で決めたところにアレだからな。今日は引き籠(こ)もって出て来ないんじゃねえか？」

建設中のアジトの爆破(ばくは)で地面を転がされたリリスだが、咄嗟(とっさ)の触手(しょくしゅ)ガードで怪我(けが)はない。

だが体は無傷でも、決め台詞(ぜりふ)中の醜態(しゅうたい)は心への傷が大きかったようだ。

ラッセルが作った朝飯を持ってテントの前に来た俺は、

「リリス様、いつまで拗(す)ねてるんスか。大丈夫(だいじょうぶ)ですよ、リリス様がポンコツなのはキサラギの戦闘員なら皆(みんな)知ってますから今さらですよ」

「——ッ!?」

テントの中から何か言いたそうな息を呑(の)む音が聞こえてくるが、どうやら組織内での評価を知らないらしい。

[illegible]

モゾモゾと這いずる音と共に、テントの入り口から[illegible]が顔だけを覗かせた。
「……そういえば六号。ここに来た当初は深く気にしなかったけど、怪人トラ男や他の戦闘員の姿が見当たらないね」
冷静になったのか、今さらになってそんな事を尋ねるリリス。
「援軍にはリリス様が来るって言ったら、皆散って行きましたよ」
「な、なぜえ!? あれっ、僕ひょっとして皆から嫌われてる!?」
幹部の中で一番評判なんて気にしなさそうなキャラのクセに、リリスは今さらになってそんな事を言い出した。
「…………」
「ねえ六号、そこは黙り込まないでそんな事ないですよって言ってくれない!? ど、どこが悪いの!? 極力直すから、僕の悪いところを教えてく

れ！」
　どこがも何も、パシらせるのと頭がおかしいのさえ何とかしてくれればいいのだが……。
「そうですね、色々言いたい事はありますが……。まずリリス様は、アスタロト様やベリアル様に比べ、色気が圧倒的に足りてないですよね」
「ぶっ飛ばすぞ」
　美少女ではあるが貧相な体のリリスが不穏な事を口走る。
「極力直すって言うから教えてあげてるんじゃないっスか。じゃあいいですよ、でもパシリに出した戦闘員に、買ってきた食べ物の中に変な物入れられても知りませんよ」
「ごめん、頑張って直すから続きをお願い！　でも色気はどうしようもなくない!?」

テントから這い出してきたリリスが涙ぐみながら縋り付いてくる。
「リリス様は、いつも菓子（かし）ばっか食ってるから育たないんスよ。貧相な体はもう手遅（ておく）れ感しかありませんから、露出（ろしゅつ）を増やす方で攻（せ）めるのはどうです？」
「手遅れ感とか止（や）めてくれない？　僕は科学者だ、そこに一パーセントでも可能性が残されていれば、運命にだって抗（あらが）ってみせるさ」
　何をちょっとカッコイイ感じに言ってるんだろうこの人は。
「でも、露出か……。いやしかし、肌（はだ）面積を増やすのはバカっぽく見えやしないかな？」
「リリス様なら今さらっスよ。評判は落ちるとこまで落ちてますから、後は上がっていくだけです。野暮ったい白衣はやめましょう、そんなもん着たって賢（かしこ）そうには見えませんよ」

「もうちょっと歯に衣着せてくれないかな！　分かったよ、ちょっとだけ露出を増やしてみるよ。他にも何か思い当たる原因はあるだろう？　露出度が低いだけで相手にされないというのなら、さすがに戦闘員達をシバかなきゃいけなくなる」

　他にといえば、後はまぁ……。

「俺達をパシらせたり、マッドな研究の実験体に使おうとするのさえ止めてもらえれば……」

「むしろそっちが原因だよね!?　露出云々（うんぬん）は関係ないよね!?　この話はもういいよ、今日こそアジトを建設するよ！」

　今のやり取りで少しはやる気が湧（わ）いてきたのか、リリスが朝飯を受け取りかき込んだ。

――アジト建設予定地。
もはやすっかりお馴染み（なじ）になったこの場所だが、これまでのアジト爆発（ばくはつ）の正体が判明した。
アリスいわく、昨日、アジトを狙撃（そげき）してきたのは新種の魔獣（まじゅう）だそうだ。
森の奥が光ったかと思えば、次の瞬間（しゅんかん）にはアジトが吹き飛びリリスが地に転がっていた。
光が灯（とも）った場所を見てみれば、地面から顔を覗かせた大型の爬虫類（はちゅうるい）がこちらを向いていたらしい。
奇（く）しくもアリスが言っていた、破壊（はかい）される事を前提にアジトを建てて、敵の正体を見極（みきわ）める作戦が遂行（すいこう）された形だ。

「……さて。用意はいいかい、六号、アリス！　敵は地中に身を隠し、遠距離から攻撃してくる大型魔獣。正体さえ分かれば対処は可能だ！」
リリスの本来の戦い方は大量の近代火器による遠距離砲撃。
圧倒的な火力で広範囲を焼き払い、焦土化するのが役目なのだが……。
「森を焼く程度ならともかく、ヤベーやつは使わないでくださいね？」
「ヤベーやつで焦土化するのが何だかんだで一番効率いいのだが、それはスマートじゃないからね。だが、こんな事もあろうかと！　昨夜君達が寝こけている内に、小型偵察衛星を打ち上げておいた。既にアリスの言う標的の潜伏位置は捉えてある」
さすが腐っても最高幹部、そこら辺は抜かりがない。
何かの装備を要請するのか、メモ書きを送っているリリスに向けて。
「その先読み能力をどうしてもっと活かせないんスか？」

「うるさいよ六号、常人に天才の考えなんて分からないさ。さて、敵の攻撃手段は分からないものの、そんなのは倒してから調べればいい。そこで……『超振動対潜爆雷』――！」

　リリスの言葉に合わせるようにヤベーやつが転送された。

　ウキウキしながら小型爆雷を手にするリリスに、俺は呆れながら口を挟んだ。

「リリス様、そんなもん使ったらこの辺りの地盤が緩くなりますよ。開拓予定地って言ってんじゃないスか。地質調査もまだなのに、下手すりゃ地震が起きますよ」

「それがどうした、むしろいずれ起こる予定の地震なら、人を移住させる前に人工的に起こしてしまえ。その方が被害は少なくて済むってものさ。科学の力は凄いんだ」

のスは決しハカ」

超振動対潜爆雷。

長年地震に悩まされた日本人には特に忌避された兵器の一つで、それもそのはず、何度も人工的な地震を引き起こした爆雷だ。

大人気のモンスター狩猟ゲーム、モンスターパンダーで遊んでいたリスが、地中のモンスターを音響爆弾で地上に引きずり出すのを見て、パク……ヒントを得て再現した。

主に地下基地攻撃用に作られた兵器だが、地盤調査を行い、数十年以内に確実に地震が起こると予想された地で何度も使われ、その度に抗議団体が集結したものだ。

こいつの使用を巡っては、いずれ起こると予想される地震なら人を避難させてとっとと起こした方が安全派、放っておけばずっと地震が起こらないかもしれないのに自然を制御するなど罰当たり派、被災者の心情を考える

に地震を引き起こす事自体が不謹慎派が未だに争っている。
　と、それまで黙っていたアリスが口を開いた。
「その通りだリリス様、科学の前に不可能はねえ。いつか人類は、どんな災害だって克服出来るようになる。たまにポンコツだがいい事言うな」
「当然だ、自然災害に抗い続けてきた人類の歴史に、勝利を……。ねえアリス、君本当にメンテナンスが必要じゃないか？　僕は創造主なんだけど……」
　科学崇拝者達が盛り上がる中、不穏な空気を察知したのか森の一部が動き出す。
　木々が急に盛り上がったかと思うと、その隙間から大型の爬虫類が顔を出し……。
「どうやら野生の勘で危険を察知したようだね。だが遅い！　爆雷、投下

――！」

リリスの触手が爆雷を掴み上げ、それを爬虫類の頭上にぶん投げた。
対象との距離は約二キロほど。
そんな長距離にもかかわらず空高く投げられた対潜爆雷は、狙い違わず標的の頭上に落下すると――

キンという超音波音が広がると共に、大地が大きく震動した。

地揺れはほんの数秒程で、俺達の目の前には、対潜爆雷の超音波を受けた爬虫類が地中から飛び出しのたうち回っている。
「……おいアリス、この人本当に地震引き起こしてくれやがったよ」
「さすがだなリリス様、悪の組織の最高幹部はやる事違うぜ」

「待ってくれ、今の揺れは地震じゃない、揺れは凄く短かったし！　それに悪行ポイント加算のアナウンスも流れてないし！　と、ともかく、目標は地上に引きずり出せた！」
若干の焦りを見せながら、リリスは未だ地を転げ回る爬虫類へと触手を向けた——

7

大型爬虫類にトドメを刺すと、波が引くように他の魔獣が下がっていく。
その様子を見るに、あの爬虫類はこの辺のボスだったのかもしれない。
科学組二人が、仕留めた爬虫類を調べたいというので、標的の下へと向かおうとした、その時だった。

かおうとした　その時だった
「あれえ!?」
　自分の端末を見たリリスが、突然驚きの声を上げた。
「どうしたんスかリリス様、やっぱ今の地震はリリス様のせいなんスか？　悪行ポイントが大量加算されてました？」
「違う！　さっきも言ったけど、ポイント加算のアナウンスは流れてないから！　でも、一応確認してみたら、なぜか僕の悪行ポイントがメチャメチャ減ってるんだけど……」
　呆然としながら端末を何度も確認するリリスに向けて、アリスが言った。
「この星にいる間は地球産の物資はどれも悪行ポイントが必要になるぞ。つまり、リリス様が戦闘した際、自動的に補充される弾丸やら、光学兵器なんかのエネルギーカートリッジその他の分が引かれたんだろ。昨日の戦闘で

も派手に弾丸ばら撒いたからな」

「ちょっと待って、それって幹部の僕にも適用されるの!?」

地球にいた頃なら、リリスが使う弾丸やエネルギーカートリッジ代は、リリスの銀行口座から自動的に引き落とされていた。

しかしこの星では、現金で買えば安く手に入る物でも、全て悪行ポイントで精算される。

元々は、俺に嫌でも悪事を働かせるための措置らしいが……。

「ふざけるな！　僕の強みは、武器弾薬をほぼ無尽蔵に使える事なんだぞ!?　この星にいたらあっという間に無力化されるじゃないか！」

自分達で決めた規則なのに、逆ギレしてくるクソ上司。

「何がふざけんなだ、元はあんた達が決めたルールだろうが！　日頃ゴロゴロしてるリリス様だけど、この星に来た以上はタップリ働いてもらう。悪行

ポイントを使い果たして、役立たずになったら日頃の借りを返してやるからな！　俺の苦労をちっとは分かれ！」

「や、やだああああああああああああ！」

——公園に帰ろうとするリリスを、脅したり宥めたり煽てたりする事一時間。

ようやく機嫌を直し、標的の下に向かった面倒臭い上司が呟いた。

「大きいね、恐竜サイズじゃないか。どうやってこの巨体を支えているのか……」

リリスが驚きの表情を浮かべながら、頭部を銃弾に貫かれ、大地に横たわった大型の爬虫類を見上げている。

見た目は巨大なトカゲそのもので、恐竜と言われても疑わない大きさだ。

「巨大トカゲ、カッケーな。おいアリス、こいつの肉食ってみようぜ。そんで、地球に帰ったら恐竜ステーキ食ったって自慢するんだ」

「頑丈な体の戦闘員だからって、得体の知れない物食うのはやめとけよ。……ん？」

トカゲの体をペタペタ触っていたアリスが首を傾げる。

「どうした？　お前も恐竜ステーキ食いたいのか？」

「自分は飯は食えねえよ。ほら、こいつを触ってみろ。肌の質感が金属質だ」

言われてトカゲに触れてみると、硬質的でヒンヤリしている。

興味を示したリリスが皮膚サンプルを採取する中、俺はトカゲの顎を開いてみた。

「「あっ」」

トカゲの口腔内を見た俺とアリスが声を上げた。

トカゲの口腔内を見た俺とアーシャた声を」にた

「どうしたんだい？　……ほほう、これはこれは……」

同じく口の中を覗いたリリスが、興味深そうな顔で感嘆する。

トカゲの内部はメカだった。

口の中には収納式の砲塔らしき物があり、アジトが吹き飛ばされたのはこれを使ったのだろうと推測される。

と、俺はトカゲが顔を覗かせていた地面の穴が、どこかメタリックな事に気が付いた。

「リリス様リリス様、こいつが収まってた巣穴、なんかおかしくありません？」

「……どう見ても高い技術による人工物だね。というか、何かの施設の入り口のようだ」

リリスは興味深そうにそう言って、触手の先を地面に向ける。

音波を使って地中をサーチしているのだろう。

「……ハハッ。ハハハハハ！　六号、アリス、聞くがいい！　この大地には巨大な地下施設が広がっているようだ！　これは面白くなってきたぞ！　戦闘員各位には、施設の取り扱いはくれぐれも注意するよう言っときたまえ！　この施設に傷を付けた者は厳罰に処すとね！」

高笑いを始めたリリスをよそに、俺とアリスは大穴の中を覗き込み。

「……リリス様が使った対潜爆雷のせいで、施設の中がぐちゃぐちゃっス」

「……皆には、取り扱いに注意するようにとだけ、伝えといて…………」

二章

VS空の王！

1

謎の施設を見付けた後、これ以上ポイントを使いたくないと駄々をこねるリリスを煽り、ヤバそうな魔獣を軒並み追い払って公園に帰った、その翌日。

現在はアリスの指揮の下、他の戦闘員達の手により、リリスが大盤振る舞いした重機と装備で建設を進めている。

そして、俺はといえば……。

「どうだい六号。白衣を半袖（はんそで）にしてちょっと露出（ろしゅつ）を増やしてみたよ。どう思う？」
「リリス様はやっぱバカだなーと思います」
例の公園にて、他（ほか）の戦闘員達にリリスのお守（も）りを押し付けられていた。
「君の助言に従ってみたのに、バカとはなんだ！」
「俺が言ってるのはヘソ出してみたり胸元（むなもと）チラ見せしてきたり、そういった方向の露出ですよ。白衣を夏服に変えただけじゃないっスか」
俺の言った事をちっとも理解していないリリスは、白衣の袖をさらに捲（まく）り上げ、チラチラと二の腕（うで）を見せびらかしていた。
そういう俺は、いつもの戦闘服を脱（ぬ）いで黒のスーツに身を包んでいる。
今日はリリスの希望により、この国のトップであるティリスと会談する事になった。

になった
キサラギとこの国の関係は、今のところ微妙な均衡の下に成り立っている。
幹部連中としてはこの国を、外交交渉で血を流さずに取り込む気なのだ。
「ところでリリス様、この国をどうやって乗っ取るつもりっスか？」
目の前の開発者より賢いアリスが、既に散々交渉していると思うのだが。
「それはもちろん圧力外交さ。我々は、六号を始めとした戦闘員の派遣により、この国に多大な貸しがあるからね。そこら辺で難癖付けて、無理な要求を吹っ掛ける！　要求が受け入れられないのなら、我が組織の傘下になれと脅してやるんだ！」
「ヒュー！　リリス様、悪いっスね！　さすが陰湿な幹部アンケートと腹黒

い幹部アンケートで一位なだけありますよ！」
「フッ、よしたまえ六号、褒めてもお小遣いぐらいしか……。その、僕の知らないアンケートって誰がやってるの？　怒らないから教えてくれない？」

　――グレイス王国、ティリスの部屋。

「ええ、ええ！　キサラギの上役の方を、それはもう心よりお待ちしていました！」
「すいませんごめんなさい、本当に申し訳ありませんでした！　でも言わせてもらえば戦闘員達の悪行は、貴国を守るために必要な事と言いますか……」
　城への道中、俺達の日頃の行いを聞いたリリスがぺこぺこと頭を下げていた。

「ええ！　悪行ポイントでしたか？　それの事については存じ上げており
ます、そのため、戦闘員の方々の些細な悪事は目こぼしするよう命じており
ます」
「あ、ありがとうござ……」
「ですが！」
　キサラギが誇る腹黒科学者は、腹黒王女の前に劣勢だ。
　それもそのはず、こちらには責められる攻撃材料が多過ぎる。
「ですが、我が国のアーティファクトを直してくれたと感謝をすれば、取り返
しのつかない祝詞を登録し！　使者の護衛として他国に送れば戦争の切っ
掛けを作ってきたり！」
「ごご、ごめんなさいごめんなさい！」
　ダメだこの上司、アリスの方がよほど交渉の腕が立つ。

「先日は私の寝室であなたの部下が、寝ている私の隣でジェンガで遊んだり焼き肉パーティーを開いたり、挙げ句の果てにはトイレ代わりにしようとしたり！　なぜ乙女の寝室で全裸で排泄しようとするのですか⁉　意味が分かりません、その理由を教えてください！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　僕にも意味が分かりません！」

さっきまでの強気な自信はどこにいったのか、現在のところボロ負けだ。

頼りない上司に向けて、俺は助け船を出す事にした。

（リリス様リリス様、俺の華麗な活躍をもっと前面に押し出さないと。俺、商売敵の幹部級を葬ったりしましたよ）

「そうだ、ウチの六号の活躍を考慮していただきたい！　魔王軍とやらの幹部を倒したのは、多大な功績だと思うがね！」

俺の言葉を受けリリスが途端に強気に出る。

俺の耳打ちを受けアリスが途端に強気に出る。

「魔王軍幹部討伐(とうばつ)に関しては、アリス様に多額の謝礼をお支払(しはら)いしましたが……」

「えっ」

そしてアッサリ返された。

そういえばアリスから、すげー額のボーナスが出たとか、そんな事を聞い

た気もする。
　俺に渡すと全部使ってしまうという事で、毎日のお小遣いとして分割で貰っているのだ。
「そもそも我が国は、六号様を始めとして、戦闘員の方々には防衛費という形で毎月金銭を支払っております。ええ、通常の騎士以上の額を！」
「あっ、そういやそうだ！　リリス様、この国から貰ってた給料の方がキサラギより多いんスよ！　長年勤めてきたのにそれっておかしくないですかねえ!?」
　その言葉にリリスがビクッと震える。
　以前送った報告書の中で、この国からの給料の方が高いと書いた事を思い出したらしい。
「――そうですね。自分で言ってから気が付きましたが――六号様、いっそ

他の戦闘員の方々も引き連れて、我が国の騎士に返り咲くというのは……」
「今日は挨拶に来ただけだからね、六号、そろそろお暇しようか！　では、今後ともキサラギをよろしくお願いいたします！」
　俺は、そう言って逃げようとしたリリスを捕まえた。
「以前、アリス様に打診した時はすげなく断られてしまいましたが、改めてお願いします！　技術を！　我が国に、貴方の技術を！」
「待遇改善を希望します！　給料上げろ！　休みを寄越せ！　移籍するぞコラァ！」
「分かったから！　二人とも分かったから落ち着いて！」

2

　城からの帰り道。

「どうしてくれるんだ、六号のせいで仕事が増えたじゃないか。というか、一体どんな人生送ればお姫様(ひめさま)の部屋でうんこしようなんて考えるんだ」

「俺だけのせいじゃないっスよ。ティリスの部屋でうんこしようとしたのは十号っス」

　ティリスからの技術移転要請(ようせい)を受け入れたリリスが、先ほどから愚痴(ぐち)を零(こぼ)していた。

「僕の部下はどうしてこうも問題児ばかりなんだろうね」

「上司に似たんじゃないっスかね」

　俺とリリスが軽口を叩(たた)き合っていた、その時だった。

「そんなしょっぱいヤツが手柄になるか！　ほら、もっとあるだろう色々と！　この街に入り込んでいるスパイだとか、誰もが名前を知る有名な犯罪者だとか!!」

聞き覚えのある声がする方を見てみれば、怪しげな風体の男に絡むスノウがいた。

「そうは言ってもスノウさん、俺の情報は主に魔獣に関する物ばかりですぜ。犯罪者情報なんて、手に入った傍からサツの旦那方に売っちまいますよ」

怪しげな風体の男は情報屋か何かだろうか。

「そこを、無理を承知で頼んでいるのだ！　耳のいい貴様の事だ、私が減給

されたのは知っているだろう？　金が無いんだ！　長い付き合いだろう、賞金の懸かった犯罪者情報を譲ってくれ！」

「いや、だからそんな都合良く……。って、心当たりがありますぜ。誰もが名前を知る有名な犯罪者」

　情報屋のその言葉に、スノウはパアッと顔を輝かせ。

「ぜひ頼む！　ソイツは誰で、どこにいる!?」

「罪人の名はチャックマン。スノウさんの後ろに立ってます」

　言われるままに振り向いたスノウは、俺を見るなり襲い掛かってきた。

「――六号、突然襲ってきたこの子は何なんだ？　どうやら知り合いのようだが、友達はちゃんと選ぶ事をオススメするよ」

「コイツは俺の部下ですよ。スノウっていうクソ女っス」

「ふむーっ！　むーっ！」
　俺の足下には、リリスの触手で口元に至るまで簀巻きにされたスノウが転がっていた。
　犯罪者呼ばわりしてくれた情報屋の男を俺が威嚇し追い払っていると、マジマジとスノウを観察していたリリスが言った。
「……なるほど、この子が六号がスパイであると見破った子か。君の事は報告書で知っているよ。ようこそ秘密結社キサラギへ！　我が組織は才ある者を歓迎するよ！　僕はキサラギ最高幹部の一人、黒のリリスだ！」
「むうっ!?　ふむむむ、ふむむーっ！」
　何か言いたそうなスノウだが、自分はこの国の騎士でありキサラギに入るつもりはないとか、そんな感じの事でも吠えているのだろう。
「リリス様、ソイツは俺の部下って言ってもキサラギとは関係ないですよ。所属自体はこの国のままで、ティリスが俺の手伝いとして下に付けてる女っス。

コイツ、やたらと突っかかってくるんですよ」
　それを聞いたリリスは、気の強そうなスノウの目を見て、楽しげに笑みを浮かべた。
「なるほど、この子からは悪に屈しないという強い意志が感じられるね。こういった、正義感に溢れる者を悪堕ちさせた時に得られる快感と悪行ポイントはひとしおなんだよ！」
「むううううう！　ふむうううううううううう！」
　目に怒りの意思を宿らせながら、呻き声を上げるスノウ。
「ハハハハ、いいぞ、素晴らしい人材だ！　せいぜい足掻いてくれたまえ、我らの軍門に降る際はそっと目を閉じるがいい！　……さて、まずは家族だ。六号、この子の家族構成を調べたまえ。こういうヤツは、家族を引き合いに出されると案外脆いものなのさ！」

「コイツ、確かスラム生まれの孤児（こじ）なんで、家族はいないと思いますよ」
「ふむっ！」
　俺とスノウの反応に、高笑いを上げていたリリスが動きを止めた。
「家族作戦はダメ、と……。次だ！　報告書によると、君は騎士だったね。騎士の本分とは守る事。ならばそれを見せてもらおうか。……という事で六号にも協力してもらう！」
「あっ、何するんですかリリス様！　これはシャレにならないっスよ！」
　スノウと同じく触手で簀巻きにされた俺を前に、リリスが重そうな石を拾い上げた。
「いいかい？　今からこの石をロープで縛（しば）って吊（つる）し上げる。石の下には六号の頭を置くんだ。そして、スノウ君にはロープの先を咥（くわ）えてもらおうか！」
　コイツなんて事言い出すんだ。
「待ってくださいリリス様、それじゃ俺の頭が大変な事になるじゃないっス

「待ってくださいリリス様、それじゃ俺の頭が大変な事になるじゃないですか！」

「君の頭は既に大変な事になっているから問題ない。それより六号、よく見ておきたまえ。弱者を守ると綺麗事をのたまう者の、追い詰められた時の行動を！　僕はね、そういった連中の本性を曝け出してやるのが大好きなのさ！」

やっぱこの人は歪んでるなぁ。

ウキウキしながら準備を始めるリリスだが、俺もちょっとだけ気になるところだ。

というのも目の前に転がる簀巻き女は、以前俺にキスをかました事がある。

[illegible]

言ってみればツンデレに一番該当する女だ。
そう、内心では心憎からず想っている俺のため、もしかしたら全力で抗ってくれるかもしれない。
準備を終えたリリスは、マッドサイエンティストに相応しい笑みを浮かべながら、楽しげにスノウに告げた。
「六号の頭の無事は君の手に委ねられる事になる。……大切な仲間。親愛なる友人。最愛の恋人。君は、そういった存在と自らの命を天秤に掛けた時、どちらを選ぶ？」
俺の頭上には空中に持ち上げられた触手を支点にして、ロープで縛られた石がある。
リリスはスノウの口元の触手をどかし、ロープの先を差し出すと。
「一分だ。君が一分耐えきったなら」

リリスが最後まで言い終えるより早く、スノウは引ったくるようにロープを咥えると、上半身を反らせてロープを引っ張り迷う事なく口から離した。

「痛ああああい！」

「こ、こらっ、なんて事するんだ君は！　六号、いい音がしたけど大丈夫か!?」

頭部に大きめの石を落とされた俺は、身をよじって抗議する。

「大丈夫なわけねーだろ、こんなの分かりきってる事じゃねーか！　リリス様、触手解いて！　この身動き取れない簀巻き女をエロ同人みたいな目に遭わせてやる！」

頭にたんこぶを作った俺は簀巻きのままゲシゲシとスノウを蹴る。

「誇り高いグレイス騎士は、決して悪には屈しない！」

「テメーふざけんな、普段は騎士らしさの欠片もないクセに！　大体お前、石を落とす前にロープ引っ張ってから落としたろ！　わざと高い所まで持ち上げて落としただろ!!」

「それがどうした、犯罪者め！　私の人生が下り坂なのは、お前達に関わってからだと悟ったのだ。何がキサラギだ、悪の組織だ！　お前らとはもう縁を切る！　あっちへ行け！」

　俺と同じ姿のまま、文句を垂れ流しながら蹴り返してくるスノウに向けて、

「何なんだろうねこの子は……。家族作戦も正義の心を挫く作戦も通用しないとなると、後はお金か物で釣るぐらいしか……」

リリスが呟いたその言葉に、スノウがピタリと動きを止めた。
「……何もグレイス王国を抜けろとは言わない。まずはお試し戦闘員というのはどうかな？　六号のように、グレイス王国からもウチからも、両方から給料を貰えばいいんだ」
「くっ……！　元グレイス王国近衛騎士隊長の私が、そんな甘言に惑わされるとでも思うのですかリリス殿！　他には？　キサラギには、他の特典はないのですか？」
変な敬語を使い出した簀巻き女に頬を引き攣らせながらリリスが続ける。
「キサラギは給料は安いが福利厚生はバッチリだ。傷病手当に老後の保障、怪我で退役した後は、のんびりと平和な生活を送ってもらう。後は……確か君は、刀剣の類いが好きだったね？　我が組織にはこの星に無い名剣の

数々が」

　リリスが最後まで言う前に、スノウがそっと目を閉じた。

3

　解放されたスノウに案内され、俺とリリスはある施設にやって来た。

「ここが浄水施設だ。今はほとんど使われていないが、一体何をするつもりなんだ？」

　この国では水が貴重だ。

　今はラッセルが水を生成しているが、アイツの身に何かあれば今のシステムは崩壊する。

　案内された浄水施設には大きな井戸が併設されているが、中を覗けば涸

れ果てていた。
「キサラギの技術を使い、涸れた井戸を復活させるのさ。水が出なくなったのは浅い層だからだろう。深部を掘れば水は出るはずだ」
どうやらリリスは、先ほどティリスと交わした約束を果たすようだ。
俺は井戸を覗き込んでいるリリスに囁きかける。
（リリス様リリス様、技術移転なんて勝手に進めちゃっていいんスか？）
（兵器なんかの技術を要求される前に、移転しても問題ないものを教えるのさ。なに、深部の採掘など我々からすれば大した技術でもない。現地人達に我々の高度な技術を見せ付けてマウントを取るんだ。高度な科学技術は無知な人間には魔法に見える。無知蒙昧な現地人達に神のごとく崇めてもらおうじゃないか！）

さすがは悪の組織の大幹部、ナチュラルに現地人を見下してやがる。
（考え方は最低ですが俺も崇められたいですリリス様。取り巻きになってもいいっスか？）
（邪魔にならなければ構わないよ。僕が葉巻きを咥えたら火を付ける役をやりたまえ）
（リリス様はタバコ吸えないじゃないっスか）
　ヒソヒソ話を始めた俺達に、スノウが首を傾げて呟いた。
「井戸を復活させてくれるのはありがたいが、ここは止めた方が良いと思うぞ？　深部を掘ろうとしたところ、地面から黒く粘り気のある水が湧き出したらしいのだ」
「スノウ君と言ったね、ちょっとこっちで話をしようか」
「リリス様、俺高級マンションで綺麗な姉ちゃん侍らして、毎日シャンパン飲

んで生きていきたいっス」
　目の色を変えた俺達に、スノウが若干及び腰になりながら、
「そのような物が何かの役に立つのか？　一応言っておくが、掘り起こされた資源は我が国の物であって、上の許可が必要なのだが……」
「スノウ君。その黒い水は今の君達にとって無用の長物だが、我々にとっては有用な物だ。これを使いこなすには長い年月をかけた技術が必要になるが、我々に売ってくれれば互いにＷＩＮ－ＷＩＮな関係になれるわけで……」
　真面目な顔で説得を始めたリリスに向けて、
「リリス様リリス様、コイツにはこう言った方が早いっスよ。……なあスノウ、黒い水とやらの事を忘れてくれたら、この取引で得られた金の一部をお前にやろう。あとは……どんな日本刀が欲しい？」

「黒い水とはなんの事を言っているのか分からないし記憶にないか　こないた
トラ男殿(どの)から貰(もら)ったヤツよりちょっと長いのがいいな。ああ、ここを掘るなら今すぐ上の許可を貰ってこよう。作業を進めてくれて構わないぞ」

態度を豹変(ひょうへん)させて駆(か)け出していくスノウを見送りながら、リリスが言った。

「ねえ六号、部下はちゃんと選んだ方がいいと思うよ」

「でもアイツ、俺の隊の中で一番キサラギに向いてると思うんですよ」

金と手柄(てがら)に意地汚(いじきたな)いがその分とても分かりやすい。

と、気を取り直したリリスは不敵な笑みを浮かべると。

「まあ何にせよ、彼女から掘削(くっさく)の許可は得た。この程度の深さで湧き出してくるという事は、この地の原油埋蔵(まいぞう)量は期待出来る！　フハハハハ！　六号、僕達は億万長者だ！」

「さすがっスリリス様、キサラギ本部に報告する気が一切無いとこがカッケ

ーっス」
「そうだろうそうだろう！　もっとさすリリしてくれていいんだよ！」
　採掘した原油をどうやって精製して売るのかは知らないが、仮にも最高幹部の一人、裏ルートの一つや二つはあるのだろう。
　リリスは嬉々（きき）としてメモを転送すると、送られてきた採掘用の機材類を、触手を操（あやつ）り組み立てていく。
「では、早速試掘といこうか！　油田の質と埋蔵量によっては、この地に巨（きょ）大（だい）な石油プラントを造る必要があるからね。ハハハハハハハ！　夢が広がるね！　……おやっ？」
　テンションマックスのリリスが採掘を始めると、黒く粘り気のある液体が井戸の底にジワリと広がった。
　だが、湧き出してきたその液体はどうにも石油っぽくない。

というのも、昔中東地域の制圧に派遣された際、石油プラントを見た事があるのだ。

「リリス様、これ本当に石油っスか？」

「お、おかしいね。僕もなんか違うような気が……」

なんだろうこの違和感は。

ただの液体だというのに、これまでに培った勘が何だかヤバいと訴えかけていて……。

――と、黒い液体が突然リリスに襲い掛かった。

「ふわあああああ!?　ちょっ、何コレ!?　六号！　六号ー！」

「リリス様、これスライムですよ！　美少女の服だけ溶かして裸に剝くエロいヤツっス！」

飛び掛かってきたスライムを触手でガードしながら、リリスが涙目で訴えかける。

「マズイよ六号、このままじゃエロゲーみたいな目に遭わされる！　スライムに効きそうな武器を送って貰って！」

井戸から湧き出し続けるスライムは既にかなりの量になっている。

それらを全てガードするのは、触手を総動員しても厳しいのだろう。

「すんませんリリス様、滅多に見られないシチュエーションなんで、もうちょっとこのまま見てていいっスか」

「スライムを撃退した後、僕にどんな目に遭わされてもいいのなら見ているといいさ！」

身の危険を感じたので素直に従っておこう。

身の危険を感じたのでここは素直に従っておこう。

……いや、待てよ？

「大変ですリリス様、俺、悪行ポイントの使用を停止されてます」

「あああ、そういえばそうだった！　六号、白衣のポケットからメモ取って！　僕の転送装置とポイントを使っていいから！　今は触手の操作で目が離せない！」

極度の集中で目を血走らせながらのリリスの言葉に、俺は白衣に手を伸ばし――

「これって後でセクハラだの何だの言い出しません？　リリス様を助けて訴えられるとかシャレにならないんスけど」

「訴えないから！　というか白衣の横のポケットだよ、一体どこをまさぐる気なんだ！」

白衣のポケットからメモと転送装置を取り出すと、スライムに効きそうな武器を……。
「スライムって何が効くんですかね。ナメクジみたく塩ですか？」
「そんなの知らないよ！　火炎放射器か液体窒素辺りでいいよ！」
　火炎放射器に液体窒素、っと。
「リリス様、俺、追えてない漫画の新刊欲しいっス。ついでに頼んでもいいですか？」
「幾らでも頼めばいいさ！　六号、後で覚えておく事だ！」
　残念、俺は物事を忘れる事にかけてはアリスに感心されるほどだ。
　リリスが涙目で防戦する中、俺が鼻歌混じりにメモっていた、その時だった。

「な、何をやっているのだ、お前達は！」
上の許可とやらを取りに行っていたスノウが魔剣を抜いて駆けてくる。
そのまま燃え盛る刀身で斬り掛かると、熱を嫌がったのか、スライムは井戸へ潜っていった。
「六号、速乾セメントを本部に依頼！　この井戸は封印だ！」
荒い息を吐きながらのリリスの命令に、俺はメモにペンを走らせる。
「ま、待て、それでは私への分け前と日本刀はどうなるのだ！」
「あの黒い水は俺達の求めていたヤツとは違ったんだよ。だから……」
メモ書きに日本刀一振りと書き加え、それを本部へ送りつける。
すると、大量のセメントやシャベルと共に、漫画の新刊と日本刀が——
「ほら、日本刀はやるからさ」
「……

ーやった！」
「よーし六号、ちょっとこっちに来て貰おうか！」
――井戸を埋め立てた俺達は、スノウの案内で別の涸れ井戸にやって来ていた。
「しっかし、黒い水だなんて曖昧な言い方じゃなく、スライムならスライムと最初から言っとけよな」
「そんな事まで知るか。黒い水が湧き出したから井戸掘りを中止したとしか聞いていない」
スノウはそう言いながら、リリスの悪行ポイントで手に入れた刀を眺め、ニヤニヤと危ない笑みを浮かべている。
そして……。
「ハハ、御機嫌直してくださいよリリス様。可愛い部下のお茶目じゃないっ

こいた派様姫画してください。リリス様、可愛い部屋のお着替えしない
スか」

「くう……。この男、ぶん殴りたい……。というか、もう井戸掘りはやらないぞ。またさっきのヤツが湧いたらどうするんだ」

面倒臭い事を言い出したリリスに向けて、

「む……。まあ、あんな目に遭ったのだから仕方がないか。それに、井戸を掘るのは素人には難しいとも聞く。我が国のために協力する姿勢を見せてくれただけでも……」

笑みを浮かべて言い掛けたスノウの言葉を、俺は片手を突き出し遮った。

「バカ言ってんじゃねえ！　ウチのリリス様に不可能なんてあるわけないだろ、井戸なんてサクッと掘ってやるよ！　今からさすがはリリス様ってとこ

を見せてやるから、観衆を集めろや！」
「ちょっ!?」
リリスの気持ちを勝手に代弁した俺の啖呵に、今度の井戸は街の中心部であるためか、野次馬達が集まってきた。
「リリス様、めっちゃ見られてます。これはさすリリされるチャンスですよ」
「ああクソ、分かったよもう！　まあ、水は人類にとって最も大切な資源だからね。街の外に広がる荒野や砂漠地帯も、いずれ肥沃な大地に変えてみせよう！　科学は自然を凌駕するのだ！」
かつてリリスは、支配地に置いたサハラ砂漠を緑化しようとした過去がある。
納豆菌を使って砂漠を保水すると言い出し、その結果住民が反乱を起こした。

砂漠に納豆撒かれると知れば、誰だってそうする。
俺だってそうする。
「緑化するのはいいんですけど今度は納豆撒かないでくださいね。アレはどう考えてもテロですよ」
「誰が納豆をそのまま撒けなんて言ったんだ！　僕は君達戦闘員に、保水効果が高い納豆樹脂に加工してから散布しろと、あれほど……！」
と、よく分からない事を言い出したリリスを尻目に、井戸の隣ではスノウが野次馬相手に演説を始めていた。
「これより、私が連れてきたこの者達が涸れ井戸を復活させる！　見事井戸が復活した暁には、この事を周囲に喧伝し……」
どうやら俺達の活躍に乗じて手柄アピールを始めたようだ。
「ねえ六号。本当に、部下はちゃんと選んだ方がいいと思うよ」

「俺達が理想の上司を選べないように、部下も当たり外れがあるんですよ」

4

井戸の掘削を始めて三時間。

「リリス様、ちっとも水が出ないんですけど。野次馬連中も帰ったし、いい加減俺も飽きてきたっス」

「キサラギが誇る超高性能の掘削機なんだがおかしいね。まあ理論上、掘って掘って掘り続ければいつかは出る。自動運転にしてこのまま放置しておくとしようか」

戦闘員の悪行ポイント程度ではとても呼べない掘削機だが、最高幹部のリリスにとってはその程度の扱いらしい。

と、俺達の横で見学していたスノウが言った。

「おい六号、本当に水は出るのか？　確実に水が出るのなら借金してでも金を作り、この辺の土地を買っておこうかと思うのだが」

この国では水が貴重だ。

井戸が復活すれば、当然周囲の地価は高騰する。

するのだが……。

「俺達が言うのもなんだけど、最近のお前は騎士らしさの欠片も見当たらないな。出会った当初の誇り高かった騎士はどこいったんだよ」

「うるさいぞ六号、騎士だって物も食べれば服も着るのだ。生きていくには金がいる、アリスに小遣いを貰っているお前が言うな」

そんな事を言い合う俺達に、リリスがくすっと小さく笑った。

「君達はなんだかんだと仲がいいね。フフッ、六号、良いのかい？　こんなとこ

ろを万が一アスタロトに見られたら……」
からかうようにクスクスと笑うリリスに向けて。
「おっと、そういうのはやめてくださいよリリス様。こいつとは本当そういうんじゃないんで迷惑っス」
「それに関しては貴様に同意だ。私はもっと金持ちがいい」
「そ、そうか……。それはすまなかったね、ここまで真剣な顔で否定されるとは予想外だったよ……。それじゃあ後は掘削機に任せて、今日のところは……」
と、俺は何かを言い掛けたリリスを遮ると。
「おいスノウ、次だ次！　俺は発展途上国の悩みには詳しいんだ。水の次は食糧だ！　リリス様の頭脳で、高度な技術移転でお腹一杯でさすリリ

よ！」
「ちょっと!?」
――何か言いたそうなリリスを連れて、次に案内されたのは……。
「ここが我が国の農業施設だ」
俺達二人は、その建物を見上げて言った。
「リリス様。なんか普通に工場があります」
「そうだね六号、工場だね」
ファンタジーな世界に、違和感バリバリの近代建造物が佇んでいた。
日本にあってもおかしくないレベルのコンクリートで出来た工場が、脈絡もなくそこに建っている。
「どうすんスかリリス様。工場内での野菜栽培なんて、地球でもまだ一部で

すよ？　これじゃさすリリ出来ないじゃないっスか」
「ま、まぁ待ちたまえ六号、まだ慌てるような時間じゃない。まずは中を見学して、水耕栽培しているのかを確認しようか」
　俺にそんな事を言いながら、動揺を隠しきれていないリリスが工場内に足を踏み入れた。
「ええ……。何コレ……」
　中を見て呆然と呟くリリスに続き、俺も工場内に踏み込むと。
「……リリス様、正直この国の連中を舐めてました。こいつら結構とんでもないっス」
「僕もこれを見るまではもっと善良な連中だと思っていたよ……」
　そこは農場というより強制労働場だった。

ここは農場というより強制労働場か、か

オークを始めとした人型の魔獣達が、構内の畑を耕している。
畑の上には眩い光を放つ謎の物体がホタルみたいにフヨフヨ漂い、締め切ってある工場内を明るく照らしていた。
「おいスノウ、こっち来い。お前ちょっとこっち来い」
「六号、まさかの奴隷制度だ。ファンタジー怖い、発展途上国超怖い。捕虜に人権なんて無いんだよ……」
軽く引き気味の俺達に、スノウが首を傾げながら。
「なんだ、お前達の国では農作業に家畜を使わないのか？」
「リリス様、今こいつ、アイツらを家畜って言いましたよ」
「そりゃあ僕達の国も昔は家畜を使って畑を耕していたけど、それにしたって人型は無いよ、人型は。牛や馬といった家畜に農具を引かせる事はしてい

たけれど、こういった絵面はちょっと……」
日本でも戦国時代には農奴という制度があったし、文明レベルの低いこの世界では、まだ奴隷がいてもおかしくはないが……。
「言ってる意味がよく分からんが、これは互いに納得済みの、とても効率化されたシステムなのだぞ。一匹では生きていけない、比較的温厚な野良オークだけを保護し、きちんと食事は出して自らの意思で作業をさせる。やがて寿命が尽きたら命に感謝し美味しくいただく。非常に合理的だと思うのだが……」
「悪だ。六号、ここに悪がいるよ。こき使った後に食うって言った。あの人型の魔獣を食べるって！」
幹部のくせに意外とビビリ症のリリスが後退る。

「そうっス、こいつらあの人型の魔獣を食うんです。しかも知ってますか？　あいつら言葉もしゃべるんすよ」

「邪悪だ。六号、ここに邪悪がいるよ！」

　悪の組織も真っ青の、合理的過ぎる農業システムにドン引きしているとスノウが言った。

「お前達も同じ事をしていたのだろう？　ちょっと姿形が人型で言葉を喋る以外、一体何の違いがあるのだ。コイツらは過酷なこの世界で寿命が来るまで安全に生きられる。私達は労働力と肉を手に入れられる。お前達がよく言う、WIN－WINの関係というやつだな」

「そうかなあ……。俺はなんか違う気がするけどなあ……」

「一緒に農作業をした仲間なのに、なんで最後に食べちゃうんだ。分からない、僕にはそこがサッパリ分からないよ」

これが文明人と野蛮人の違いってヤツなのか。

これが文明人と野蛮人との違いってヤツなのだ

「お前達の国は、よほど平和でしかも食料事情がいいのだな……」

とはいえ構内を見てみれば、確かにオーク達の表情は暗くない。

倫理(りんり)的な問題を別にすれば、合理的なのは認めるが……。

……と、リリスが話題を変えるように、フヨフヨと宙を漂う光を指差した。

「あの光っているのは何なんだい？　ホタルにしては大きいし、光量も強そうだ。なにせ農作物が育つレベルだし」

やはり科学者なだけあって気になるのか、目を輝(かがや)かせながらスノウに尋(たず)ねた。

「ああ、アレは妖精(ようせい)さんだな」

「『妖精さん』」

真面目な顔のスノウの言葉に、俺達二人は思わずハモる。
「そうだ、妖精さんだ。綺麗な水がないと生きられない大人しい生物で、水が貴重なこの辺りでは妖精さんだけでは生存出来ない。なので、こうして工場内に住んでもらい常に中を照らし続けているおかげで、いつでも野菜を育てる事が出来るのだ」
スノウに言われてよく見れば、強烈な光を放つその生き物は、小さな人型をかたどっていた。
こいつら、こんな可愛らしい生き物ですら利用出来るなら利用するのか。
なんというかウチの組織ですらがホワイト企業に思えてくる。
「……というか、何故そこまでして構内での農作業に拘るんだい？　日差しは多少強いとはいえ、土地自体は余っているんだ。外で農作業をした方が

いいんじゃないかい？」
「……？　お前達の国では、空の魔獣が畑を狙ったりしないのか？」
　そういえばここはファンタジーな世界だった。
　グリフォンみたいな大型の空の魔獣が畑に降り立てば、あっという間に作物は全滅するのだろう。
「なんというか、この星は結構理不尽だね……。占領する旨みはあるんだろうか……」
「それを何とかするのがリリス様の仕事でしょう。空からの害獣対策を指導してさすリリされましょうよ」
　日本での空の害獣といえばカラスぐらいのものだろうが、この星では翼竜みたいなヤツをチラホラ見かける。
　あんなのが相手では、害獣用のネットぐらいではどうしようもない。

「……ううむ。それなら巨大(きょだい)な檻(おり)で農場を囲ってみるか？　いやいや、それでは工場内で作物を生産する今のシステムとあまり違いが無い。……空の害獣を駆除(くじょ)？　……森の魔獣ですら手こずる現状では、それも難しいし……」

リリスが難しい顔で腕(うで)を組み、うんうんと唸(うな)り出した。

とはいえ俺に思い付くのなんて、農場の真ん中に自動制御(せいぎょ)の対空機銃(きじゅう)を備え付けるぐらいだ。

こういうのは頭のいい人に任せるのが……、

「よし六号、農薬だ！　ここはとびきり強力な農薬をばら撒(ま)いて、魔獣共が食べられないような作物を作ればいい！　丁度いい事に、昔、作ってみたはいものの、人が摂取(せっしゅ)[illegible]

いものの、人が摂取するとあっという間に死に至る強力なヤツがある。そいつなら、魔獣なんてイチコロりんさ！」
「やっぱりリリス様は紙一重でバカだと思うっス」
というか、魔獣を追い払えさえすればいいのだが。
……って、ああっ！
「そうだ！　リリス様、俺にいい考えがあります。おしっこです、おしっこ！　超強いリリス様の、おしっこください！」
「ちょっと何言ってるのか分かんないし、それ以上僕に近付くならぶっ飛ばすぞ」
天才のリリスでもおしっこだけではさすがに理解が追い付かないようだ。
「もうなんスかリリス様……。そんなに嫌ならトラ男さんにおしっこ貰いに

行きましょう」
「ごめんね六号、君には休暇（きゅうか）が必要なようだ。そうだ、北海道あたりに旅行に行ってきたらいい。大自然に囲まれて、心と体を癒（いや）してきたまえ」
――労（いた）わるような視線を向けてくるリリスに対し、俺は事情を説明する。
「……相変わらず君達はアホな事をやってるね。というか、よくトラ男がそんな事に協力したね」
おっと、バカを見る目は止（や）めて頂きたい。
「めちゃくちゃ嫌がられましたけど、そこはリリス様の名前を勝手に使ってどうにか説得しましたよ」
「それだよ、君がそういう事ばっかりするから僕の評判が落ちるんだよ！

あと、トラ男の排泄物が効果があるのは、動物的な本能で怖がってるだけだからね。僕の物を使っても意味はないから」

リリスはそう言いながら、俺を警戒するように後退る。

「何事もやってみなきゃわからないですよ。やる前から諦めるのは負け犬の考えっス」

「うるさいよ、こういう時だけ熱血系になるんじゃない。君はそんなキャラじゃないだろう、その発言はアスタロトにチクってやるからね」

と、そんな俺達の様子に引いていたスノウだったが、ふと何かを考え込んだ。

「……ふむ。言っている事は頭が悪いが、やってみる価値はあるな……」

「バカなのはウチの戦闘員だけかと思っていたけど、こっちにもいた。やはり世の中、僕以外の人間はバカばっかりなんだ」

「スノウもこう言ってる事だし、ここは大人しく頭からいきますよリリス様。俺

ニナ「もう言ってる事ですし、ここはひとつお願いします」ニナ様、俺達はあっち向いてますから」

と、リリスが白衣の下から触手（しょくしゅ）を蠢（うごめ）かせ俺に威嚇（いかく）行動を見せる中。

「いや、やってみる価値があると言ったのは、強い魔獣の排泄物を使うというとこだ」

落ち着いたスノウの言葉に、俺達は顔を見合わせた。

5

砂漠（さばく）に住む巨大モグラ、砂の王。

そして、スノウによれば俺達のアジト近くの森に住んでいるという巨大トカゲ、森の王。

それらに並ぶ、この星で恐れられる大魔獣にして、空を支配しているのが……。

「ちょっと待とうかスノウ君。その、『空の王』というヤツがなんとなく凄いというのは分かった。そして、そんな生物のおしっこならさぞかし魔獣達も怯える事だろう。でもね……」

真剣な顔したリリスが言った。

「僕は科学者だからね。戦闘員じゃないからね。いや、最高幹部だから戦えない事もないんだけどさ、でもこれって違うと思うんだ」

「見苦しいですよリリス様。その、なんたら言うやべえヤツを倒せばこの周辺の開発も進みます。ここは幹部のカッコイイとこを見せて貰わないと」

グレイスの街から出た俺達は、荒れ果てた大地に繰り出していた。

「フフ、私は耳聡いのだ、話は既に聞いているぞ。リリス殿の力で、魔の大森林開拓の目処が立ったらしいな？　しかも、数多の魔獣や蛮族をたった一人で蹴散らしたとか……」

一体どこで聞き付けたのか、スノウが不敵な笑みを浮かべて見せる。

「先ほどから垣間見える得体の知れない力の数々。リリス殿であれば、大魔獣が相手でもどうにかなるのでは……？」

そう言って、リリスへ期待に満ちた目を向けてくるスノウだが……。

「いや、出来るよ？　そりゃあね？　幹部だからね？　最高幹部の中で一番戦闘向きじゃないとは言っても、名前から言って空を飛ぶ魔獣なんだろう？　となれば、遠距離攻撃が得意な僕にはうってつけの相手と言える。でも、そんな相手のおしっこを採取するのは僕の仕事じゃないと思うんだ」

「面倒臭い事言ってないでお願いしますよリリス様。ほら、この星で見付けたゴールデンカブト虫あげますから」
「そういう事なら、私も森で捕まえた高値で売れそうなオレンジ色のモケモケの子供を譲るとしよう」
　そう言って俺が見せたカブトムシにリリスは興味を惹かれながらも、
「僕を何だと思ってるんだ、カブトムシとザリガニは科学者として興味があるから後でもらうけど、なんだか良いように使われている気がするよ。……そもそも、ただの技術移転という話だったはずなのに、どうして巨大怪獣と戦う話になっているんだ。僕は科学者だよ？　技術者だよ？　何度も言うが戦闘員とは違うのだよ」
　いつもならちょっと変わった物を見せびらかすと大体乗ってくれるのに、今日に限ってやけに手強い。

今日に限ってやけに手強い

「リリス様、モンパンは好きでしょう？　あれっスよ、大型モンスターの狩猟（しゅりょう）クエストみたいなもんです。いつもと違うのはこれがリアルだって事ですよ。ねえリリス様、俺とひと狩（か）り行きましょうよ」

……………。

「狩猟クエスト……。君とひと狩り……」

ゲーム大好きなリリスが食いついた。

後もう一押しでいけそうだ。

「空の王ってこの流れで言ったら、きっとドラゴンっスよ、ドラゴン！　ドラゴン見たくないですか？　森で倒したのはトカゲでしたけど、きっと今度こそドラゴンですよ。なんならその空の王とやらをぶっ倒して、ドラゴンスレイヤーになりましょう」

「ドラゴンスレイヤー……。ドラゴン……。ドラゴン……！」

リリスの目に光が灯る。
「六号には23ミリ対空機関銃を、僕は熱源探知式のロケランで……」
　まだ見ぬ巨大魔獣との対空戦を想定し考え込みだしたリリスを前に、
（おい六号、リリス殿をそそのかした私が言うのも何だが、お前は一体何を考えている？　今日はやけに協力的ではないか）
（この周辺の空に、ヤバい巨大魔獣がいるんだろ？　だったらこの機会に狩ってもらわないと。じゃないと、どうせいつの日か俺にお鉢が回ってくるんだ）
　そう、そんな物騒なヤツがいると聞かされた以上、いつかそいつの討伐要請が出るに決まっている。
　俺だって学習ぐらいするのだ、フラグはへし折っておくに限る。
（一応、この国の守護獣である空の王を狩られては困るのだが……。いやしかし、戦闘となれば高額な空の王の羽根が辺りにばらまかれる事になる。

それはそれで……）
　難しい顔で悩み始めたスノウの様子に、なぜコイツがこの話を持ち掛けて
きたのか察しが付いた。
　しかし……。
「守護獣か……」
　そんな名前で崇められている生物を狩るというのは罰が当たりそうな気
もするが……。
「六号！　僕達がドラゴンスレイヤーになったなら、名前は忘れたがドラゴ
ン戦隊の何とかレンジャーに会いに行こう！　そしてこう言って煽ってやる
のさ。『ドラゴン戦隊カッコイイですね。まあ僕達は本物のドラゴン倒してき
ましたけど』ってね！」
「そんな事ばっかやってるから、ヒーロー協会から最高額の賞金懸けられる

んですよ」
　浮かれながら拳を握るリリスにツッコみながら、俺は苦笑を浮かべて見せた。
　色々と抜けているところの多い幹部だが、この人と一緒なら、敗北の心配だけはないのだから――

6

「嘘吐き！　六号の嘘吐き！　何がドラゴンスレイヤーだ、雀じゃないか！　どう見てもでっかい雀じゃないか！」
「俺に言わずにこの星の生態系サイドに言ってください。そんな事より鳥のフンですよ、ほら早く採取してください」
　空の王は雀だった。

ただし超巨大な雀である。
　それは、俺が戦った事のあるグリフォンですらも小さく思える大きさだ。
「おかしいよ、航空力学的にはどう考えてもこの形状でこのサイズはあり得ない！」
「わけ分かんない事言ってないで、とっととうんこ採ってください。リリス様は科学者なんだからサンプルの採取とかは得意でしょう？」

　街の近くの荒野の上を、ぴょんぴょんと歩きながら大地を突ついている巨大雀。
「どうしよう六号、僕は雀の駆除だけは無理だ！　子供の頃、庭で衰弱していた雀を拾って育てた事があったんだけど、それ以来雀だけはどうにも愛着が――

着た……」

「あんた悪の組織の大幹部だろ、何可愛(かわい)らしい事言ってんですか！　今さらそんなキャラ付けしたって人気上司のアンケート結果は変わらないっス！」

俺とリリスは転がっていた岩に身を隠(かく)し、それを遠巻きに観察しながら言い合っていた。

「おい六号、空の王は好奇心(こうきしん)が旺盛(おうせい)だ。お前が注意を惹いてる間に、私とリリス殿が空の王の落とし物を採取するというのはどうだ？」

巨大雀を前にして、一人冷静なスノウが言った。

「それって俺が食われるパターンじゃん。目を惹くなら派手な白髪頭(しらがあたま)のお前の方が向いてるだろ、うんこ集める汚(よご)れ仕事は俺がやるから、お前には騎士(きし)らしい仕事をやるよ」

「いやいや、隊長に鳥の排泄物拾いなんてやらせるわけにはいくまい。こういった汚い仕事は下の者がやるべきだ。貴様は誇りある囮の仕事をやってくれ」

…………。

「おい、プライドの高いお前が率先してうんこ漁りするとか何かあるだろ。アレか、空の王のうんこは高値で取引されるのか」

「そ、そんな事はないぞ!?　やましい事など何も無い、最近アリスの手伝いで科学とやらを学んでいるのだ。そう、これは科学的見地というヤツで、好奇心からくるものだ。空の王のうんこを突き回したいだけで他意はない！」

「君達いい加減うんこうんこうるさいよ。さっきから、おしっこだのうんこだの小学生の会話を聞いている気分だよ」

　リリスが呆れて言ってくるが、それは小学生に失礼だろう、今時の子供はもっと賢い。

もっと賢い
「チッ、こうしていてもしょうがねえ。俺が注意を惹くからうんこを頼むぞ。よく分からんが金目のうんこなら山分けだぞ！」
「よし、任せろ！　ちなみにうんこ自体には価値はない。うんこの中に、たまに当たりが入っているのだ！」
　スノウが言う当たりとは、おそらく光り物などの事なのだろう。
「だから、もうちょっとこう言い方が……」
　リリスの呟きを後にしながら、俺は空の王の下へと駆け出した。
「空の王は光り物を好む習性がある！　何か金目の物があるのなら、それで気を惹け！」
　スノウの助言に俺は懐にしまっておいた取って置きを出す。
「ほら、こっちだ鳥野郎！　コレを見ろ！」

自らの前に飛び出した俺を見て、地中をほじくり返していた空の王が顔を上げる。
「森で見付けたゴールデンオオカブトだ！　ほら、こいつが欲しいのなら……！」
「おおおい、君は一体何やってんの！　それは僕にくれるって言ってたヤツだろう！」
やると言った時は微妙そうにしていたクセに、いつの間に愛着が湧いたのかリリスが悲鳴じみた声を上げた。
黄金色に輝くカブトムシに惹かれたのか、空の王は俺の手元に視線が釘付けになる。
このままオオカブトを持って行っても俺ごと襲われかねない。
俺は空の王の足下に、そっとカブトを置くと……。

パクッと食われた。

「今だ！」

「今だじゃないよ、食べられてる、食べられてるって！　僕のカブトムシが食べられてるよ！」

と、憐れカブトムシが餌にされた、その時だった。

「六号、光り物は光り物でも、空の王は宝石や金属類を特に好む！」

ジリジリと空の王ににじり寄っていたスノウの言葉に、

「そういう事なら任せとけ！　今度こそコレを見ろおおおお！」

ゴールデンカブトで学習した俺は今度はパクッといかれない光り物を取り出した。

新しいネックレスを買えとうるさい地雷女のため、わざわざ用意した逸品

だ。
行き遅れの怨念が籠もってそうな代物だが、これなら……！
……と、空の王に見せ付けるように、グリム用のネックレスを振り回していると……。
「チュン」
「あっ」
空の王はネックレスではなく、それを握る俺を掴むと。
「……リリス様、どうやら俺はこれまでのようです。クソみたいなブラック企業でしたが長らくお世話になりました。アスタロト様とベリアル様に、どうかよろしく言っといてください……」
「いきなり諦めてどうするんだ！　待ってろ六号、今そいつを撃ち落として……！」

「待つんだリリス殿、空の王は守護獣だ！　撃ち落とされては流石に困る！」

リリスとスノウが言い合う中。

「チュン！」

俺は空の王に掴まれたまま、空高く連れ去られて行った――

7

「……こちら戦闘員六号。リリス様聞こえますか？　オーバー」

『こちらリリス、聞こえているよ。人工衛星のリンクシステムを使って途中までは追跡したんだけど、岩場の辺りで見失った。一体どこら辺にいるんだ？　オーバー』

空の王に連れ去られた俺はといえば

「なんか今、空の王の巣にいます。スノウが言うように本当に温厚な性格なのか、今のところ攻撃は受けてないっス」

空の王の寝床らしき場所にいた。

「リリス様、ここヤベーっス。何か光り物でいっぱいです」

俺が連れ去られた鳥の巣は大量の光り物で溢れていた。

色とりどりの宝石類に、どれだけあるのかも分からない、金貨の山。

中には怪しげな光を放つ、魔剣らしき物や鎧もある。

『……六号、光り物について詳しく聞こうか。いや、どうせ鳥類が集める代物だ、ガラス玉やきれいな石程度の物なんだろう？』

自分に言い聞かせるようなリリスの言葉に。

「宝石や金貨がスゲーありますよ。あと魔剣っぽいヤツとかもゴロゴロと……」

無線機に向けて答えると、リリスのくぐもった声の後、酷く穏やかな口調でスノウが呼び掛けてきた。

『隊長、聞こえますか？　忠実な部下であるスノウです。ご無事そうで何よりです、あなたが連れ去られた時は、この胸が張り裂けんばかりに心配しました……！』

誰だお前。
『コラッ、僕の無線を返したまえ、横から割り込むんじゃない！　いや、本当に君が無事で何よりだ。……ところで六号、君がいる所はどこか分かるかい？　この僕が直々に迎えに行こう』
…………。
「場所は分かんないですけど、多分どこかの崖の隙間だと思います。今からロープを転送してもらって自力で下りて帰りますんで、迎えに来なくていいですよ」
『『それはいけない！』』
声をハモらせる上司と部下。
「……巣穴の隅っこに空の王のうんこがあるんで、ちゃんとコイツを採取して行きますすよ」

巣穴の奥で丸くなった空の王に、俺たちがネックレスをくれてやるとこちらに興味を無くしている。
　今なら巣穴から出て行っても攻撃を受ける事はなさそうだ。
『待つんだ六号、今はうんこは置いておこう。それよりも、巣穴にあるという光り物をだね……』
『空の王の巣に侵入(しんにゅう)出来る事など滅多(めった)にないぞ！　手ぶらでそこを立ち去るだなんてとんでもない、糞(ふん)はどうでもいいから魔剣を頼む！』
　本来の目的をよそに、欲を突っ張(つっぱ)らせる上司と部下。
「この状況(じょうきょう)でそんなもん置いてくに決まってるだろうが。うんこぐらいなら気にしないだろうけど、大事にしているお宝持ってったら追ってくるだろ」
　そう言って空の王を覗(うかが)うと、何がそんなに気に入ったのか、ネックレスをくちばしの先で弄(もてあそ)んでいた。

『なんという根性無しだ！　お宝を前にして手を出さないだなんて、それでも君は冒険者なのか！』
「戦闘員っス」
　そんな俺のツッコミに、スノウが罵声を飛ばしてくる。
『リリス殿の言う通りだ！　空の王の巣に乗り込み宝を手にする。男なら、誰もが憧れてきた冒険物語だ！　そのチャンスをお前は無駄にするのか⁉』
　空の王って言っても雀じゃん。
　そういうのはドラゴンの巣とかでやるもんだろ。
　ギャーギャーうるさい二人をよそに、俺はうんこを袋に詰めると……。
『六号、まだ巣から離れるんじゃないぞ！　多分、近くまで来ているから

ね！』
『隊長を一人だけ危険な目に遭わせたりはしない、逝く時は一緒だ！』
　完全に目的がすり替わった二人は、鼻息荒くそんな事を……。
　というか、この二人邪魔だなぁ。
　このまま巣に来られると、俺の脱出が困難になるんじゃないのか。
　あの二人をどう説得しようか悩んでいると、ふと空の王が顔を上げた。
　本当に何が気に入ったのか、空の王は相変わらずグリムにくれてやる予定だったネックレスを弄んでおり……。
『……こちら戦闘員六号よりアジトのアリスへ。なんか妙な状況になってるから、知恵を貸してくれ相棒。オーバー』

——崖の上の巣穴から、ネックレスがポンと落とされる

頭上から降ってきたネックレスは、リリスの触手(しょくしゅ)によってパシッと受け止められた。

「おや、これは……？」

「それは、先ほどあの男が空の王に見せびらかしていたネックレスでは……」

餌を探しに行ったのか、空の王が飛び立ち、巣を留守にしている間にネックレスを取り戻(もど)した俺は、遠く崖下(がけした)を歩くリリスの頭上にそれを投下したのだ。

俺が落とした物だと気付いたのか、リリスはネックレスを光にかざし、空を見上げた。

「六号、聞こえるかい？　なんかネックレスが落ちてきたんだが、この近くにいるんだろう？」

いるんだろう」
『こちら戦闘員六号です。リリス様の言う通り、今頭の上にいます。そろそろ空の王が帰って来ると思うんで、時間稼ぎをお願いします』
「「えっ」」
リリスとスノウがハモる中、そんな二人を巨大な影が覆い尽くした。
腹を満たした空の王が自らの巣に帰って来たのだ。
空の王はそのまま巣に戻る事はなく、リリスがかざしていたネックレスを見付けると……！
「チュンチュンチュン！」
「誰だ空の王は温厚だと言ったのは、めちゃくちゃ凶暴じゃないか！」
「リリス殿、光り物だ！　あなたが持っているネックレスを狙っているのだ！」
リリスが身を挺して囮を務めてくれている間に、俺は入るだけの金貨と

空の王の抜け羽根を集め、リュックに詰めた。
　だが、ロープを使って地面に下りるのはまだ早い。
　せっかくの囮達に俺が置いていかれては困るので、ここは囮の物欲を刺激する。
『リリス様、空の王が溜め込んだお宝落とします』
　囮達に告げると、俺は巣に残されていた宝石類を盛大に地上へばらまいた。
「六号、でかした！　よくやった！　くっ、おのれ鳥類め、地に落ちた時点でこの宝の所有権は誰の物でもない！　邪魔をするな！」
「あはははははは！　あははははははは！」
　ふと巣穴から地上を見れば、空の王のついばみ攻撃をリリスが触手でガ

ードしながら、足の裏で宝石を踏みつけ、ジリジリと自分の下へと引き寄せている。
　スノウはといえば、高笑いを上げながら地面に這いつくばり、両手で宝石をかき集めていた。
「チュンチュンチュン！」
「悪の組織は強欲なのだ！　これだけの宝を前に、鳥類ごときに引き下がれるものか！」
「その心意気や良し！　相手がたとえ守護獣だろうが、遠慮などするものか！」
　頭上から降ってきた宝に目が眩み、その場を離れようとしない二人をよそに……。

『こちら戦闘員六号。これよりアジトに帰還(きかん)する。お土産(みやげ)は期待しといてくれ。オーバー』

『おう、ご苦労さん。囮に巻き込まれないようにな。オーバー』

俺は空の王のうんことリュックを背負い、その場をそっと後にした――

8

お宝とうんこを回収した俺達は、公園内の仮設アジトに帰還した。

「まったく、酷い目に遭ったよ……。本来僕はインドア派なんだ。こういうのはもうこれっきりにしてもらいたいね……」

白衣のポケットを宝石類でパンパンにしながら、芝生の上に身を投げ出したリリスが愚痴を零していた。

俺は単独で先に帰ったのだが、空の王に攻撃出来ないリリスは持てるだけの宝石を拾って逃げてきたようだ。

「スノウのヤツはどうなりました？」

「……宝石類を手放さずにいたら、空の王に攫われた。巣には君が垂らしたロープがそのままになっているし、宝を諦めれば帰れるだろう」

あの強欲な女が手ぶらで帰ってくるとは思えないし、しばらく顔を合わせる事はなさそうだ。

芝生に寝転がっていたリリスは上半身を起こすと、今日はアジト建設はお休みなのか、そこに居たアリスに声を上げた。

「アリス、ちょっと手伝ってくれ！　今から特殊な農薬を作るよ！」

俺達から離れた場所で何やらバケツを覗（のぞ）き込んでいたアリスは、こちらも見ずに言ってくる。
「お疲（つか）れだなリリス様。自分は今、オレンジ色のザリガニ観察で忙（いそが）しいんでくだらない用事ならまたにしてくれ」
「くだらなくはないよ！　というかソレ、僕のザリガニだからね！　僕が労働の対価としてもらったんだから！」
　アリスはスノウが飼っていた小型のモケモケに夢中なようだ。
「アリス、この国の農業形態は知っているかい？　実に興味深い事に、なんと工場で水耕栽培（さいばい）をしているのだよ！」
「知ってるぞ」
「ああ、驚（おどろ）きだろう！　そしてその理由が……」

こちらを見る事もなく返したアリスの言葉に、リリスがピタリと動きを止めた。
「飛行型の魔獣に畑が襲われるんだろ。ソレならとっくに知ってるし、この非効率な農業形態を変えるべく、まさに研究の真っ最中だぞ」
　…………。
「……えっ、ちょっと待って。本当に？　一応、その研究内容を聞こうじゃないか」
　今日一日の苦労がパーになるかもと、リリスが汗を垂らしながら尋ねると、
「この星の魔獣どもは強い生き物の匂いがすると避ける習性があるらしくてな。そこで、嫌がるトラ男の小便を……」

「まただよ、またおしっこだよ！　どいつもこいつもなんでそんなに排泄物が好きなんだ！」
　頭を抱えて喚き出したリリスに向けて、俺はどうどうと宥めながら、
「落ち着いてくださいリリス様、仮にも最高幹部で女の子なんですから、あまりおしっこなんて言うもんじゃないっスよ」
「僕だって好きでこんな単語を連呼しているわけじゃない！　……というかそれで、トラ男のは効果があったのかい？」
　ようやくバケツから顔を上げたアリスは、
「いいや、トラ男じゃ効果はイマイチだった。だがもう少し強い生き物の排泄物ならいけるはずだ。……おいリリス様、ちょっとこのバケツに……」
「それ以上は言わせないよ！　ほら、六号が回収してきたコレを使うんだ！」
　アリスの言葉を遮ったリリスは、俺が持っていた袋を奪い取ると、前に突

き出し。
「アリスはコレを使って農薬の開発を進めてくれ。その間、僕は……」
　そう言って、白衣のポケットからキラキラと輝く石を取り出すと……。
「ハハハハハハハ！　見ろ六号、宝石だ！　しかも、地球では見た事のない石だ！　コレはきっと、地球に持ち帰ればとんでもない値が……」
「ソイツはこの辺りで山ほど採れるガラス玉だな。大気成分が違うせいで色艶が違って見えるが、地球に送るとどこにでもあるガラスに変わる」
　リリスが掴んでいた石をぶん投げた。
「ど、どういう事だ！　アリス、他の石も鑑定してくれ、高値が付きそうなヤツがどれか一つぐらい……」
「どれもこれも二束三文の石ころだぞ。……おっ、コイツはトルマリンだな。この大きさだと三百円ぐらいで売れるんじゃねえか」

アリスに宝石の鑑定をさせたリリスが地面に膝から崩れ落ちる。
俺はそんなリリスを尻目に、リュックに詰めた金貨と空の王の羽根を取り出していく。
「お土産として金貨と抜け羽根を持ってきたぞ。スノウが言うには、空の王の羽根は高く売れるんだってよ」
「でかした相棒、羽根は研究対象にして金貨は自分が預かっとく。投資や相場で増やしておくから金に困ったら言うといい」
やったぜ、後で今夜の飲み代貰おう！
……と、俺達のそんなやり取りを羨ましそうに見ていたリリスが言ってくる。
「ねえアリス、六号の事だけ甘やかし過ぎじゃないか？　僕は君の製作者なんだ。僕もお金を預けるから、君の情報収集能力で……」

「自分でやれ」

……本当に反抗期を迎えたらしい、アリスが言った。

三章

VS泥の王！

1

空の王のうんこを採取して三日が経(た)った。

「やりましたねリリス様、この星に来て初めての成果っス」

「待ちたまえ、初めての成果ではないはずだ。だって僕、森にいたデカいトカゲとか倒(たお)したじゃないか。謎(なぞ)の地下施設(しせつ)を見付けたじゃないか」

アリスが開発した特殊な農薬を試(ため)したところ、餌(えさ)として野菜を置いても空の魔獣は来なかった。

この国のあちこちにある謎のコンクリート建造物は数が限られているらしく、屋外での農作業が可能になれば食料事情が改善されるとの事だ。野菜や穀物の量が増えれば、大型の家畜を育てる事も可能になる。つまりは、会話が可能な知的生命体を食用にする必要も無くなるのだ。

　自分が食わないように気を付けてはいても、目の前で仲間がオーク肉を食らうのを見るのは未だに慣れない。
　他国の文化に口を出すのはナンセンスだと思うが、出来ればこの食文化だけは廃れてほしいものだ。
「しかし、僕が思っていたよりどうにも活躍が地味に思えるね。もっとこう、科学の力でバリバリと発展させたり、しょうもない技術の一つや二つで、原住民達が大騒ぎするのを期待していたのに……」
技術の移転や内政チートで無双して、さすリリされる計画が離抗して、い

た。
　と、いうのも……。
「仕方ないですよリリス様。確かにこの星の科学は発展していませんが、魔法ってもんがありますし」
「それだよ、何が魔法だバカにして！　科学に喧嘩を売っているのか！」
　リリスがアリスみたいな事を言いながら激昂するのも無理はない。
　この国であまり科学が発展しなかったのは、魔法技術という物の弊害らしい。
　たとえば、現在戦争中の隣国、トリスが輸出していた水精石。
　これは水の精霊に余所から水を呼んで貰う際、その代償として使う物なのだそうだ。

……そう、水の精霊である。

「まったく、何が精霊だ！　ファンタジーにもほどがあるだろう！　その辺の住人に、驚かせようとライターを見せた時も、火精石の方が便利ですねと言われたよ！　火精石って何だ！」

「まあ、魔法って言っても万能じゃないみたいですけどね。グリムっていう部下に、魔法の力で美少女を生やしてくれって頼んだら、舐めんなって言われました」

と、その時、グリムという単語を聞いたリリスが嫌そうに顔を顰めた。

「グリム……、グリムねえ……。報告書にあった、胡散臭い女の事だね？」

「胡散臭いと言えば胡散臭いですが、年中白衣姿のリリス様に言われたら泣きますよ？」

と、その時だった。

《悪行ポイントが加算されます》

「……おっ？」

「……六号、ひょっとして悪行ポイントが加算されたのかい？」

　不思議そうな表情を浮かべた俺に、似たような顔のリリスが尋ねてくる。

　というか、ポイントの加算が止まる事はなく、今もアナウンスが流れ続けていた。

「ええ、なんかいきなりアナウンスが流れて、今もポイントの加算が止まらないんですけど。ひょっとしてリリス様もですか？」

「うん、僕もポコポコ加算されてるよ。……なんだろうね、コレ？　原因が分からないと不気味なんだけど……」

　俺達が首を傾げる間もポイント加算のアナウンスは止まらない。

俺達が首を傾ける間もなく、マイナス加算のスパイラルは止まらない

　このままずっと放置しておけば、俺のマイナスポイント問題もあっという間に解決しそうだ。

「俺だけじゃなくリリス様もってのが気になりますね。一体何やらかしたんスか？」

「それはこっちのセリフだよ。この星ではまだ何もしてないと思うから、日本で何かあったのかな？　君とこうしてイチャついてるのがアスタロトに伝わって、それが彼女を傷付け、悪行にカウントされてるとか？」

　あの極度のツンデレ上司がそんな可愛（かわい）いはずはないのだが……。

「盗聴器（とうちょうき）でも仕掛（しか）けられてるんですかね？　試しにもっとイチャついてみましょうか」

「おっと、それはノーサンキューだ。……おい、その手は何だ。セクハラするな

う業にもちゃんと考えがあるぞ」

い使い[illegible]」

……と、俺がリリスに手をワキワキさせていたその時だった。

「隊長、大変よ！　この街に魔王軍の工作員が侵入している恐れがあるわ！」

そんな言葉と共に、ついさっきまで話題に上っていたグリムが現れた。

車椅子から下りたグリムは、公園の芝生の上をペタペタと裸足で歩きながら。

「……あら？　何よ隊長、ちょっと目を離した隙にまた女の知り合いを増やしたの？　あんまりモテそうにないクセに、どうしてそうも出会いが多いの！」

隣に佇むリリスを見付け、不機嫌を隠そうともせずグリムが言った。

俺はリリスに手を向けて。
「この人は俺の上司のリリス様だよ。キサラギの最高幹部の一人だぞ」
「えっ!?」
それを聞いたグリムはハッと何かに気付いたように口元を押さえると、やがて姿勢を正し……。
「初めまして、リリス様。私は、こちらの戦闘員六号様と婚約させて頂きました、グリム＝グリモワールと申します。不束者ではございますが、ご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願いいたします」
公園の芝生に座ると、グリムが三つ指を突いて頭を下げた。
「……六号、こっち。ちょっとこっち来て」
リリスがこちらに向けてコイコイと、手招きしながら離れていく。
俺は言われるままに近づくと……、

（婚約ってどういう事だ。アレかい、本当に現地妻を作ったのかい？　地球じゃアスタロトとイチャイチャしていたクセに、コレは一体どういう事だね）

（現地妻じゃないですよ、十年経ってお互い独り身のままだったら、結婚しようって話をしただけっス。それにアスタロト様とは別にイチャイチャなんてしてませんよ）

（それは十分婚約だし、十分イチャイチャしていたよ）

　グリムの様子を覗えば、離れた所でヒソヒソ話を始めた俺達を見ながら、お腹の前で手を組んでニコニコしている。

　リリスは面白くなさそうな表情を浮かべながら、グリムに近付くと。

「まあ、一応自己紹介をしておこうか……。僕の名はリリス。秘密結社キサラギ最高幹部の一人。全ての怪人と戦闘員の母、黒のリリスだ！　この男とは長い付き合いで、言ってみれば家族みたいなものさ。ウチの六号が世話

になっているようだね」
　ポケットに手を入れたまま、下から睨め付けるようにグリムに言った。
　当の本人はといえば、チンピラみたいな上司の態度に一切動じる事もなく。
「いいえお母様、とんでもありませんわ！　むしろ六号様にはいつも、私の方がお世話をしてもらっています！」
「本当だよ。いつも車椅子を押したり、高低差があるところではお前を持ち運んだり大変なんだぞ。あと目を離すとポンポン死ぬし」
　俺の言葉にグリムがぷくっと頬を膨らますが、いい年した女にそれをやられるとイラッとする。
　と、そんなグリムとは対照的に、リリスが愕然とした表情で呟いた。
「――えっ？　今僕の事を、お母様って言った？」

「……え？　何の事？　おか……」

呆然とするお母様をよそに、グリムが頬を膨らませたまま、

「そうは言っても靴を履けないいんだから仕方ないじゃない。一応悪いとは思っているのよ？　だから、お金が無い隊長に、いつも晩御飯を奢ってあげてるんだからね」

「それはそれ、これはこれだ。俺だって、アリスからお小遣い貰った日には奢り返してやったりしてるだろ。あと、そのほっぺた止めろ、ババアがぶりっ子してるみたいで不愉快になる」

ババア呼ばわりは禁句なのか、無言で摑みかかってきたグリムをあしらっていると、リリスが再び呟いた。

「ねえ、今僕の事をお母様って……」

様子のおかしいリリスを尻目にグリムがカッと牙を剝く。

「そうよ、隊長ってばどうしてアリスにお小遣いなんて貰ってるのよ！　あなたは私だけに依存してればいいのよ！　結婚してくれたら思い切り甘やかしてあげるから！」

　それなら結婚してもいいかなという気になってくるが、長い戦闘員暮らしで培った俺の本能が、それだけは止めとけと警告を発している。

「正直言って結構悩むが、俺に用があったんじゃなかったのか？」

　その言葉で本来の目的を思い出したのか、グリムがハッと我に返った。

「そうよ、今は悠長にご挨拶している場合じゃないわ！　どうやら街の中に、魔王軍の工作員が潜入したみたいなの！　そう、アンデッド祭りの時みたいに！」

　工作員という単語に俺とリリスは思わず顔を見合わせる。

「……それは聞き捨てならないね。テロや破壊工作は僕達の得意分野だ。そういう事なら任せてもらおう」

「仕方ないな、いつも奢ってもらってるしな。今夜は美味い酒を期待してるぞ?」

快諾する俺達に、グリムが安心したように笑みを見せた。

2

グリムに案内された俺達は。

「避難警報を出せ！　泥の王には炎が効く！　住民を避難させたら、ありったけの火精石を持ってこい！」

「油だ！　油を撒け！　泥の王は知能がある、油を撒かれると火を恐れて

近付かない！」
阿鼻叫喚と化している光景を前に、固まっていた。
「リリス様、俺嫌な予感しかしないんですけど」
「奇遇だね六号、僕もこのまま帰ろうかと思っていたよ」
何日か前にリリスが掘削機を仕掛けたまま放置していた涸れ井戸から、例の黒いスライムが湧き出していた。
「……これ、どう考えてもリリス様のせいですよね」
「待つんだ六号、答えを出すにはまだ早い。十分な検証を以て、正解を割り出すべきだと思う」

[illegible]」

　とはいえ、俺もリリスがアレを設置した事を今の今まで忘れていた。
　このまま無関係なフリをして、アジトでオレンジ色のザリガニ観察でもしたいところだ。
　しかし……。
「リリス様、俺さっきから悪行ポイントの加算が止まらないっス」
「そうか。ならこれは君の犯行にカウントされているんだね。やったね六号、稀（まれ）に見る大悪事じゃないか」
　…………。
「何シレッと俺のせいにしてるんだこの僕っ子が！　あんただってポイント加算されてるだろ！　どうすんですか、ティリスのヤツにまた借りが出来ますよ！」
「じゃあ僕のせいだって言うのか！　あーそうさ、僕のせいさ！　僕は悪の
[illegible]

組織の大幹部だからね。無意識のウチに破壊と混沌を振り撒いてしまうのさ！　悪のカリスマなのだから仕方がないね、どうもすいませんでした！」
「コイツ、逆ギレしやがった！　援軍に呼んだのに問題ばっか起こしやがって、このクソ上司！　おら、耳塞いでないで何とか言ってみろ！」
開き直って逆ギレを始めた僕っ子をどうしてくれようかと考えていると、グリムが首を傾げながら。
「二人とも、さっきから何を騒いでるのよ。見ての通りの泥の王よ。今からアレを大人しくさせるから協力してちょうだい」
さっきからちょこちょこ出てくる泥の王という単語から、グリムはこのスライムの正体を知ってるようだ。
「その泥の王ってのは何なんだ、この黒いのに関係してるのか？」

「そういえば隊長は異国の人だったわね。この黒いスライム、泥の王はクレイス王国の地下に封じられている巨大魔獣よ。そのおかげでこの国は、常に水不足に悩まされているの」
……あれっ？
「なあ、それってこの国の人にとって常識なのか？」
「常識といえば常識だけど、ただの平民には教えていないわね。普通に暮らす人達にとって、自分の足下にそんな存在が封じられているだなんて聞いても、気持ちの良いものではないでしょう？」
いやでも、そんな存在がいるのならどうしてスノウは……？
それにアイツも、この黒いスライムの正体は知らなかったみたいだし……。
「まあ、口が軽そうだったり頭が弱そうだったりお金で情報を売ったりしちゃうような人以外は、国に仕える者なら大体皆知ってるわ。隊長も覚えておいてね？」

「なるほど、よく理解した」
つまり頭が弱くて賄賂をもらえば途端に口が軽くなりそうな誰かは教えてもらえなかったのか。
……と、その時。
「戦闘員六号、こんな時こそ我々の出番だ。すでに速乾セメントは要請した。あの迷惑なスライムを再び地中に押し戻すぞ。こんな事をしでかした犯人探しはその後だ！」
「了解ですリリス様。おそらくコレをやらかしたのは、魔王軍幹部のハイネの仕業でしょう。アイツ、アンデッド祭りの時も着ぐるみに入って街に侵入してきたんですよ」
「なるほど、僕はその娘の事は知らないけれど、君が言うのならソイツで確定だな。おのれ魔王軍め、許すまじ……！」

卑劣な魔王軍に対して正義の炎を燃やす俺達に、グリムが不思議そうな顔で首を傾げた。

《悪行ポイントが加算されます》

――一時間後。

「なんなんだこの星は！　文明レベルも低く近代兵器も無いと聞いていたのに、詐欺られた気分だ……！　仮にも幹部のこの僕が、粘体生物ごときにエロゲーみたいな目に遭わされるとこだったよ！」

証拠隠滅とばかりに、掘削機ごと速乾コンクリートで井戸を埋めたリリスが言った。

自慢のメカ触手は液体であるスライムと相性が悪いのか、リリスは散々

に汚された挙げ句、疲れた表情で項垂れていた。
「報告書に嘘はありませんよ。たまにとんでもないのがいるだけで、基本は雑魚が多いっス。大概の魔獣は俺達戦闘員で圧倒出来ますし」
　体のあちこちを黒い粘液塗れにしたリリスは、グリムに甲斐甲斐しく顔を拭かれながら納得いかなそうにふて腐れている。
「その、とんでもないヤツらばかりの相手をさせられている気がする。森に居たオオトカゲに空の王、挙げ句の果てには泥の王。僕が援軍に来たから良い機会だとばかりに、強敵ばかり押し付けられてる気がしてならないんだけど」
　頭脳派を自称しているだけあって、さすがにバカではないようだ。
「どうか機嫌を直してくださいお母様。おかげでとても助かりました」
「またお母様って言った！　今度は聞き逃さないぞ！　さっきからそれは何

なんだ、僕は六号の上司であってお母さんじゃないぞ！　君に挨拶される謂れはないから！」
　俺より年下のお母様がとうとう不満を口にした。
「ですがお母様！」
「お母様言うな！」
　チビ助な外見と相まって、タオルで顔を拭かれるリリスの方がどちらかといえば娘に見える。
「この国の君の部下は本当にどうなっているんだ。キメラちゃんかと思えばキメラくんだし、くっころ系女騎士かと思えば僕がドン引きするレベルの汚職騎士。挙げ句の果てには、ちゃんと歩けるっぽいのに車椅子に乗った、横着者の泥棒猫ときた。元々キワモノばかりのキサラギだけど、負けず劣らずで酷いね、ここの連中は……」
　キメラ君に関しては俺の部下ではないのだが。

「お待ちください上司様、車椅子を使っているのには理由があるんです！　これは我が終生のライバルとの決戦で、呪いの反動を受けたのが原因で……！」

と、リリスは、グリムが発した呪いというキーワードに反応した。

「呪いねえ……。報告書にもあったけど、アリスいわく質の悪い催眠術との事だけど」

「あの現実を認めようとしないちびっ子の言い分は気にしないでくださいませ。こないだなんて、私が知り合いのゴーストと世間話をしていたら、そのゴーストがアリスが持ってきた変な機械に吸い込まれそうになっていたわ」

変な機械というのは掃除機の事か。

そういえばこないだ、古い映画に影響されたらしいアリスが、ペテンゴーストをバスターしてやると掃除機を背負い息巻いていた。

……と、リリスの胡散臭いものを見るような視線に気付いたのか、グリムが慌てて言い募る。

「ちょっと待って、その視線には見覚えがあるわ！　あのちびっ子と同じ、疑いの目ね！　……いいわ。魔王軍による、泥の王の解放という恐るべきテロを防げた事だし……。隊長と上司様に、普段私が何をしているのかを教えてあげる！」

グリムは俺達にそう言うと、不敵な笑みを浮かべて見せた――

3

その日の夜。

俺とリリスは前を行くグリムの案内を受け、郊外の路地裏を歩いていた。

「なあグリム。この辺って怪(あや)しげなおっさんやエロい姉ちゃんが住む所だろ。お前がやってる事とやらに、既(すで)に予想が付いたんだけど」

「隊長ったらなんて事言うの、いかがわしい事じゃないからね。まあこの辺は、言ってみればスラム街だからね。目的地は貴族街なんだけど、ここを通るのが近道なのよ」

　道端(みちばた)に立つ薄着(うすぎ)の姉ちゃんが横を通り過ぎるたびウインクを送ってくるが、そちらには近付かせまいとばかりにグリムが腕(うで)を放してくれない。

「……ここは、安い酒場が立ち並び、一夜の夢を売る女達が集まる所よ。そして、家を失った人々が身を寄せ合って眠(ねむ)りに就(つ)く、この国の闇(やみ)とも言える場所……」

　グリムはどことなく陰(かげ)りを帯びた表情を浮かべると、その辺で寝(ね)ていたホームレスの枕元(まくらもと)にそっと一枚の金貨を置いた。

気配に気付いて目を覚ましたおっさんに、グリムは優しく微笑み掛ける。
おっさんは置かれた金を手に取りながら、グリムと俺を交互に見ると……。
「また会ったな兄ちゃん。なんだ、小遣いくれるのかい」
「ようおっさん、また会ったな。コイツは俺の部下なんだけど、何か知らんがおっさんに小遣いやりたいらしい。貰っとけ貰っとけ」
俺とおっさんのフレンドリーな姿を見て、グリムとリリスが唖然とする。
「じゃあなおっさん、最近は夜でも暖かいからって風邪ひくなよ。寝るんなら家に帰って寝た方がいいぞ」
「かみさんのヘソクリを使い込んじまって、帰るに帰れなかったんだよ。そういう兄ちゃんも公園で寝泊まりしてるんだろ？　風邪ひくなよ！」
おっさんは笑顔でそう言うと、グリムから貰った小遣いを握り締め、いそ

おっさんは笑顔でそう言うと、グリムから貰ったお返しを握り締めいそいそと立ち去って行く。
　グリムが呆然とおっさんの背中を見送りながら。
「……ねえ隊長、あのホームレスは知り合いなの？」
「この辺でたまに一緒に飲む、素性も知らないおっさんだよ。賭け事が好きで、よくスッカラカンになっては嫁さんに怒られてるんだってよ」
　俺が言い終わるより早く、グリムが車椅子を加速させ、
「そこの男、お待ち！　家があって嫁もいるなら私のお金返しなさいよ！　紛らわしいとこで寝てんじゃないわよ！」
　追い掛けてくるグリムに気付き、素早い動きで壁を乗り越えあっという間に姿を消すおっさんを見送りながら、リリスが言った。
「ねえ六号。コレは何度も言うけれど、部下や友人は選んだ方がいいと思うよ」

悪の組織の最高幹部にそんな事を言われても。

――おっさんを見送ってからさらに歩き、俺とリリスが案内されたその場所は……。

「これは貴族のお屋敷かい？　『売却予定』と書いてあるが……」

スラム街を通り過ぎ、小綺麗な所に佇むその建物は、確かにお屋敷っぽい見てくれだ。

リリスが看板の文字を読んでみせたが、俺には何が書いてあるのか分からない。

アリスの翻訳は音声のみ。

この国の文字は頑張って自分で覚えろと言われてしまった。

未だに英語の読み書きすらままならない俺には、異世界語習得はハード

ルが高過ぎる。
　そういった頭を使う作業は賢い相棒に任せておこう。
「ここは元々、この国の参謀を務めた男の屋敷なの。以前、魔王軍が大軍で襲ってきた事があったでしょう？　その時参謀を務めていた男が、ある日突然辞任を申し出てその後消息が途絶えたのよ。それだけの地位に登り詰めた男が辞めるだなんて、何かあったに違いないわ。それからよ、売りに出されたこの屋敷について、祟られているなんて悪い噂が流れ出したのは……」
　そんなグリムの説明に、リリスが興味深そうに頷いた。
「なるほどね。つまり、君は除霊に来たというわけか。僕はオカルト番組の類いが大好きでね。加工して作った合成写真を番組に送りつけ、ソレを胡散臭い連中が真面目な顔で解説するのを眺めるのが楽しくて……！」

この人は相変わらず良い趣味をしてるなあ……。
……と、俺がリリスのしょっぱい悪行に感心していた、その時だった。
「――おっ？　リリス様と六号にグリムじゃねえか。こんな時間に奇遇だな。お前らこんな所で何やってるんだ」
「アリス!?　それはこっちのセリフよ！　いつもいつも、どうして私の前に現れるのよ！」
そこにいたのは超常現象の類いを何よりも憎むアンドロイドだった。
こんな夜更けにソレで何をするつもりなのか、業務用の大型掃除機を背負っている。
アリスは車椅子から地面に降り立ったグリムに向けて、
「現れやがったなペテン師一号」
「誰がペテン師一号よ！　もう一度聞くけど、どうしてアリスがここに居る

の？　また私の仕事を邪魔(じゃま)するつもり⁉」
　今コイツまたって言ったな、いつもこんな事やってるのか。
「仕事の邪魔はこっちのセリフだ。この屋敷だって、ようやく下準備が終わって値段が下がり始めたんだぞ。除霊作業も自分でやるから、お前さんは帰っていいぞ」
　バッサリと切って捨てられグリムが顔を引きつらせる中、アリスは背負っていた掃除機を地面に下ろした。
　状況(じょうきょう)はサッパリ分からないが、相棒が充実(じゅうじつ)した毎日を送っていたようで何よりだ。
「お前、俺が知らない間に随分(ずいぶん)楽しそうな事やってるんだなあ」
「おう六号、このペテン師一号が、自分が副業でやってる土地転がしの邪魔しやがるんだ。参謀のヤツが所有していたこの屋敷も、良い感じに噂を振(ふ)り

まいてやったから、そろそろ買いの時期だからな。最近、この界隈でゴーストスレイヤーとして有名になりつつあるアリスさんがこうして出張ってきたわけだ」
参謀のヤツってのは誰の事だか分からんが、コイツいつの間にそんな通り名が付いてたんだ。
「おいアリス、俺もチャックマンよりマシな通り名欲しい」
「ならお前もゴースト共をバスターするか？　今なら仲間に入れてやるぞ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいな！　今なんて言ったの？　『良い感じに噂を振りまいて』、って聞こえたんだけど……」
……ああ、なるほど。
アリスが最近、その辺の子供にお菓子を配っていた理由が分かった。
「キサラギで長くやってるだけあって、さすがに六号でもピンときたか」

「ちょっと、何の事だか私にも説明してちょうだいよ！」
意味が分からず狼狽えているグリムに向けて、代わりにリリスが解説する。
「つまりはこういう事だろう。売りに出されている物件の前で、手懐けた子供達と共に屋敷に変な影が見えるだの、顔を血だらけにしたおじさんが立っていただのと騒ぎ立てるのさ。後は悪評が広まって値段が下がった頃合いで……」
子供一人が幽霊を見たと訴えたところで恐らく誰も信じてくれない。
しかし多くの子供達が見たとなれば、それは子供のイタズラではなく、噂になり……。
……と、そこまで聞いたグリムが叫びを上げた。

ニマッチオンラじゃないのー！」
　そう、後はキサラギお得意のいつもの手口だ。
「ちょっとアリス、子供に嘘(うそ)を吐(つ)かせるだなんて良心が痛まないの!?　それに、安く買い叩(たた)かれた相手があんまりでしょうに！」
　食って掛かるグリムの言葉にアリスはチッチと指を振り。
「自分が買い叩いているのは難有りの売り主だけだ。大概(たいがい)のヤツがあの参謀みたいな悪徳業者ばかりだな。あと、子供に嘘を吐かせるも何も、自分だって見ての通りの可愛(かわい)い子供だ」
「こんなドス黒い子供がいてたまるもんですか！」
　と、俺は更(さら)に気が付いた。
「ああ、そうか。自分で噂を広めた張本人なら、最初から幽霊がいない事を知ってるんだから、完璧(かんぺき)に祓(はら)える除霊屋になれるのか。最近、この界隈で有

名なゴーストスレイヤーってのはそういう事か」
「そういう事だ。ついでに言うならガキ共には嘘を吐けとも言っていないぞ。子供に嘘を吐かせても、どうせすぐにバレるもんだ。事前に仕掛け（しかけ）た投影（とうえい）装置で、菓子で集めた子供にホログラムを見せて脅（おど）かしたのさ」
「そして、噂が広まった後は何食わぬ顔でゴーストをバスターしませんかと持ち掛けるんだね。そうすれば、除霊料金まで取ることが出来て名声まで上がるおまけ付きというわけか！」
俺とリリスはアリスを囲み、ワイワイと褒（ほ）め称（たた）えた。
「賢い、さすが俺の相棒、賢い！」
「さすがはアリスだ、僕が創（つく）っただけはある！」
「「さすがアリス！　さすアリ！　さすアリ!!」」
「おい、そのさすアリってのは褒められてる気があんまりしねえぞ」

と、俺とリリスがアリスの頭を撫で回していると、

「さすアリさすアリうるさいわよ！　ああ、本当だわ……。この屋敷からはアンデッドの気配なんてしないじゃないの！　私は何のためにここまで来たのよ……！」

屋敷を見上げていたグリムが地面に崩れ落ちる姿を見て、さすがに気の毒に思えてきたのかリリスが言った。

「アリス、僕も科学至上主義者ではあるけれど、もうちょっとこう、お手柔らかにしてあげてもいいんじゃないかな。彼女はキサラギの部下なんだろう？」

「お言葉だがリリス様、これは自分のアイデンティティの問題だからな。神や悪魔や精霊なんてファンタジー共はバスターしてやる」

現代技術の粋を集めて創られた科学の申し子にとって、オカルトという

ものは絶対に相容れられない物なのだろう。
……よし。
「リリス様。悪行ポイントが使えないんで、俺にもアリスと同じ掃除機ください」
「え……。まさか君もこんなバカな事に付き合うつもりなのか？　……いいだろう。なら、僕も上司として付き合おうじゃないか。僕と六号の分を合わせ、掃除機は二つ送ってもらおう！」
「さすがリリス様、そういう乗りの良いところも嫌いじゃないっス」
……と、早速本部から送られてきた掃除機を背負っていると、グリムが俺の腰に泣きながらしがみついてきた。
「隊長は私の味方じゃなかったの!?　止めて！　いい大人達がこんなバカな遊びはしないでちょうだい！」

バカな遊びとは失礼な、俺もリリスもこういう乗りは大好きなので、実は結構ワクワクしている。

と、グリムは俺とリリスの表情がまんざらでもない事に気付いたようだ。

「……そう。いいわ、そういう事なら私にも考えがあるからね……」

裸足(はだし)で地面に降り立ったまま、グリムがゆらりと空を見上げると——

「今夜は都合が良い事に、久しぶりの満月ね。以前悪魔を召喚(しょうかん)しちゃった時と同じ、最高の月の位置……」

空を見上げたまま勝ち誇(ほこ)ったように笑うグリムは、

「人ならざる者にとって、満月の夜というのは特別な意味を持つの。いい加減、ペテン師呼ばわりされるのも心にくるのよ！　今日という今日は、そこのちびっ子に私の本気を見せてあげる！　私の想(おも)いでとびきりの大悪魔を喚(よ)んでおしっこチビらせてあげるから！」

一息にそう言って、懐から魔法陣の描かれたシートを取り出し広げて見せた。
「おいグリム、落ち着け！　お前のそういう前振りで上手くいった例しがないぞ！」
「付き合いの短い僕にも分かるよ、これって絶対ダメなフラグだ！」
心配の言葉を投げ掛ける俺とリリスにグリムがカッと牙を剝く。
「おだまり！　そのちびっ子のアイデンティティが神秘を認められないというものなら、私のアイデンティティは、ただひたすらに神に祈る事！」
グリムは天高く登る月を見上げると、訴えかけるかのように両手を組んだ。
「そう、私にはコレだけなのよ！　私にはコレしかないの！　他に私に残された物はといえば……。平均以上の美貌に意外と着痩せするタイプのこの

体。後は溜め込んだ結婚資金と家事全般、そしてただ一人だけを一途に想い続けられる深い愛情!!」

　神に祈る他にもたくさんありそうなグリムが、黄金色に輝く月を見上げ、悲痛に叫ぶ。

　先ほどから発せられる言葉の内容とは裏腹に、その瞳は純粋な子供のように真っ直ぐに空に向けられ——

「我が名はグリム＝グリモワール！　もうここまで追い詰められたら、別にイケメンじゃなくてもいい。お金持ちじゃなくてもいい。ただ、私の事だけを愛してくれるのならそれでいい！　結婚したいの!!　願いを叶えてくれるなら、邪神だろうが悪魔だろうが構わない！　純粋な我が想いに応え、願わくばこの地に降臨を！」

前回とは違い、お供え物等も何も無いにも拘わらず、シートに描かれた魔法陣からは真っ白な光が放たれた。
　まるで、もう後のない独身女に同情した何者かがその想いに応えるように、悪魔を召喚した時の輝きよりも、一段と強い光が放たれている。
「ろ、六号！　アリス！　これは一体何なんだ、報告書にはペテンだのと書かれていたが、僕の目には安っぽいＣＧやホログラムには見えないんだが……！」
　リリスが焦りの声を上げながら、白衣の下から触手を広げて警戒態勢に移行する中、あまりの輝きに辺りの家々が騒ぎ出す。
　やがて光が収まると、悲しき行き遅れの想いに応え、現れたのは——

「ねえ隊長、どうしよう……。あまりにも純粋で清らかな願いが、あろう事か天使を喚んじゃったんだけど……」
　自分で純粋とか清らかとか口走る辺り、あまり反省してない様子だ。
「いや、アリスやリリス様にお前の力を見せられたんだし、悪魔や幽霊喚ぶよりよっぽどマシだろ？　見てくれは綺麗(きれい)な姉ちゃんだし、一体何がマズイんだ？」
　グリムの想いに応えて現れたのは純白の髪(かみ)と翼(つばさ)を持つ天使だった。
　神々(こうごう)しいという言葉の通り、見ているだけで過去の悪行を懺悔(ざんげ)したくなる神聖さがある。
　純白の衣(ころも)を纏(まと)った天使の頭上には光り輝く輪が浮(う)かんでおり、背中の翼

が羽ばたきを見せる度、辺りに光の粒子が舞い散った。
グリムに喚び出されたその天使は、未だ状況を把握していないのかゆっくりと辺りを見回している。
俺の隣にいるリリスに至っては、予想外の展開に弱いのか目を見開き固まっていた。
「マズイのかどうかもよく分からないのよ。ほら、私ってゼナリス教徒じゃない？　それで、ウチってよそ様から邪神扱いされてるでしょう。別に私としては思うところもないんだけど、天使としてはセーフなのかなーって……」
「どう考えてもアウトだろ。だってお前んとこ、不死だの災いだの扱ってるじゃん。幽霊や悪魔を喚び出したり、全力で天使の敵対者じゃん。夜行性なところといい、完全に闇の勢力側の人間じゃん」
その言葉にグリムが震え、俺の後ろにサッと隠れた。

そして意外な事に、こういうオカルト染(じ)みた事に対しては常に煽(あお)っていくスタイルのリリスもまた、珍(めずら)しく怯(おび)えた様子を見せている。
「どうしたんスかリリス様。あんたは目の前に神様が降りてきて説法したとしても、鼻ほじりながら聞き流すような人でしょう」
「君は何て事言ってくれるんだ、さすがに鼻はほじらないよ。というか本能で分かるだろう、アレは人が歯向かってはいけない存在だ……」
　その見てくれは、恐(おそ)ろしいまでに綺麗な顔立ちをした、羽の生えた姉ちゃんだ。
　無口で無表情なクール系美女といった感じの天使だが、特に何をするでもなく、ただその場に佇(たたず)んでいる。
「……というか、君だってさっきから震えているじゃないか」

怯えた様子のリリスの言葉に、俺は今更ながら自分が震えている事に気がついた。
ああそうか、コレが畏怖と呼ばれる感覚なのか。
恐らく、ありとあらゆる生物が目の前の天使の足下にひれ伏さざるを得ないのだろう。
その証拠に、ただでさえ普段から青白いグリムの顔が、今では蒼白を通り越し死相染みた表情を浮かべ震えていた。
どうしよう、いっその事拝んでみたらご利益とかあるだろうか。
「お前はよりにもよって、何てものを喚んでくれたんだ」
「仕方ないでしょ、私だってこんなのが出てくるだなんて思わないもの！　それだけ私の想いが純粋だったって事よ！」
宗派的に考えてこの中で一番身の危険があるはずなのに、こいつ意外と余裕の

余裕あるな。
「ともかく六号、相手は言葉が喋れるのかどうか分からない存在だが、極力刺激しないようにして穏便にお帰りいただこう」
俺とグリムはリリスの言葉に頷いて――
こういった超常的な存在に対し、一切物怖じしないヤツがいる事を忘れていた。
「おいお前。何で頭に蛍光灯載っけてるんだ？」
勘弁してくださいよアリスさん！
「……Ω？　ee、aa……。……えー、あー。……うん、この星の言語はコレですね」

「しゃ、喋った……！」
突然流暢に言葉を話した天使にリリスが驚きの声を上げる。
「人の頭っぽいのが付いてるし、そりゃあ言葉ぐらい喋るだろリリス様」
「ねえアリス、もう少し言葉を選ぼうか！　相手が何か分かっているのか⁉」
身動きをする度にキラキラとした光の粒子を振りまく天使に、一切動じる事もなくアリスが言った。
「コスプレイヤーって呼ばれる生物だろ。盆や年末になると、コミケに大量に生えてくるヤツだ」
「コスプレイヤーを雨後のタケノコみたいに言うんじゃないよ！　と、というかアリス、その人に無礼を働くんじゃないぞ、良い子だからこっちにおいで！」

俺の後ろに隠れながら、リリスが必死に訴えかけるが。

「さっきから一体何をビビってんだ。戦闘服や幹部服なんて物を作ってるリリス様も似た人種だろうが」

「いいから！　アリス、いいからこっちおいで！　もう本当、お願いだから！」

必死に訴えかけるリリスの白衣から金属製の触手が伸ばされる。

……が、アリスは自らに伸びてきた触手をするりと躱すと、興味深げに天使の下へと近付いていく。

「……ほう。この間グリムが見せた、ホログラムとは違うみたいだな」

この世に怖い物など存在しない相棒は、おもむろに天使の胸をわし掴んだ。

実体があるかどうかを確かめたみたいだが、感触が気に入ったのかアリスは遠慮無く胸を揉み続けている。

リリスとグリムが今にも卒倒（そっとう）しそうな表情を浮かべる中、金髪（きんぱつ）少女が白（はく）髪（はつ）天使の胸を揉むという妙（みょう）な絵面（えづら）が展開された。

何だろう、俺もスノウ相手に似たような事をしたけれど、俺の相棒は根（こん）性（じょう）据（す）わりすぎじゃなかろうか。

だが、胸をわし掴みにされた天使はといえば、アリスのそれらの行動に一切動じる事もなく、悠然（ゆうぜん）とした態度で口を開いた――

「…………人の子よ」

「人の子じゃねえよ、機械の子だ。お前幾（いく）らで雇（やと）われてるんだ？　これだけの外見と演技力があるのなら、自分と組んだ方が儲（もう）かるぞ」

俺の目算は[illegible]程（ほど）だろう。

俺の相棒に物怖じしないにも程がある

（リリス様が造ったアンドロイドがあんな事やらかしてるんだし、戦闘になったら後の事はお願いしますね）

（確かに僕が創ったけれど、あの子があんな風に育ったのは君のせいだ。戦闘になったら僕は逃げるぞ）

お互いに責任転嫁しながら囁き合っている間にも、アリスは胸を揉む手を止めようとしない。

「何か勘違いをしているようですね、人の子よ。私は純粋なる想いと願いに惹かれ、この終末の大地に降り立った……」

「人の子じゃねえっつってんだろコスプレ女。厨二病染みた設定語りより、

「体どっから生えてきたのかを教えてくれ」

「[illegible]」

どうしよう、俺は相棒としてアリスを止めた方がいいのだろうか。

……だが、一切表情を変える事のなかった天使だが、ずっと自分の胸を揉み続けるアンドロイドにどことなく困惑しているように見える。

「……人の子よ。この場にひれ伏し、私の言葉に耳を貸しなさ……。い、痛……っ！　いい加減その手を離しなさい！」

「お前こそいい加減しつけえな、機械の子だって言ってんだろ。おっぱい引き千切られてえのかコラ」

ギリギリと胸を引っ張られ、クール系天使の人が突然声を荒らげた。

天使の人はアリスの手を払いのけると、その身をバッと宙に浮かせる。

「私は慈愛と縁を司る熾天使、エル……」

「頭の蛍光灯は何でちょっと浮いてるんだ。強烈な磁石でも使ってんの

か？　あと、羽を動かす度にさっきからキラキラしたフケみたいなもんが舞ってるぞ。もうちょっと綺麗にしておけよ」

そろそろ黙ってくれませんかねアリスさん。

……と、名乗りを邪魔されたエルなんとかさんが、顔だけは無表情を湛えたままプルプルと震え出す。

「この終末の大地には、戯れで降りてきただけなのですが……。いいでしょう、天の御使いに無礼を働くその意味を、身を以て知るがいい。あるべき物はあるべき場所へ……。汝の魂は神の下へと帰るべし……や、やめろぉ！」

指を突きつけ何かを言い掛けていたエルなんとかは、アリスの業務用掃除機の先端に片翼を吸われ、悲鳴をあげた。

「さっきからガタガタうるせーぞ。お前やグリムの厨二病ごっこにいつまでも付き合ってられっか、アホらしい」

「やめっ……！　や、やめなさい、羽を吸うのは本当に止めて！　手入れに五時間も掛かってるの！」

　先ほどまでの威厳は一体どこへ消えたのか、アリスの掃除機に吸われまいと涙目で抵抗するエルなんとか。

「おいグリム。アレ、お前が喚び出した天使だろ？　責任持って何とかしろよ」

「い、嫌よ、さっきあの天使はアリスに何をしようとしたのか理解してるの？　あるべき物はあるべき場所へ。汝の魂は神の下へと帰るべし……。つまりあの天使は即死攻撃を使ってきたのよ。どうしてアリスがピンピンしてるのかは分からないけど、割って入るなんて絶対無理！」

　即死攻撃って何それヤバい。

即死攻撃って何それヤバい
でもまあ、アリスが無事だった理由には予想が付く。
だってあいつ、アンドロイドだもんな。
「止めて！　分かったから、もう帰るから！　羽を吸い込むのは本当に止めて、お願いします！」
「フケだらけのお前の羽を綺麗（きれい）にしてやってるんだろうが、礼の一つも言ってみろ」
「これは私の神気が粒子（りゅうし）になって溢（あふ）れてるだけで、フケじゃないから！　結構ありがたい代物（しろもの）ですから！」
羽のあちこちを掃除機で吸われ、無残に毛羽立たされたエルなんとかは、
「一途（いちず）な想（おも）いに来てみれば、コレは一体何なのよ……！　……私を喚び出した、そこのあなた！」
「ひっ!?　ふぁ、ふぁいっ！」

翼をボロボロにされたエルなんとかは、宙に浮いたままグリムに指を突きつける。

「わざわざ喚んでおきながら、慈愛と縁を司る私にこの仕打ちとはいい度胸ね、邪神ゼナリスの使徒よ！　そんなに独り身をお望みなら、この私が叶えてあげるわ！」

目を色鮮やかに輝かせ、威圧感たっぷりの謎オーラを醸し出してきたエルなんとかは。

「えっ、ちょっ、ちょっと待って！　私そんなの望んでない！　私はあなたを喚んだだけで、そもそもまだ何もしてないし……！」

何かを必死に訴え掛けるグリムに向けて。

「邪神ゼナリスの使徒、グリム＝グリモワール。貴方には……。以降、何かしらの問題を抱えた男としか出会えない呪いを掛けてあげるわ！」

「

「やめろぉぉ！」

エルなんとかの呪いを前に、グリムの魂の叫び(さけ)が響き(ひび)渡っ(わた)た――

5

「うっ、うえっ……。えっえっ、えぐうっ……！」

グリムを祟っ(たた)たエルなんとかが天に帰るのを見送った俺達は。

「もういい加減泣き止めよ。ほらアレだ、お前は変な男に引っ掛かりやすいんだから、これからは、常におかしいのしか来ないと分かるだけ便利じゃないか」

車椅子の上で駄々を捏ねるグリムを伴い、アジトへの帰路についていた。

「ソレのどこが便利なのよ！　……ええ、分かってた。私に集まってくるのは、常に何かしらの問題のある男ばかりだって、分かってた！　でも淡い期待をしたっていいじゃない！　もしかしたらこの人は、何一つ問題の無いとても素敵な人なのかもって、そんな夢を見たっていいじゃない！　私はこれから出会う男に何の期待も持てないのよ!?」

俺にそんな事を言われても。
「これからは会う人皆、どうせコイツもおかしな性癖や爆弾を抱えているんでしょ、私分かってるんだからね……？　でも……。みたいな、淡い期待すら持てなくなるのよ。どんなイケメンと出会っても、コイツもひょっとして女なんじゃないのと罠を疑ってみたり、どんな優しい人に出会っても、どうせあなたも私の財産が目当てなんでしょうと疑ってみたり……。私はこれから、そんな大人の駆け引きすら出来なくなるのよ！」
やけっぱちになったのか、とうとう自分で車椅子を漕ぐ事すらしなくなった行き遅れ。
俺は、そんな面倒臭い部下の車椅子を押しながら。
「そもそも、お前がアリスに対抗して毎度おかしな奴等を喚ぶのが悪いんじゃないか。悪魔に続いて天使だぞ？　お前は不死生物をつかさどる邪神の

司教じゃなかったのかよ」
「ゼナリス様を邪神呼ばわりするのはやめて！」
　車椅子の上で喚(わめ)いていたグリムは、ハッと何かに気付いたように。
「……そうよ、私にはまだ信仰(しんこう)の道があるわ！　ゼナリス様よ！　そう、私が崇(あが)めるゼナリス様が実は超絶(ちょうぜつ)イケメンで、呪いを受けて泣き崩(くず)れながら呪詛(じゅそ)を唱える私を見かね……」
「多分だけど、俺の予想じゃお前んところの神様は女神だと思うんだけど」
「どうして最後の希望まで刈(か)り取るの⁉　何なの隊長、そんなに私に出会いがあるのが気に食わないの⁉　なら、隊長が私を貰(もら)ってよ！」
だってお前死んでる時、ゼナリスを名乗る女の人にアホな死に方するなって説教されたらしいじゃん。
　投げやりになったグリムを運ぶ俺の後ろでは、リリスがアリスに説教していた。

いた

「いいかいアリス。アンドロイドの君には分からないかもしれないが、人には本能というものが備わっているんだ。アレは絶対人が逆らってはいけない存在だった。強者に立ち向かうのは勇敢ではあるけど、アレだけはいけない」

「そうだな、リリス様の言う通りだな。それじゃあ自分は、あのコスプレイヤーから採取した、フケと羽根の研究したいからもう先に帰っていいか？」

「いいわけないだろ！　あと、あの物質をフケ呼ばわりはやめなさい！」

　俺の相棒がドンドンヤバい素材を集めていて心配です。

　というか天使の抜け羽根とか、この世に存在しちゃいけない代物じゃないのか……。

「ねえ隊長、聞いてるの？　そもそも、どうして私がこんなに嘆いているのか分かってるの？　隊長がちっともネックレスをくれる素振りがないからなのよ……？」

……」

「いや、俺だってちゃんと用意しといたんだぞ。でも、リリス様の作戦中に空の王に奪（うば）われたんだよ」

　何気なく言ったその言葉に、車椅子の上で投げやりになっていたグリムが動きを止めた。

「……本当に？　隊長ってば、そんな事言ってまた期待させるだけさせといて落とすんでしょ。いい加減私だって学習したのよ？　耳触（みみざわ）りの良い事言って、そうやって空の王のせいにするんでしょう？　私、分かってるんだからね？　そう簡単にごまかされたりしませんから」

　口ではそう言いながらも、車椅子の上で体育座りしながらチラチラと様子を覗（うかが）ってくるのが本当に面倒臭い。

……あれっ？

と、そういえば……。

「ねえアリス、天使から採取した素材、僕にもちょっと分けてくれない？」
「あれだけコスプレ女にビビってたクセに何言ってんだリリス様。欲しいなら自分に敬語使えよ」
「コレは何度も言ってるけれど、僕は君の親なんだけど⁉」
　空の王相手の作戦以来、誰かを忘れてる気がするのだが……。
「ねえ隊長？　ひょっとして、これから私にロクな出会いが無い事を喜んでたりするの？　ちょっと安心してたりする？　これからは私に、悪い虫が付かなくなる、って……。隊長のその気持ち、正直言ってちょっと嬉しいわ。でもね、私達はまだ仮の婚約者なんだから、あまり束縛されるのも……」
　アジトへの帰り道。
　こんな時間だというのに、近所迷惑も考えず騒ぎ続ける三人の言葉を聞き流しながら。
「[illegible]

四章

VS……

1

アリスがコスプレイヤーごときにビビり過ぎだとからかった結果、リリスがテントに引き籠もってしまった。
そんな面倒臭い上司を放置し、三日が経過。
そして本日、時刻は夕方を過ぎた頃。
ゴーストスレイヤーアリス指揮の下、とうとうアジトが完成した。
大森林にほど近い地に建てられた要塞は、外壁に対ビームコーティング塗

装を施され、蛮族の謎攻撃にもビクともしないだろう。
そして魔獣の大群が押し寄せたとしても、外周を覆うように張り巡らされた有刺鉄線が侵攻を食い止めている間に、要塞に据え付けられた多数の重機関銃でハチの巣だ。

「見ろよアリス、これが俺達の城だ。ここから戦闘員六号さんとポンコツ部下達の、成り上がりストーリーが始まるんだ」
「そのポンコツ部下ってワードが引っかかるな、自分は部下じゃなくて相棒だぞ。六号とアリスとその他大勢のサクセスストーリーに変更しよう」
荒野に建造された巨大アジトの屋上から、眼下に広がる森と荒野を見下ろしていると、背後から声が掛けられる。
「……ねえ君達。それだと、僕がどこにも入っていないんだけど……」
ここ最近拗ねてテントに引き籠もったまま、オレンジ色のザリガニに話し

掛けていたリリスが、アジトの引っ越しのためにやっと出てきた。
「アジトが完成したんだし、リリス様は後一月もすれば帰るじゃないスか」
　そんな俺の正論に、リリスは少しだけ口を尖らせながら。
「何だよ六号、冷たいじゃないか。幹部の中からわざわざ僕を指名したんだ、もうちょっとこう、僕がいなくなると寂しいとか、滞在を延長しませんかとか、なんかあるだろう色々と」
　と、そんな面倒臭い上司の面倒臭い難癖を聞き流していると、アリスがちょいちょいと白衣を引っ張る。
「その事なんだが、リリス様は一月もかからず帰れそうだぞ。位相空間の安定化作業は二回目だからな。優秀な自分が安定化の時間短縮に成功した。褒めてくれていいぞ」

リリスは自らの白衣を引っ張るアリスに複雑そうな表情を浮かべると、
「そ、そうか。よくやってくれたねアリス。でもこのタイミングで言うのはちょっとだけ悪意を感じるんだけど……」
　この星に来てちっとも良いところが無いせいか、どことなく自信が無さそうなリリス。
「別にちっとも使えねーから早く無駄飯食らいを送り返そうってわけじゃない。毎晩飯の注文がうるさくて、早く帰って欲しいわけでもねえからな」
「ねえアリス、やっぱり君反抗期じゃないか!?　創造主にそんな口の利き方をする機能は付けた覚えがないんだけど！　僕は製作者にして神だからね？　君の親なんだからね？　もっと大事にしてくれていいんだよ!?」
　自分の創造物にぞんざいな扱いを受けたリリスが半泣きになりながら訴える。

「リリス様、そんな事よりも同業者の殲滅はどうするんスか？　むしろ、それこそが一番やって欲しい事なんですけど」

そう、リリスを呼んだ本来の目的は、チート染みた力を持った最高幹部に同業者を締めてもらう事なのだ。

アジト建設が完了し、本格的な侵略拠点が出来た今、後は当面の脅威である同業者、魔王軍の殲滅だけだ。

だがリリスはその言葉に、気まずそうに目を逸らすと。

「……魔王軍、魔王軍ねえ……。報告書を読んだ限りでは、楽勝だと思われたけど……。実際のところはどうなんだい？　だって僕、あのデカいトカゲやデカい雀、デカいスライムに関して一切報告受けてないんだけど」

どうやら想定外の強敵達を相手にした事で、だいぶ警戒しているようだ。
「ちょっとばかり強いのもいますけど、リリス様なら楽勝っスよ」
「そうだな、デストロイヤーですらも傷物にする巨大ロボや、怪人級の幹部がいるぐらいで、リリス様なら余裕だろ」
俺とアリスの気休めに、途端にリリスの目が泳ぐ。
「……僕は本来頭脳派だからね。万が一の事があるかもだし、ここは一旦地球に帰ってベリアルを派遣しようか……。ほら、僕の戦い方だとこの星で全力を出すには、大量の悪行ポイントが要るからね。僕がポイント使い果たして弱体化するとキサラギの損失だからね」
説得も空しく、早速ヘタレ出したポンコツ上司。

どうやら先日の、超越した存在である天使との遭遇に、小心者な科学者には刺激が強過ぎたようだ。

「何スか、そんなにこないだの天使にビビったんスか？」

「し、しょうがないじゃないか、僕の本能的なものが、『アレには歯向かっちゃダメぇ！』って訴えてるんだ！　むしろ悪人ほど神を畏れるものさ。僕なんて、今からどんなに善行を積んでもどうにもならない程には悪事をやらかしてるからね」

……まあ、俺もそれを言われると何も言えなくなるのだが。

と、リリスの言葉に黙り込んだ俺を見て、この世のあらゆる超常現象を敵視する相棒が突然切れ出した。

「どいつもコイツも情けねえ。悪の看板背負ってるんだ、むしろ神さんなんて中指を立ててやるべき存在だろうが。リリス様はそれでも自分の製作者か？　ああ？」

「むしろ君こそ僕の製作物なのに、どうしてそんなに神に対して敵意を剝き出しにしてるんだ。というかこの子、大丈夫かなあ……。僕が目を離した隙に、そのウチとんでもない事をやらかしそうで怖いんだけど……」

ご立腹のアリスだが、俺も幽霊や天使は正直怖い。

俺達悪党が遠慮なく悪事を行えるのは、死後の世界なんてないと信じきっているからだ。

リリス程ではないが、賽銭パクったり神社の鳥居に小便かけたりと、罰当たりな事をしてきた俺も、間違いなく死後は地獄行きだ。

「……ったく、このヘタレな親はしょうがねえな。おい六号、魔王関連は自分達だけで何とかするぞ。まあ、アジトが完成した今は、時間さえ掛ければどうにかなるだろ」

「えっ」

期待していた最高幹部による敵の殲滅がキャンセルされ、俺は思わず声が出た。
それを聞いたリリスがホッと息を吐き。
「……そして、何しに来たのか分からねえリリス様は、せめてアジトのそばの謎遺跡調査だけはやってってくれ」
「えっ」
安心しきっていたのだろう。
いつになく辛辣なアリスの言葉に、リリスが驚きの表情で固まった。
動かなくなったリリスを気の毒そうに見る俺に、アリスが言った。
「他人事みたいな顔してるけど、遺跡調査には六号も行くんだぞ」
「えっ」

2

ここが地球外惑星でも陽は落ちる。

　アジト屋上の柵に手を乗せて、荒野の果てに続く地平線へ夕陽が沈むのを眺めながら、しんみりとリリスが言った。

「アリス、ちょっとコーヒーを淹れてきてくれ。砂糖は要らない。熱々のブラックだ」

「そんなもんテメーで淹れてこい。すっとろい事言ってんじゃねーぞ」

……。

「ちょっと待てアリス！　君、本当に口が悪くなったね！」

「自分を創った親に似たんだろ」

「そんなわけない！　僕は捻くれた物言いはするけど、こんな [illegible]

「そんなわけない！　僕に扱くれた物言いにするけど、こんなのミントし
ートの罵声は投げ掛けないよ！　いいからコーヒー！　たまには親の言う事を聞いてくれ！」
　リリスの悲痛な叫びを受けて、アンドロイドのクセに嫌そうな表情を浮かべながら、アリスがコーヒーを淹れにその場を離れた。
　やがて荒い息を吐いていたかと思うと、リリスは気を取り直すかのように前を見る。
「……すまないね六号、ちょっと見苦しいところを見せた」
「いつもの事じゃないっスか」
　どうやら真面目なシーンを演出したいらしいのだが、どうにもこの上司は締まらない。
　俺は空気を読んでそれ以上はツッコむ事なく、リリスに倣って隣で夕陽を眺めていた。

「……この星に来てからというもの、どうにも上手くいかないね」
　リリスは隣の俺を見るでもなく、なんとはなしに呟いた。
　普段はプライドの塊のような自称天才科学者だが、眼下に広がる森や荒野を見下ろしながら、珍しく弱音を吐いている。
「どうしたんスかリリス様。いつもは誰に何を言われても、鼻ほじりながら耳も貸さない傍若無人っぷりを見せるのに、らしくないっスよ」
「前々から思っていたんだが、君達戦闘員の僕に対する評価を聞きたいんだけど。……いや、やっぱ止めとこう。日頃の行いを鑑みるに、ここは聞かない方がよさそうだ。僕だって傷付く時はあるからね」

一応、傷付く事を言われるだけの自覚はあるのか。
「この星の難題を一挙に解決するため、鳴り物入りでやって来たはずなのに……。ここではやる事なす事、ことごとくが裏目に出るね。僕の本来の予定では、そろそろ商売敵（しょうばいがたき）の城を焼き払（はら）って六号を連れ帰っているはずなのに……」
「いや、俺は当分帰らないっスよ。というか、悪行ポイントがマイナスのままですからね。そんな状態で帰れば制裁部隊に大変な目に遭（あ）わされますし」
……と、そんな俺の言葉を聞いて、リリスがおやっという顔をする。
「……なんだ、まだアリスから聞いてなかったのか？　君の悪行ポイントは、僕が何とかする事になってるんだけど」
……。
「えっ、マジっスかリリス様。ていうか、悪行ポイントの貸し借りとか出来たん

ですか？」
　俺が思わず身を乗り出すと、リリスがフッと邪悪な笑みを浮かべて見せた。
「何を言っているんだ君は、そんな事出来るわけがないじゃないか。僕が何とかしてやろうというのは、君が地球に帰れるだけの大悪事を手伝ってやるという事さ」
……またとんでもない事を言い出したよ、この人は。
　俺がリリスの言葉に呆れていると、バカな上司は苦笑を浮かべ肩を竦める。
「君が考えている事ぐらい分かるよ。俺なんかにそんな大悪事を働けるわけがない、ってね。でもね六号、ここでこうして遊んでいる間にも、地球で君を

待っている仲間がいるんだ。……そう。それこそ、女装キメラや強欲な騎士、怪しい宗教にかぶれた地雷女なんかよりも、常に君を心配し助けを求めている仲間がね」

リリスが言っているのは二人の上司の事だろう。

大して強くもない俺を、キサラギの結成当初からずっと見捨てず引っ張ってくれた、大事な上司。

そりゃあ本音を言えば、いつだって地球に帰りたい。

ようやくアジトが出来たとはいえ、ここはまだまだ快適な生活空間とは言い難いのだ。

この星にいる以上、エロ本一つ買うにも悪行ポイントが必要で、テレビもなければ漫画もない。

だが地球に帰れば、目の前でオーク肉を貪る女もいないし、屋台で串焼きを買うことにここで警戒する必要もなくなる。

きを買っだてに一々警戒する必要もなくなる

しかし……。

「気持ちは有り難いんですけど、俺の代わりは誰が務めるんスか？　トラ男さんは前線で暴れるのが大好きな人だし、他（ほか）の戦闘員（せんとう）はアホですよ」

「戦闘員の中でもぶっちぎりでアホな君に務まっていたのだから、どうにでもなるさ。というかこの星にはアリスを残していくからね。あの子がいれば、後任者が誰になっても変わらないさ」

……はっ？

「マジすか。俺、アリスがいないと困るんですけど。俺のお小遣い（こづか）の管理とか一体誰がしてくれるんですか」

「い、いや、それは自分でやろうよ、君もいい大人だろうに。……というか、二人を送り出した当初は随分（ずいぶん）仲が悪かったみたいだけど、今ではすっかり仲良しじゃ

人を送り出した当初は随分仲が悪かったクセに、今ではすっかり仲良しじゃないか」
　そう言って、からかうように笑みを浮かべるリリスだが……。
「ええ……。つーかアリスはこの事知ってるんですか？」
「知ってるよ。君を外す事を話したらえらく反対されてね。というか、未だに納得がいってなさそうだ」
　その言葉を聞いて、アリスからいらない子扱いを受け、送り返されるのではないと知りホッとする。
　――でもまあ、そういう事なら。
「すんません、気持ちは有り難いんですが、それなら俺も、もうちょっとこの星に残りたいんですけど」
「ダメだ」
。

…………
「地球じゃそこまでヒーロー達に押されてるんですか？　キサラギの切り札である、この俺が帰らないとピンチなぐらいに？」
「君の頭はどうなってるんだ。い、いや、確かに戦闘員が一人でも多く必要ではあるんだけどね？　でも、君を地球に帰還させるのは別の理由だ」
　リリスはこちらを振り向くと、ジッと俺の目を覗き込む。
「……戦闘員六号。君、ここに来てから弱くなったろ？　温い暮らしを送りすぎて、悪の組織の構成員である事を忘れているだろう？」
　そう言って、まるで俺の心を見透かすようにリリスは目を逸らさない。
　俺はその時、ふと昔アリスが言っていた事を思い出す。
　確か、『幹部連中は、お前の支援をケチってるってより、悪行を積ませたいんだろうよ。小さな事からコツコツと、やがて大きな悪事に手を染めて、最

後は立派な幹部候補に、ってな』……だったか。
……参ったなあ。
「……何スかリリス様、顔近いっスよ。そんなにチューされたいんですか？」
「……ふふ、よく言うよ。君にそんな度胸は無いクセに……。いや嘘ごめん、僕、今嘘吐いた、その目は本当にやりそうだ！　そうだ、君はこういう事についてだけは、やる時はやるヤツだった、ごめんなさい、許してください！」
リリスは真顔になった俺にひとしきり謝ると。
「……でもね、六号。君はこの星に来て、本当に弱くなったよ。……いや、違うな。温いというか、緩いというか……」
……。
「なんて事言ってくれるんですか、リリス様もこの星の過酷な環境は理解したでしょうに。大体あんた、天使にビビって魔王にビビって、帰ろうとしてる

クセに！」
「う、うるさいよ、僕は頭脳担当だから別にいいんだ！　でも君は、戦ってなんぼの戦闘員だろ？」
　リリスはイライラと柵を指で叩くと、俺の頭に手を伸ばす。

「もう面倒臭いからハッキリ言おうか。地球では皆が帰りを待っている。この過酷な惑星で、より強くなった君の事をね。でも最近の報告書は一体何なんだ！　あの、ふ抜け切った甘ったるいヤツは！」
　しばらく顔を合わせない間によほどストレスでも溜まっていたのか、リリスが俺の頭をワシワシと撫で回しながら、
「こんな未開の辺境で、ハーレム築いてるんじゃない！　ポッと出の女に簡単に飼い慣らされてどうする！　君が頑張っていると思って来てみれば女装

キメラのパンツを覗き、おっぱい女とはヤケに息がピッタリだったり、挙げ句の果てには婚約者！　僕達は惑星を調査し落として来いと言ったんだ！　誰が女を落とせと言った！」

「リリス様、あのおっぱい女とだけは関係を疑われるのも腹立たしいんですが」

　そこは訂正しておかないとと思い余計な口を挟んだものの、リリスの怒りは収まらない。

「うるさい、今は黙っとけ！　……過酷な惑星にでも放り込めば、根っこの部分がいつまで経ってもお人好しな君も、さすがに一端の悪党にならざるを得ないと期待したのに……」

　片手で柵に摑まりながら、精一杯背伸びしてグイグイと頭を押さえつけてくるポンコツ上司。

「皆が必死で戦ってるのに、何を知らない女とイチャイチャしてるんだ！

昔から地球で戦ってたのは何も知らなかったからってイライラしていた

アイツらよりも僕達の方が付き合いは長いのに、こっちの星に永住するだとか、バカな事を言うんじゃない！　君はウチの子なんだからな！」

…………。

まったく、何なんだよこの面倒臭いツンデレ上司は。

自分達で送り出したクセに、俺が居着けばすぐ帰って来いときたもんだ。

かといって地球に帰っても、俺を甘やかしてくれるわけでもない。

面倒臭い。

もう、本当に面倒臭いなこの人達は……。

しかし――

「すいませんリリス様。確かにこの星に送られて、毎日楽しくやってました。

ですが、これだけは言わせてください。俺は

でも、これだけは言わせてください、俺には……」

ちょっと半泣きになっているリリスを前に、俺が大事な事を言い掛けた、その時だった。

「おいコラ、盛りの付いた雌犬上司。自分をパシリに使っといて、イチャコラしてるんじゃねーぞ」

「「いや、コレは違うんだ！」」

俺にやましい事は何も無いのに、リリスとハモった。

3

リリスが部屋に逃げ帰った後、俺とアリスはアジトの屋上で満天の星を眺めていた。

最高幹部が来ると決まった時、いつかは地球に帰る日が来るのは分かって

最高幹部が来ると決まった時、いずれは地球に帰る日が来るのは分かっていたが……。
「なんか、唐突に決まったなあ……」
「どうした、辛気くせえ顔しやがって。何か悩みでもあんのか」
そういえばコイツは残るんだよな。
俺という良識ある相棒が帰ったら、この星は一体どうなってしまうのだろう。
「おいアリス。お前、この星で与えられた任務についてどう思う？　本当に世界征服とかやっちゃうつもりか？」
「そりゃ、やっちゃうに決まってんだろ。そもそも、自分やお前がこの星に送られてきた目的は、地球人類が生き延びるための移住地の確保だからな。任務失敗は人類の滅亡に繋がるんだぞ」
……改めて言われるとかなりの重大任務だった。

実は最近になって知ったのだが、世間一般の人達が知らされている地球の様々な問題は、実のところ危険水域らしい。

化石燃料の枯渇は何百年も先の事だと言われているが、実際には後十年以内に使い尽くしてしまうそうな。

人口増加による食糧事情も、このままいけば間違いなく戦争必至らしく。

世間に知らされていないだけで、かなり深刻な、というか、既に手遅れ気味の環境汚染も進んでいる。

科学者であるリリスいわく、人類が滅びでもしない限り、既に手の施しようがないらしいが……。

とまあ、そんな事が発表されれば世界の混乱は間違いなく、未来を絶望視した連中による暴走が予測出来る。

スノウがこの国の地下に眠る、泥の王の存在を知らなかった事に近いかもしれない。というか、俺も何も知らない一庶民のままでいたかった。

今さら世界の国々が人類の未来のために話し合おうが、利権や権力闘争で雁字搦めの世の中だ、この最悪な状況をどうにか出来るとしたら、力尽くの無茶が可能な俺達悪の組織だけというのは皮肉なものだ。

「……まあ、とはいえ、この星にいる連中も今より悪い事にはならないさ。なんせ自分が調べたところ、人類の生存圏は非常に狭い。この惑星の土地の、実に三パーセントしか人が住んでいないんだ。多分だが、このまま放っておけば人類も魔族も滅ぶんじゃねえかな」

センチメンタルな気分に浸る俺に、夢も希望もない事を言うアンドロイド。

ド。
「……かーっ！　どこの星も世知辛いな！　せっかく綺麗な星を見付けたってのに、どこもかしこもピンチじゃねーか。俺の酒池肉林生活は何時になったら始まるんだよ」
俺は堅いコンクリートの上に寝そべりながら、空を見上げて愚痴を零す。
アリスも隣に寝転がり、同じく空を見上げながら、
「この星では、ちっぽけな国々が、かろうじて人が住める土地にしがみついている状況だからな。どこもかしこも、魔獣や自然災害相手に必死で抵抗してやがる。魔王率いる魔族との戦争なんてかわいいもんだ。いっそ、危険な生き物もいない未開拓の惑星が見付かりゃ楽なんだがなあ……」
地球外惑星なんてファンタジーな世界に来たってのに、何て夢のない話なんだ。
星上から見上げる星空は大気汚染が無いおかげか、とてつもなく澄んで

いた。
見覚えの無い星座だらけの空を見ていると、今さらながらにここが地球じゃないと思い出す。
視線の向きはそのままに、俺は隣に転がるアリスに向けて。
「……おいアリス。お前、リリス様から聞いたんだろ？　俺、遺跡の調査任務が終わったらリリス様と一緒に帰るんだってよ」
「おう、それならとっくに聞いてるよ。お前がいなくなると、これから忙しい事になるな」
……おっ？
「なんだよアリス、優秀な俺がいなくなると仕事が回らなくなるってか？　今夜はリリス様といいお前といいどうしたんだよ、このツンデレどもが」
「違うぞ、手の掛かるヤツがいなくなるからやれる事が増えるんだ。この星

の侵略も一気に進むから、のんびりしてられなくなるって事だ」
遠い惑星で夜空を見上げるという最高のシチュエーションで、口の悪いツンデレアンドロイドが舐めた事を言ってきた。
やはりしょせんはアンドロイド。
別れを惜しむ相棒の気持ちも分からないらしい。

「おい、言ってくれるじゃねぇか、アリスさんよぉ？　そういやお前と出会った頃、確か俺の事をアホだの何だのほざいてくれたな。それがどうだ？　地球には俺が必要だから連れ戻すってよ！」
勝ち誇った俺の言葉を受けるも、アリスは悔しがったり惜しんだりもせず。
「……お、おう、良かったな。そうだな、お前さんは優秀だ。地球に帰っても達

者で暮らせよ。……いいか？　多分地球に帰ってすぐに、ベリアル様から援軍要請(ぐんようせい)が来るはずだ。この星で変なもん食って中(あ)たったとか言って、しばらくの間逃げ回るんだぞ」

……………………。

「えっ、ちょっと待って。俺って地球に帰ったらどこ行かされるの？　ベリアル様は、今どこで何と戦ってんの？　やっぱ俺帰りたくないんだけど」

不穏(ふおん)なアリスの発言に、早々に腰(こし)が引けてくる。

「……いや、自分の予想が外れれば、本部で楽チンな書類仕事を任されるさ」

思わず隣を振(ふ)り向く俺を見ようともせず、アリスが言った。

「お前の予想が外れた事なんて、今までねーだろ！　畜生(ちくしょう)、どうしてこうな

った！　これも全部リリス様のせいだ！　あのポンコツ上司、覚えてろよ。隙(すき)をみて豚肉(ぶたにく)食わせて、『それオーク肉なのに、本当に食べちゃったんですか？』って言ってやるからな！」

「そういう事なら協力してやる。リリス様はグルメを気取ってるクセに、どうせ味なんか分かんねえからな。あの成金上司なら、フォアグラですって言っとけば、オーク肉だろうが喜んで食いつくさ」

　さすがにフォアグラとオーク肉の違いは分かりそうなものだが、変なところで物を知らないリリスの事、あり得るかもしれないと思えてしまう。

「大体あのポンコツ上司はいつも人使いが荒(あら)いんだよ。毎週発売日になると、俺は休みにも拘(かか)わらず漫画(まんが)買いに行かされるんだぞ」

「気軽に部下をパシリに使うのはいただけねーな。自分だって、さっきコーヒー淹(い)れさせられたしな。そんなのは、江戸(えど)時代のお茶汲(ちゃく)み人形にやらせるべきだ」

「そうだそうだ、もっと言ってやれ！　ていうか、ソレを言うなら俺なんて――」

地球から見る星空とは似ても似つかない空の下。
俺とアリスは、空が白み始めて星が見えなくなる明け方まで、心無いポンコツ上司への愚痴を言い合った――

4

翌日。
「俺とポンコツ上司のリリス様だけだと不安なんで、助っ人(すけと)を一人連れてきました」

「助っ人のパトラッシュです」
「僕を馬鹿にしてんのか」
アジトの正門に立つリリスに向けて、パトラッシュを紹介すると怒られた。
「いきなり何なんですかリリス様。コイツは俺の部下の中で、多分一番まともに戦えるヤツですよ？」
「得意技は、タックルでマウント取ってからの腕拉ぎです」
紹介を受けたパトラッシュがポージングを決めて見せる。
「違う、そんな事を聞いてるんじゃない！　この怪人着ぐるみ娘は何なんだ！」
パトラッシュことロゼはよほど着ぐるみが気に入ったのか、アンデッド祭りが終わった今もこの姿で暮らしていた。

「コレには深い理由があるんですよ。コイツはとある爺さんのペットとして、普段からこの格好でいるんです」
「じ、爺さんのペット!?　それは一体どういう事だ！　その声からして、中にいるのは女の子だろう！」
　子供への性犯罪にだけは厳しいのがキサラギだ。
　どうやら妙な誤解を与えたのか、リリスは激しく憤っていた。
「違いますよリリス様。コイツ育ち盛りでよく食うんで、爺さんを騙くらかして飯を食わせてもらってるんです」
「食後のおやつも付いてきます」
「僕には君達が何を言ってるのかサッパリだ！　分からない、天才と呼ばれた僕なのに、何もかもが分からないよ！　この星は本当に、ワケが分からない事ばっかりだ！」
　考える事を放棄したのか、リリスが頭を包えて叫びを上げる。

爺さんを騙くらかすと言っても、お互いに幸せになれる優しい嘘だ、問題ない。

「まあ、こんな形をしてますが、戦闘に掛けては俺といい勝負が出来ますよ」

「いつでも準備万全です、隊長を舵る用意も出来てます」

ロゼに関してはスルーする事に決めたのか、リリスは俺達に背を向ける。

「もうこれ以上理解しようとするのは止めだ！　とっとと遺跡の調査に行くよ！」

俺とロゼは、そう言って森へと向かうリリスを追いながら。

「ちなみにコイツの説明をしておくと、緊急時にはブレスを吐けます」

「種類はファイヤーブレスです」

「さすがに今のは聞き捨てならないぞ、それって一体どういう事!?　パトラ

ッシュは何者なんだ！」

──遺跡へ向かう道すがら。

俺は、ロゼにリリスの説明を行っていた。

「というわけで、リリス様が俺をこの星に送った張本人なんだよ。その仕返しも兼ねて、ほんのちょっぴり騙くらかして来てもらったんだが、どうにもこうにもポンコツでなあ」

この任務が終われば俺とリリスは地球に帰る事になる。

基本的に人見知りな上、人との距離感が摑めない陰キャ上司は、すぐに別れる事になるロゼとは仲を深めない事にしたようだ。

「ところどころ意味が分かりませんけど、つまりリリス様の命令がなかったら、隊長はこの国には来なかったって事ですか？」
鬱蒼と茂る森の中、ロゼは着ぐるみ姿にも拘わらず、俺達の先陣を切って茂みをかき分けていた。
……環境に適しやすいキメラだからかは知らないが、コイツ、こんな格好でよく森を歩けるな。
「まあ、そういう事になるな。いやあの時は死ぬかと思った、なんせ送られた場所がとんでもない上空でな。もし地球に帰る事が出来たなら、リリス様が泣くまで揉んでやるって思ったもんさ」
俺の最後の一言に、距離を取っていたリリスが震えた。
俺を騙くらかしてここに送った張本人は早口で捲し立ててくる。

「ろ、六号、ちょっと待ちたまえ。アレには理由があるんだよ。どうしたって最初は座標がズレるからね。うっかり惑星の中に放り込んだり、海底に沈んだりすれば助からない。かといって、地上スレスレに寸分違わず転送だなんて不可能だ。でも上空なら、ある程度の誤差も許容範囲さ。アリスや六号の落下速度では成層圏で燃え尽きる事もないからね」

…………はあああああああああ？

「お前今なんつった、俺達を成層圏近くに放り込んだのは、アレわざとだったのか！　もうちょっと上に送られてたら、宇宙空間に放り出されてたんだぞ、コラッ！」

詰め寄る俺に怯えながら、リリスがなおも言い募る。

「そ、それでも君が死ぬ事はなかったよ！　君達戦闘員は、宇宙空間でも三分くらいなら生存可能な体に改造されているからね！　多少ズレたとしても、時間内に惑星の重力に捕まると予想してたさ。だ、大体、結果は無事だ

ったんだからいいじゃないか！」
　このクソガキ、とうとう逆ギレしやがった！
　口ではそう言いながら、分が悪い事は分かっているのか、俺を警戒してジリジリと後退るクソ上司。
「あんな所に放り込んで、そんな逆ギレ許されるかよ！　このクソチビが、やっぱ泣くまで揉んでやる！」
「あっ、今上司の僕にクソチビって言った！　コレは幹部会議に掛けてアスタロトに叱ってもらうから……、ま、待て六号！　よし分かった、話をしよう！　一体何が欲しいんだ、それとも何か便宜を図って欲しいのか!?」
　さすがに不利を悟ったのか、ズンズンと近寄る俺に交渉を始めたクソ上司。
「僕は幹部だからね、ある程度の融通は利くはずだ……。止めろ、それ以上

近寄るんじゃない！　い、いいのか!?　やるのか!?　本気なんだな、僕は強いぞ!?」
　リリスが引き攣った表情を浮かべながら、いつでも白衣を開いて触手を出せるよう、俺を威嚇する、そんな中。
　森には場違いな着ぐるみの中から、突然クスクスという声が聞こえてきた。
　見れば、着ぐるみのせいで表情こそ分からないが、ロゼの肩が揺れている。
「アハハ、なんかリリス様と隊長は、上司と部下というより、お友達みたいですね！」
「待つんだ怪人着ぐるみ娘、このポンコツ戦闘員は、どちらかと言うと出来の悪い弟みたいなもんだからね。いつも、僕がどれだけこの男に苦労させられている事か……」

「ああ？　なんで年上の俺が弟なんだポンコツ上司！　あんたの尻拭いみたいな任務がいつも俺のところにくるんだからな、苦労させられてるのはコッチの方だぞ！」

　互いに言い合い近距離でメンチを切る俺達に、ロゼがやっぱり楽しげに、肩を震わせながら言ってきた。

「なんだか、隊長とスノウさんの喧嘩を見てるみたいです。というか、あたしはリリス様に感謝してますよ！　もしリリス様が隊長を送らず、他の人を送っていたら……。もしかしたら、今頃あたしは魔獣の餌になってたかもしれませんからね！」

…………。

　楽しげな様子で結構重めの発言をするロゼに、俺達二人は毒気を抜かれ、思わず顔を見合わせる。

「ねえ六号、この着ぐるみ娘はバカな見てくれに反して、かなり発言が重いんだけど」
「まあ、コイツも結構な生い立ち背負ってますからね。こんな格好してるのも、老い先短い爺さんの、死んだペットの代わりを演じてるだけですから」
　それを聞いたリリスは、関わるまいと視界に入れないようにしていた着ぐるみをマジマジ見ると。
「……六号、ひょっとしてパトラッシュは、君の部下の中で常識人だったりするのかい？」
「腹が減ると、オークどころか俺まで食おうとするヤベーヤツですが、まあウチの部隊の良心ですよ」
…………。
「ゴメン、今聞き捨てならない事を聞いた。君を食べようとするって、性的な意味での事だよね？」

「食欲的な意味っス」

5

最初こそリリスが思い切り引いたものの、一度打ち解けてしまえばこの二人は意外と相性が良かったらしい。
「――そこで僕は言ったのさ。我らは夜を身に纏い、死を揺り籠とする闇の勢力。早くここから立ち去るがいい。さもなくば、この夜が明ける事はないだろう……ってね！」
「凄いですリリス様、あたしのお爺ちゃんみたいな決めゼリフです！」
日頃からちょこちょこ厨二病染みた発言が飛び出すロゼを、どうやらリリスが気に入ったらしい。

なにせこの上司は、自らを黒のリリスなんて言っちゃう本物だ。

爺さんに毒されたロゼがマトモに見える程度には、今日も絶好調に痛い上司だ。

「お爺ちゃんがよく言ってました。愚（おろ）かなる人類は、早く我々の手で滅（ほろ）ぼすべきだって」

「パトラッシュのお爺さんの事はもはや他人とは思えないね。僕も子供の頃は似たような事を言っていたよ」

出会ってから数時間だというのに、早くも共鳴し合う痛い上司と痛い部下。

「あたしもリリス様が他人のようには思えません。その白い服といい言動といい、お爺ちゃんを思い出します」

まあしかし、よく考えてみればロゼとリリスは歳（とし）も近い上、互いにどこか

ズレている似た者同士、何かと気が合うのだろう。
と、それまで上機嫌だったリリスが、ふと何かに気付いたように動きを止めた。
「……君のお爺ちゃんは、僕みたいな白衣を着ていたのか？　つまりは、この星で科学者をやっていたのか……？」
「カガクシャが何かは分かりませんけど、最強の生命体を作り出すのじゃって言って、いつも変な高笑いを上げてました」
ロゼの言葉に、なぜかリリスが目を逸らす。
……そういえばこの人も、最強の怪人を生み出すのだと言いながら、改造室で高笑いを上げていたな。
本人いわく、改造手術前にそれを言うのは、怪人ガチャを引く前に必ず行う験担ぎみたいなものらしい。

施術される怪人からしてみれば、ガチャ呼ばわりされるだなんてとんでもない話だ。
　このマッドな上司に、アンケートが振るわないのはそういうとこだぞと言ってやりたい。
「あれだね、君は他の三人の部下とは違って、なかなか話の分かる子じゃないか。おっと、見たまえパトラッシュ。木の洞に謎キノコが生えているよ。根元や朽ちた幹に生える例はよく見るけれど、こんな所に生えるだなんて……。ああっ!?　パ、パトラッシュ!?」
「コリコリしてて美味しいですね。リリス様も食べますか？」
　リリスが木の洞にキノコを見付けると、ロゼが躊躇なく着ぐるみの中へと入れた。
「パ、パトラッシュ……？　自然界の中で、キノコは特に注意が必要だから

ね？　ホイホイ口に入れると危ないよ　しかもソレ生じゃないか……」
　生のキノコを着ぐるみの隙間（すきま）に入れて、コリコリと音を立てているロゼに引きながら、リリスが何とか危険を説いている。
「分かりましたリリス様、これからは火を通します！　あっ、綺麗（きれい）なキノコが生えてますよ。持って帰って焼いて食べよう」
「分かってない、ちっとも分かってないよパトラッシュ！　知らないキノコを食べるんじゃない、しかも虹色（にじいろ）のキノコだなんて、猛毒（もうどく）持ちアピールがすごいじゃないか！」
　謎キノコに味を占（し）めたのか、更（さら）にキノコを拾うロゼをリリスが慌（あわ）てて制止する。
「食べるなとは言わないから、せめて僕が検査した後にしなさい！」

「分かりましたリリス様、その時は一緒に鍋にしましょう。最近オーク肉が安いんですよ」
　この間農場を見学したばかりのリリスが、オーク肉と聞いて顔を引き攣らせた。
「ええと、パトラッシュはそんなにお腹が空いているのかい？　六号、この子にサバイバル知識を教えてあげなさい。キノコはダメだ。どうしても食べなきゃ死ぬという時は、昆虫食が一番だ。見てくれは悪いけど栄養豊富で、毒がない物が多いからね」
「リリス様、あたし昆虫食だけは遠慮したいです」
「俺も虫食えないんですけどリリス様」
　即答する俺達に、リリスがダメな子達を見る目を向ける。
「君達はそれでもキサラギの戦闘員か。人語を解するオークを食べるのに、

虫に怖（お）じ気づいてどうするんだ」

そう言って、やれやれと呆（あき）れたように肩を竦（すく）めるリリスだが。

「おっ？　ロゼ、あそこに紫色（むらさきいろ）したバッタがいるぞ。なんかケロケロ鳴いてやがる。捕まえてリリス様に食べてもらおう」

「任せてくださいリリス様、あたしがとっ捕まえてきます！」

「今のは僕が悪かった、ケロケロ鳴くバッタはさすがに口に入れる勇気はないよ！　許してください、お願いします！」

6

アジトを出てから六時間後。

俺達は、本来なら目と鼻の先にあるはずの謎遺跡（いせき）に、ようやく辿（たど）り着い

ていた。
「やっと着いたねパトラッシュ。もう何か動く物を見付けても、口に入れようとするんじゃないよ」
「いや、リリス様こそ珍しい物見付ける度、ホイホイ近寄らないでくださいよ。森は危ない生き物が多いんスから」
こんなに時間が掛かったのも、主にこの二人が大きな理由だ。
食べられそうな物を見付けてはどうにか食おうとするロゼに、珍しい物を見付けてはどうにか持ち帰って調べようとするリリス。
この二人がモタモタしているせいで辺りはすっかり陽が落ちてしまっていた。
「どうすんですかリリス様、最初の予定ではちょちょっと入って、中を調べて帰るだけだったのに。今からじゃあアジトに戻るのも大変ですよ？」

はしゃいで疲れ果てたのか、遺跡の入り口で座り込むリリスとロゼに、俺は辺りを警戒しながら陳言する。
「今から帰って、また明日来るのも面倒だ。今日はここに泊まって、朝になったら調査をしよう。この僕がいるんだから、魔獣の心配だけは必要ないからね」
　そう言ってリリスが笑い掛けてくるが、どうにもこの上司は信用ならない。
「念のため、遺跡の中を先に調べませんか？　何か、油断しきって寝転がってるリリス様が、遺跡から出てきたヤバいのに襲われ泣き叫ぶ未来しか見えないんですが」
「……君がそういう事を言うと、たまに当たるから嫌なんだけど……。もう

休みたかったけどしょうがない、あと一仕事しようか、パトラッシュ」
「分かりましたリリス様、遺跡の探索なら任せてください。お爺ちゃんとの思い出の中に、こういう所で遊んだ記憶があるんです！」
　変な事を口走るロゼが妙にリリスに懐く中、俺達は先日大トカゲが守っていた遺跡へと足を踏み入れた。

――なぜか明るい遺跡の内部は、巨大トカゲを退治した際リリスが使った対潜爆雷のせいで、大変な事になっていた。
「……大トカゲが遺跡を守ってたって聞いたんですけど、ちっとも仕事していませんね」
　事情を知らないロゼの感想に、俺を見たリリスが何も言うなとばかりに目配せする。

「遺跡の中がメチャクチャになってるのは、リリス様が使った武器のせいだぞ。トカゲは立派に仕事をした」
「あっ！　この裏切り者！」
　何やらショックを受けている様子のリリスだが、チラリと中を覗いただけの前回とは違い、今回はヤケに遺跡の中を気にしていた。
「……ねえ六号。確か君は、他の遺跡も探索した事があるんだったね。そこの外壁は、ここと同じような素材だったかい？」
　俺に問い掛けたリリスは、珍しく研究者の顔になると、遺跡の壁を撫で付けながら目を細めて観察していた。
「俺がそんな細かい事まで覚えてるわけないじゃないスか。……ああ、でもスノウが遺跡の壁や残骸を削って持ち帰ってましたね。財宝が手に入らなかったから、せめて壁に使われている金属を剥がして売るんだと騒いでました

「そ、そうか。そこまでくるとあのスノウって子を、逆にちょっとだけ見直したよ。金に意地汚い程度なら三流だが、そこまでいけば一流だ。彼女からは、お金のためなら何だってしてやるという思いが感じられるね」
　まぁ実際、ユニコーンに乗れるのなら、身売りも辞さない女だしなあ。
……と、壁を触っていたリリスがしきりに首を傾げてみせる。
「うーん……。どうにも計算が合わないね……」
　そんなリリスの呟きに、俺とロゼは顔を見合わせる。
「何スか、二桁までの足し算引き算なら間違えませんよ。今日はリリス様の助手なんで、手伝えることがあったら言ってください」
「あたし、手足の指としっぽも合わせて二十一まで数えられます」
「そうか、気持ちだけ貰っておくよ、ありがとう。あとくれぐれも言っとくけ

と作戦行動の際は、君達二人は絶対に頭脳担当と一緒にいなさい」
　リリスがそんなよく分からない事を言った後で、ブツブツと独りごちる。
「グレイス王国に放置されている戦車は、明らかに経年劣化で朽ちていた。しかし、この遺跡の外壁は何らかの金属で出来ているのに錆びてもいない。そんな技術があるのなら、なぜ戦車に使わない？　無論、この外壁に使われている金属が重いだとか、戦車に不向きな可能性もある。だがそれなら、表面だけでもコイツでコーティングをするはずで……」
　と、自分の考えに没頭し始めたリリスの様子に。
「おいロゼ。長くなりそうだから、マルバツやろうぜ。先にマルかバツを五つ並べた方が勝ちの遊びだ。どうだ、今晩の晩飯を賭けて勝負しないか？」
「是非とも受けて立ちましょう。お金じゃなく、晩御飯を賭けるところが気に入りました」

……………あっ！
「言っとくけど一食分だからな？　食い放題じゃないぞ、じゃないと俺が勝ってもそこまで食う事はないけれど、お前、十人前ぐらい平気で食うじゃん！」
「隊長は隊長なんだからケチくさい事言わないでくださいよ、隊長。太っ腹な隊長はカッコイイですよ！」
「……謎の光学兵器を使う蛮族といい、トカゲに見せかけたロボット兵器といい、なぜこの惑星は高度な文明の痕跡を隠すんだ？　その割りには、安っぽい戦闘車両は無造作に放置されてもいる。まるでこれみよがしに見せ付けているかのように……」

　――三十分後。
　それまでずっと悩んでいたノリスが、何かに気付いたように顔を上げた。

それまでずっと悩んでいた[illegible]が、何かに気付いたように顔を上げた

「戦闘員六号！　大事な事を聞きたいんだが、ココ以外に見付かった遺跡内部には、人の骨はあったかい⁉　巨大ロボットが格納されていたという場所には、ロボットしかいなかったのか⁉」

「だからルールを覚えろつってんだろアホの子め！　自分のターンには一つしか書けないし、別のターンになったら書いたバツを消して移動させるとか出来ないから！」

「じゃあ、じゃあ、隊長のマルとあたしのバツの位置をチェンジするのはダメですか⁉　だってこんなのズルいですよ、先手を取った隊長の方が、何だか有利な気がします！」

「だったらいいよ、もうそっちが先手でやり直しても！　ていうかお前、誰かとゲームをした事ないだろ！」
　マルバツの勝負を巡って喧嘩する俺達に、リリスがコメカミを引き攣らせ。
「大事な仕事中なのに、何やってるんだ君達は！　ゲームなら、後でオセロをあげるから任務が終わってから好きなだけ遊びなさい！」
「オセロはちゃんと貰いますけど、今はそれよりマルバツですよ。コイツ、ルールを覚えないんです」
「お爺ちゃんが言ってました。人がルールの中で生きるなら、人を滅ぼすべき存在のお前はルールを守らなくていい、って」
　コイツ、飯が懸かってるからってメチャクチャ言い出しやがったな。

コイツ、晩飯が懸かってるからってペラペラ言い出しやがったな

「都合のいい時だけ爺さんの言葉を使いやがって、絶対そんな事言ってないだろ！」

「た、多分言いました！　ていうかお爺ちゃんはこういう事言いそうな気がします！」

「今、凄い発見をしたところなのに、君達二人はうるさいよ！　それ以上騒ぐなら触手の刑だぞ！」

俺達を叱りつけたリリスは、ソワソワしながら改めて遺跡内部を見回した。

「……そうだ、そうだよ！　この遺跡は長い間放置されていたはずなのに、未だに明かりが灯っている。しかも、この光源のエネルギーは電力か……」

興奮気味のリリスに軽く引きながらも、俺が明かりの下を見てみると。

「ガラス球が浮かんでますね、なんスかコレ。中に妖精さんでも飼ってるんですかね?」
「違う!　いや、あの妖精さんという生物も未だサッパリ分からないんだけど……。この浮遊している物体は、周囲の電磁波をエネルギーとして発光しているようだね。そしてコイツが浮いてる原理は、重力を遮断する素材、もしくは反重力技術が使われている」
　リリスが言ってる事は全く理解出来ないが、俺は真面目な顔で頷くと。
「つまり、不思議パワーで光って、不思議パワーで浮かせてるって事ですね?」
「ちがわい」
　難しい事は分からないが、一つ気付いた事がある。
「こんな難しい事しなくても、その辺にコンセントをぶっ挿すんじゃダメなん

ですかね。もうここの遺跡だと、確か明かりが壁に埋め込まれていました
よ？」
「それだよ！　わざわざこんな事をする理由があるはずだ。たとえば……。
パトラッシュ、この地で地震はよく起きるのかい？」
「えっ、地震……ですか？　昔はよく起きたらしいですけど、ここ何十年か
は全く起きてないみたいですよ。砂の王が森の近くから引っ越してから、地
震が急に減ったそうです」
　それを聞いたリリスが納得がいったように頷いた。
　その目はどことなく遠くを見ているような、半ば達観したものになってい
る。
「砂の王というのは、報告書にあったモグラだね。その巨大モグラはなぜ餌が
豊富な大森林から引っ越したんだろう。外敵に脅かされたような

豊富な大森林から引っ越したんだろう、ってことして自分を脅かすような魔獣でも現れたとか？　……そう、たとえば僕が倒した巨大トカゲとかね、ハハハハハハハ！　……六号、宙に浮いた光源一つで、分かる事がたくさんあるんだ。君は今の状況が理解出来るかい？」

遠くを見る目から、だんだんやさぐれた目に変わったリリスが、どこか投げやりに尋ねてくるが……。

「もちろん、ちっとも分かりません」

「あたしもサッパリ分かりません」

「そうか、もういい、相談する相手を間違えた僕がバカだった。アリス！　アリース！　くそう、こんな時に相談出来るアリスがいない！　何て事だ、調査を早期に中断して、戦闘員達は一旦地球に引き揚げさせた方が……」

リリスの独り言が多くなり、いよいよワケの分からない事を口走り始めたその時だった。

遺跡のずっと奥の方から、地鳴りのような鳴き声が聞こえてきた。

「…………六号。僕はアジトに帰るから、君はちょっと奥を見てきてくれない？」

「嫌っス。これ絶対行っちゃダメなヤツじゃないですか」

先ほどまでのリリスの雰囲気から今の状況を予想してみる。漫画とかでたまにある、知ってはならない秘密を知ってしまった連中が、口封じに来た黒幕に消されるパターンだ。

俺と同じ事を考えたのか、リリスが目をキョドらせながら。

「ねえ六号、もう地球に帰ろうか。何だかこの惑星は色々ヤバい気がするよ。宇宙創世の根源に関わる、天使なんて存在がヒョイッとそこらに現れたり、とてつもなく高度な技術がこうして地下に隠されていたり。今日ここで僕達は、何も見てないし知らなかった。そういう事にして、遺跡の入り口は埋

めてしまおう」
「何て事言うんですかリリス様、バカな俺にはよく分かりませんが、この遺跡が凄い発見だって事ぐらい理解出来ますよ。アジトに逃げるのは賛成ですが、埋めちゃったらアスタロト様に怒られますよ」
　いつもなら知らない技術を見れば飛びつきそうなリリスだが、今日は何だか様子がおかしい。
「アスタロトに怒られるぐらい何だ。アホな君にも分かるよう、ハッキリ言おうか。この遺跡を造った連中は、『地震で明かりが無くなると困るから』と、その程度の理由で光源を宙に浮かせているんだ。コンセントを使わず、電磁波による蓄電技術は地球にもある。でも、それらはまだ実用化まではされてないんだよ。そして、こんな代物を長年浮かせていられる技術もない。分かるかい？　ここに住んでいた何者かは、間違いなく人類の技術を超えてい

る」

リリスは何に怯（おび）えているのか、真剣（しんけん）な顔で訴（うった）えかけた。

「ソレを聞かされても、俺からしたらそうっスかとしか言えないんですけど。高い技術を持つリリス様も、触手が無ければそこらの猫（ねこ）に泣かされるクソ雑魚（ざこ）じゃないっスか」

「う、うるさいぞ、今は僕の話をしているんじゃない！　技術の差は種族の差だ。いいかい、侵略（しんりゃく）先の相手国が、実は自分達より強かったただなんてシャレになっていないんだよ」

リリスは俺の態度が気に食わないのか、わざわざ一本の触手を持ち出し、俺の頬（ほお）をペチペチと叩（たた）いてきた。

そもそも、俺がスパイとしてこの星に派遣（はけん）されてきたのも現地人の力を

そもそも、何かスパイとしてこの星に派遣されてきたのも現地人の方を見極めるためだ。
だからリリスの言ってる事も分かるのだが……。
――と、その時。
「あれっ？　何ですかソレ、リリス様から変なの生えた！」
白衣から生えた触手を見付け、ロゼが驚きの声を上げた。
「……えっと、ごめんねパトラッシュ。今六号と大事な話をしているから……」
困ったように言うリリスに向けて。
「あたし、そのウネウネした銀色のヤツ、子供の頃に見た事があります！」
…………。
「本当はずっと前から聞きたかったんだけど、あえてスルーしていたんだ。ね

えパトラッシュ、君は一体何者なんだい？」
　真剣な表情を浮かべ、静かな声でリリスが言った。
「あたしはマウンティングゴリラのパトラッシュです」
「よし分かった、そのおかしな設定はもうどうでもいい！　本当のところを聞こうじゃないか！」
　自己紹介を遮られたパトラッシュは、着ぐるみの頭をスポンと外すと。
「それでは改めまして……。隊長の部下で、キメラのロゼです。よろしくお願いします、リリス様！」
　着ぐるみから現れたロゼを見て、リリスがぽかんと口を開けた。
「……いや、ちょっと待って。六号、確かロゼっていうのは……」
「報告書に書いたじゃないですか。食べた物の特徴を取り込んで強くなる、将来の怪人候補にして戦闘員見習いのロゼっスよ」

俺達の説明に、リリスが頭を抱えてしゃがみ込む。
「何なの!?　もう分かんないよ、本当に意味が分かんない！　この子がキメラのロゼだというなら、僕がちんこ見たキメラ君は何だったんだ！」
ああ、なるほど。
リリスは報告書にあったキメラの部下は、ラッセルの事だと思っていたのか。
「何言ってるんですかリリス様、報告書にはちゃんと女って書いたじゃないスか」
「いやもちろん書いてあったけど！　そうなんだけど！」
何の事だか分からずに首を傾げているロゼに向け、
「一応言っておくけどキメラちゃん。君にちんこは付いてないよね？」
「すいません、あたしさっきまでリリス様の事お爺ちゃんに似てると思ってま

したが、やっぱ取り消してもいいですか？」

ロゼにドン引きされながら、リリスが慌てて首を振る。

「違うんだよキメラちゃん！　コレにはちゃんと理由があって……！」

「リリス様は女装したラッセルにちんこ見せつけられたもんだから、キメラには性別がないと思ってたんだよ」

「あたし、ラッセルさんの事もう同族として見れないんですけど……」

「――つまりパトラッシュはロゼで、報告書にあったキメラちゃん。そして君は、子供の頃からこういう施設で育てられた。……で、僕の触手に似たメカメカしい物を見た事があると」

「はい、大体それで合ってます」

俺とロゼの説明で、リリスがようやく理解してくれた。

「最初からロゼと名乗って欲しいよ、そうすればこんなフケの分からない事

にならなかったのに……。ほんと、パトラッシュって何なんだ……」
　これまでの事でドッと疲れが出たのか、リリスが肩を落として呟いた。
「偽名はダメなんて俺達が言っても説得力無いっスよ。リリス様なんて本名安田じゃないっスか」
「や、安田は止めろ！　キサラギに入ったら、本名で呼ぶのは禁止だぞ！　それより、早くここを出るぞ！　さっきから聞こえる唸り声がこっちに来るかもしれないだろう！」
　いつのまにそんな規則が出来たのかは知らないが、顔を真っ赤にしながら安田が叫ぶ。
と、本名を呼ばれて赤くなったリリスの白衣がクイクイと引っ張られた。
　着ぐるみの頭の部分を取り外し、珍妙な姿になったロゼは、リリスを真っ直ぐ見つめながら。

「リリス様、あたしここを知ってるかもしれません。奥から聞こえる唸り声は、多分怖いものじゃないと思います」

自分でもどうしてそんなことを知っているのかは分からない。

そう言いたげな、どこか不安そうな表情で。

「リリス様と隊長は、アジトに帰って待っててください。あたしが奥を調べてきます」

ロゼはそう言って、俺達を安心させるようにはにかんだ。

7

——誰かの対潜爆雷のせいで、あちこちの謎光源が砕け、遺跡の廊下がお

ぼろげな光で照らされていた。
　足下(あしもと)には何かの残骸(ざんがい)が横たわり……。
「おいロゼ。ここはもしかしたら、お前の育った場所かもしれないんだろ？この遺跡をこんなにクチャクチャにしたのはこの人だ。文句があるなら遠慮(えんりょ)なくぶつけていいぞ」
「ま、待つんだ六号！　君だってあのトカゲの巣穴から、こんな遺跡が見付かるだなんて予想もしなかったクセに！」
　俺とリリスの口数がいつもより多いのはご愛嬌(あいきょう)。悪の組織の幹部と戦闘員が、子供を置いてビビって逃げ帰るなんて出来やしない。
　一人で奥に行こうとするロゼを説得し、三人での探索(たんさく)を続行していた。

「あの、隊長もリリス様も無理しなくていいですよ？　さっきから変なのが見付かる度にビクッてしてますけど、あたしは不思議とこの子達が怖くないんです。だから一人でも大丈夫ですよ？」

　まばらな明かりに照らされた薄暗い廊下を先頭に立ったロゼが進む中。

　俺とリリスはロゼの小さな背中を目印に、未だ唸り声が響く奥へと向かって行った。

「……しかし、落ちている残骸を見る限り、コレは自然に崩壊したわけではなさそうだね。ちなみに僕の対潜爆雷でやられたワケでもないからね？　コレは昨日今日動かなくなった残骸じゃない。何らかの戦闘が行われた跡だ」

「おいロゼ、この人の言う事は信じるなよ？　確証もないクセに、いつも適当な事ばっか言うからな」

　リリスの抗議の視線を受け流していると、ロゼがクスリと笑みを浮かべる。

そ

先ほどからあれほどビビっていたクセに、何だかんだと文句を垂れて、それでも付いてきてくれるリリスに思うところがあるのだろう。

「リリス様は、やっぱりどこか、お爺ちゃんに似てますね」

ポソリと零したロゼの言葉に、人の好意に慣れていないリリスがソッポを向いた。

――遺跡の奥には大きな扉の部屋があった。

中から響いてくる唸り声に警戒しながら扉を開くと、そこにはどこかで見たガラスケースが置かれていた。

そう、確かコイツは、隣の国のトリスで見かけたヤツだ。

ラッセルが封印されていたのと同じ物で……。

見たまえ六号、コレはガラスケースの中でヤバいヤツを培養する装置だよ！　具体的には、ホムンクルスの美少年とか、もしくは誰かのクローン人間とかだ！　アリスにコレを解析してもらって、第二第三のアスタロトやベリアルを作ってもらおう！　生まれたての優しくて甘っちょろいアスタロト達に甘やかされながら、楽ちんに養ってもらうんだ」

　俺が初めてコレを見た時と同じような反応をするリリス。

「あの、すいませんリリス様……。これって多分、あたしの寝床だと思います……」

　ガラスケースの前で浮かれていたリリスに向けて、ロゼが申し訳なさそうな顔で言う。「……もちろん僕には分かっていたさ。コレは科学者ジョークというヤツだ。……なんだね六号、その顔は。言いたい事があるなら後で聞くから、今はそっとしといてくれ」

俺がニヤニヤしながら見ていると、リリスは顔を赤くしながら調査を始めた。
　そんなリリスと俺が、次に向かった先は――
「リリス様、何か言う事はありますか？」
「六号、彼を見るがいい。おそらくはとても長い間、この場所を守り続けたはずだ。こんな風に身動き取れなくなっても創造主のために任務を果たすだなんて、どこかの反抗期を迎えたアンドロイドに見習わせたいところだね」
　俺達の目の前には、手足を破壊されながらも地鳴りのような唸りを上げる、人型ロボットが横たわっていた。
　大きさは大体三メートル程。
　何の素材で出来ているのか分からないが、鉛の銃弾程度ではどうにもな

らないのはこの俺でも理解出来る。
「リリス様がビビってたのって、コイツの事っスか」
「う、うるさい。君も遺跡の奥に一人で行くのを怖がってたクセに」
と、部屋の中をウロウロしていたロゼが、そんな俺達の下にやってくる。
「これは庭師ロボットのトメキチさんですね」
「「トメキチさん」」
これまでのディストピアな空気を台無しにしたその言葉に、俺とリリスが思わずハモる。
「庭師ロボットというのが何かは分かりませんが、このゴーレムはトメキチさんです。なぜか名前が浮かびました」
（……リリス様、トメキチさんをどうします？　コレ、アジトに連れてって修理します？）

（いやいや、さすがの僕も初対面のトメキチさんを修理する事は出来ないよ。いかに僕が天才科学者とはいえ、地球外ロボットの構造なんて知らないからね）

　俺とリリスのヒソヒソ声が聞こえたのか、ロゼが小さく首を振る。

「いえ、トメキチさんは、もう庭が無いのでそろそろ退職したいそうです。腕(うで)が無くなったので背中の停止スイッチも押せず、押して貰(もら)えると助かると言っております」

「ええ……。お前ロボ語が分かるのか……？」

　ロゼとリリスはトメキチさんの停止ボタンを押すため、巨大(きょだい)な背中へ回り込む。

　俺はといえば、トメキチさんの事は二人に任せ、金目の物でも残ってないかと辺りを見回していると……。

ふと、壁に貼り付けられた地図が目に入った。
ソレに近付き触れてみると、紙ではなく石油製品っぽい事が見て取れる。
「六号、何を見てるんだい？　こっちはトメキチさんの退職願を受理したよ」
リリスの言葉にそちらを見れば、ロゼが動かなくなったトメキチさんに手を合わせ、静かに祈りを捧げていた。
基本的にいいヤツなのだが、着ぐるみは頭だけでなく全部脱いだ方がいいんじゃないか。
……しかし、庭師ロボットのトメキチさん、謎遺跡に超文明か……。
「リリス様、俺もう考える事を放棄してもいいスかね？」
「君には、元からその分野で期待してない。こういう事は僕とアリスに任せと

け。……と、そんな事よりこの地図は……」

二人で地図を眺めていると、どこかスッキリした顔をしたロゼがやってきた。

「隊長、アジトに帰りましょう。多分ですが、もうココには何も無い気がします。自分でも、どうしてそんな事が分かるのかは謎なんですが……」

少しずつ思い出せてはいるようだが、肝心の部分に関しては、相変わらず記憶が飛んだままらしい。

「あ、この地図……」

と、ロゼはふと、俺達が眺めていた地図の上を指差した。

「これ！　ここにあたしが眠っていたそうですよ。なぜか今なら分かるんですけど、あたしが最初に見付かったこの遺跡。ここはウチの別荘です」

この遺跡に来てからドンドン記憶が戻っているのか、ロゼがそんな事を言い出した。
　別荘って何なんだ、お前キメラじゃなかったのか。
　それとも、キメラ王国のお嬢様だったのか？
「……リリス様は賢いんでしょう？　コイツと気が合うじゃないですか。コイツの素性を探るのは、リリス様に任せていいですか？　俺、ロゼに関する情報量が多すぎて、そろそろおかしくなりそうっス」
「君は既におかしいよ。というか僕の方がこの子の事情に疎いのに、また無理難題を吹っ掛けるなあ……」
　先ほどマルバツに使っていた俺のマジックで、地図にちょんちょんとマークを付け出したロゼを横目に、リリスが言った。
「簡単にまとめると、彼女はここで生まれ、別荘とやらで眠っていたと。そして目を覚ますと、彼女の故郷だったこの遺跡は何者かに荒らされていた。そ

して本人は記憶を失っている、と……」
「……遺跡を荒らした何者かって、リリス様の事じゃないんですかね」
「僕の対潜爆雷じゃここまでの威力（いりょく）はない！　ほ、本当だよ！　大体この遺跡には、ほとんど物が無かったじゃないか！　本当だからね、だからお願いその目を止めて！」
　今回の遺跡調査は、このがらんどうで残骸しか残っていない謎遺跡が、ロゼの生まれ育った場所だと判明しただけでも収穫（しゅうかく）か。
　と、そんな俺達の話にロゼが割り込む。
「あたしの記憶では、もっと色んな機械がたくさんあったはずなんですけど……。門番の巨大オオトカゲ、キクゾウさんもいたはずなのに……。リリス様がキクゾウさんを止めるまでは、誰（だれ）がどうやって遺跡に入ったんでしょうか？」

おっと、ロゼのさらなる新情報にリリスの心が折れそうだ。
「どうすんスかリリス様、記憶を無くしたキメラっ子の故郷をメチャクチャにしただけでなく、あんたがぶっ殺したオオトカゲ。あれ、キクゾウさんなんですって」
「ぎ、逆にこう考えるんだ！　キクゾウさんはロゼが帰ってくるまでココを守り続けるのが使命だった、僕に倒されたのはその使命を終えるため……。……アジトに戻ったら、ロゼ君に大量のジャパニーズジャンクフードをご馳走しよう。これで許してくれませんか？」
「ジャパニーズジャンクフードが何かは分かりませんが、ぜひそれでお願いします」
　それが何なのかは分かっていないが、食べ物的な何かだとは分かるのか、ロ

ゼがノータイムで即答する。
　ジャンクフードに負けたキクゾウさんにとても心が痛むのだが、ロゼからは、リリスが言う通り彼は立派に職務を果したので、トメキチさんと一緒にお勤めを終えたのは、むしろ良い事だったと感謝され。
　日頃から人に恨まれた事しかなかった陰キャ上司は戸惑いを浮かべて見せた——

8

　翌朝。
　例の遺跡で一晩を過ごし、アジトへ帰ってきた俺達をアリスが出迎えてくれた。

「やっと帰ってきたか不良ども、目と鼻の先の遺跡の調査で何で朝帰りしてくるんだ」
開口一番に皮肉ってくるアリスだが、俺達の様子を見て首を傾げた。
その視線の先には、どこかスッキリした顔のロゼ、そして、その真逆の表情のリリスの姿。
「おい六号、ロゼはいつにも増してアホ面だし、リリス様は鬱屈とした陰キャ度が増している。遺跡で一体何があったんだ？」
そんなアリスの問いかけに、俺が一部始終を説明すると……。
「――また、面倒臭い事になってるな。で、記憶を思い出したロゼが、この地図に五つのマークを付けていったと。一つはロゼが見付かった遺跡だな。そして、一つはお前達が昨日調べた遺跡で、一つはこないだのトリスの遺跡か。残る二つの遺跡の片方は……。この位置は魔王の本拠地、それも魔王城があ

る場所じゃねーか」
　アリスは俺達が持ってきた地図を見ながら、そんな事を言い出した。
「……えっ、マジで？　コイツの別荘や他の拠点が魔王に乗っ取られてんの？　もしくは日頃のコイツの人類は敵だのって危ねー言動といい、まさか……」
「あああ、待ってください隊長、それは誤解がありますよ！　あたし、魔族ではないですから！　いや、そりゃあ同族のラッセルさんが魔王側に付いてましたが、本来あたし達には魔族や人類の区別はなくって……」
　慌て始めたロゼに向け、アリスが憐憫の目を向けた。
「心配しなくても、アホなお前を内通者だなんて疑わねえよ。むしろお前の別荘が荒らされていた事から、我々の商売敵である魔王がお前の拠点の一つを乗っ取ってるというのが正しいだろうな」

アリスのそんな冷静な言葉に、ロゼがホッと息を吐く。
「それより、もうパトラッシュは止めたのか？」
アリスの問い掛けに、サッパリした顔のロゼは笑みを浮かべ。
「いやあ、これだけ色々分かっちゃうと、新しいお爺ちゃんの下で食っちゃ寝しているのはダメな気がしてきまして……。あと、あたしの過去を調べるために色々協力してくれた隊長や皆への恩を、キサラギで働いて返そうかなって……」

そう言ってテヘヘと頭を掻くロゼだが、色々分かる前でも食っちゃ寝しているのはダメだと思う。
……と、苦笑を浮かべているロゼに、アリスが言った。

「随分(ずいぶん)サッパリした顔しやがって。ようこそ秘密結社キサラギへ。ウチの結社は悪の組織だ、非道な行いも躊躇(ちゅうちょ)しないし裏切りも許さねえ。敵は潰(つぶ)すし正義も無い。だが……」

　最近、だんだん表情豊かになってきた合理主義で出来たアンドロイドは、

「キサラギは仲間を大事にするんだ。魔王(まおう)に乗っ取られたお前の家は、どれだけ時間がかかっても必ず取り返してやるからな」

　これから俺とリリスが地球に帰還(きかん)し、この地の戦力も落ちるというのに言い切った。

「……おいおい、アリスさんよお。俺が帰るって事を忘れてないか？　この星の戦力はガタ落ちするんだぞ？　ほら、言えよ。言っちゃえよ。六号さんの力があれば楽勝なのになって」

「そうだな、六号がいてくれれば三年で魔王城を乗っ取れるだろう。お前抜(ぬ)

きじゃ三年は掛かるところだ」
　おっ、何だコイツ、やけに素直じゃ……。
「……なあ、ちっとも縮んでなくない？　俺がいれば一年以内には取り返せるだろ？」
「お前さんがいても三日ぐらいしか縮まらないよ。だからロゼの事は任せて安心して帰れ。お前が必要とされてるのは地球の方だ」
　と、そんな俺とアリスのやり取りを見て、ロゼが楽しげに笑みを浮かべたその時だった。
　それまでジッと黙り込み、所在なさげにしていたリリスが言った。
「……君は強いねキメラちゃん。それに比べて僕ときたら、結局最後までいいとこ無しだ」
　と、リリスがどことなく吹っ切れた表情で。

「君の事は報告書で聞いてるよ。今までずっと情報を餌に戦わされて、待たされ続けてきたんだろう？　せっかく手掛かりが摑めたのに、あと三年も待つつもりかい？」
　リリスのそんな言葉を受けて、ロゼが困った顔で俺達を見る。
「君は、今日をもって正式に我々の身内となった。先ほどアリスが言ったように、秘密結社キサラギは仲間を大切にするホワイト企業だ」
　ホワイト企業というところには大いに疑問が残るところだが、頼りないポンコツ上司は、この瞬間だけキサラギの誇る最高幹部に進化したらしい。
「いいだろう。戦闘員見習いロゼ、ようこそ秘密結社キサラギへ！　最高幹部の一人として君を心から歓迎しよう。そして……」
　いつになく機嫌の良さそうなアリスと同じく、リリスは楽しげな表情を浮かべ。

「行きたい所があるのだろう？　知りたい事があるんだろう。なに、遠慮する事なんてないぞ。キサラギに不可能なんてないのだから！」
色々と吹っ切れたらしいリリスが、バッと両手を広げて問い掛けた。
この国で長い間日陰者扱いをされたロゼは、こんな事を言われた経験が無いのだろう。
爺さん以外に身内もおらず、甘える事も許されなかったのだろう。
きっと誕生日を祝って貰った事すら無いのではなかろうか。
そうでなければ、こんなに興奮で顔を赤くしたりはしないはずだ。
ちょっと泣きそうになりながら、顔を赤くしたロゼが意を決して口を開く。
「リ、リリス様。……その、あたしのお願いは、魔王の下に行く事です。そし

て、どうして遺跡に住んでるのか、あたしの事をどこまで知っているのかを聞きたいです！」

それを聞いたリリスは満面の笑みを浮かべると。
「いいだろう、魔王との話し合いだな。ああ、話し合いは大の得意さ！」
と、普段引き籠もってばかりの陰キャ上司は堂々とそんな事を言ってのけた。
「……何言ってんスかリリス様。あんた、コンビニ店員に温めますかって言われただけで、お願いしますも言えずに首振って、家で温めるコミュ障でしょうが」
「う、うるさいぞ六号。僕がこれから行うのは、キサラギ流の話し合いだ！」
俺の言葉に耳を貸さず、リリスは強気に言ってくる。
その様子を見守りながら、アリスが楽しげにおちょくった。
「おい、いいのかリリス様。今まで散々ビビってたクセに？　魔王軍は武闘派

だぞ」
　そんなアリスの言葉を受けて。
「うるさいぞアリス、僕を誰だと思ってるんだ。君の創造主にして秘密結社キサラギの大幹部、黒のリリスだ。世界を相手に戦ったのに比べれば、辺境の魔王が何だというんだ！」
　根っこのところは小心者のポンコツ上司が逆ギレ気味に言ってのけた。
「……あの、リリス様。これから話し合いに行くんですよね？」
「そうだよ、戦闘員見習いロゼ。これから話し合いに行くのさ」
　どことなく不安気なロゼに、リリスがドヤ顔で言い放つ。
「さあ付いてこい。この星の住人に、そして商売敵に、我々キサラギの力を見せてやる！」
　普段はビビりで小心者なクセに、一度仲間と認めた相手が本気で困れば

助けてくれる。
　口が悪くて腹黒く、本当に良いとこ無しのポンコツ上司だが、そこだけは誰もが認めていた。
「本当にいいんですね、リリス様。魔王っすよ？　多分、天使どころじゃないですよ？　伝説の勇者とかじゃないと無理なヤツっス」
「しかも昨日の遺跡調査の結果では、この星の科学力はウチより上かもしれねえんだろ？　それでもやるのか製作者。やるってんなら付いてくぞ」
「……君達二人は本当に、どうして人がやる気になったところに水を差すんだ。僕が小心者なのは知ってるだろ。六号は変に出会いがあるクセに、一線を越（こ）えられないのはそういうとこだぞ」
「長い付き合いなんですから勿論（もちろん）知ってますよ。やる気になれば凄（すご）いのに、簡単にヘタレるからちっとも人望ないんスよ。アンケートで票が入らないのは、そういうとこですよリリス様」

あれだけこの星の人間を敵視して俺を連れ戻(もど)そうとしていたクセに、根っこのところは、俺と同じく本物の悪になり切れない甘く優(やさ)しい捻(ひね)くれ上司。
俺にそのまま言い返されてグッと黙(だま)り込んだ、隙(すき)が多くて嫌(きら)いになれない小さな上司は。
「ああそうさ、僕は三人の幹部の中で、一番ビビりで小心者だ。しかもミスも多くて間抜(まぬ)けなのも認めよう！　……でもね。誰よりも失敗が多いけど、誰よりも功績が多いのもまた僕だ！」
その日、俺の尊敬する上司で最高幹部、黒のリリスが本気を見せた——

最終章

理想の上司であるために

1

リリスがやる気になった、その翌日。

出来上がったばかりのアジトの前に、招集を掛けられた戦闘員が集まっていた。

集められた者達のほとんどが、これから何が起こるのかも分からず呼ばれていた。

「――さて、諸君。前線を放り出してまでここに集まってもらったのは他でも

ない。キサラギ最高幹部たるこの僕に、今日まで挨拶にも来なかった事は不問にしよう。僕は寛大な上司だからね、別にハブられてたからって傷付かないし、根に持ったりもしないからね」

即席で作られた挨拶用の台に立ち、リリスが皆を前に声を張る。

言葉の端々に十分根に持っているのが感じられるが、誰も口を挟まない。

なぜなら今日のリリスは目がマジだ。

古参の戦闘員ほど、本気になった時のリリスの事だけは信頼している。

「君達はもう既に顔を知っている者も多いだろう。口を利いた事もあるかもしれない。今日は、新しい戦闘員見習いを紹介する。……そう。僕の隣に立っている、キメラ少女のロゼ君だ！」

「初めましての人は初めまして！　キメラで戦闘員見習いのロゼです、今日からよろしくお願いします！」

リリスの隣に立たされたロゼが、緊張(きんちょう)で赤くなりながら声を張る。
パチパチという戦闘員達の拍手(はくしゅ)が響(ひび)く中、リリスが静かに手を上げた。
「さて、諸君。もちろん君達は、戦闘員見習いの歓迎のためだけに呼ばれたのではない。我がキサラギには、実に様々な幹部がいる。戦闘員なんて使い捨てだと言う冷酷(れいこく)な氷女。戦闘員は戦って死ぬのがなんぼ、弱くなけりゃ生き残れると言う、脳筋の炎女(ほのお)。そして、僕はといえば……」
二人の同僚(どうりょう)を落とした後、リリスは一旦(いったん)溜(た)めを置き、
「最高幹部の中で最も戦闘員想いなこの僕は、君達を決して見捨てないし裏切らない。それは、ここにいる皆が周知の事だろう！」
そんなリリスの演説に、あちこちからヒソヒソ声が聞こえてくる。
（俺、アスタロト様の幹部服を届ける際にホットドッグ食いながら運んでたら、うっかりケチャップ付けてリリス様に相談した時、知るかそんなもんと

見捨てられたんだけど）

（あの人に、ベリアル様にイタズラしようぜとそそのかされて、美人上司にちょっかいかけるのも楽しそうだと思って乗ったらイタズラバレて、その時アッサリ裏切られたぞ）

そんなヒソヒソ声が耳に入ったのか、リリスの眉がピクリと動く。

「なんだ、言いたい事があるなら聞いてやろう、顔と名前を覚えておくからな。僕は頭がいいから忘れないぞ。次の人事まで、しっかり覚えておいてやる」

躊躇なく権力を行使し、最低な発言をするクソ上司。

アンケートでちっとも人気振るわないのは本当にそういうとこだぞ。

「まあ、君達との認識の違いの事は今はいい。僕が言いたいのは……。外部の敵に君達戦闘員がやられたら、僕は必ず復讐に向かうという事だ」

今までリリスの言葉には、ニコニコ[illegible]。

今度のリーダーの言葉には、ヒソヒソ声は起こらなかった

黒のリリスの名前が表す部分であり、これだけ性根が腐っているのに何だかんだで慕われているその理由は、部下が理不尽な悔しい目に遭ったなら、必ず敵を討ってくれる事。

ねちっこくてポンコツで黒い部分の多い陰キャ上司だが、そこの部分だけはこの場の誰もが認めていた。

「……さて。ここまでくれば、君達に集まってもらった理由が理解出来た事だろう」

…………………………？

（おい、お前分かったか？）

（いや、だから歓迎会だろ。今からあのキメラちゃんとパーティーすんだよ）

（[illegible]）

（なんだ、じゃあ俺今から、森でモクモク獲ってくるわ）

（陰キャ上司のクセに歓迎会とか気が利(き)くな。アンケート票は入れないけど）

　ちっとも理解していない様子の戦闘員に、リリスの顔が赤くなる。

「どうしてお前達戦闘員は揃(そろ)いも揃ってバカなんだ！　おい六号！　今から何をするのか言ってやれ！」

　やれやれ、これだから下っ端(ぱ)どもは……。

「つまりはこういう事だ。ロゼは食べた物を力に出来るキメラだからな。お前ら全員、悪行ポイントを使って各自珍しい食材を……」

「違う、もういい！　僕の周りはやっぱり皆(みんな)バカばかりだ！　いいかお前ら、ここにいるロゼは大事な思い出の拠点(きょてん)の一つを、魔王(まおう)軍に占領(せんりょう)されているんだよ！」

「ええ!?　あの、違いますリリス様。まだ占領されているかも分かりませんし、地図にあたしがマークを付けた場所に行けば、何か分かるかも、程度なんですが……」

小声でツッコむロゼの言葉を、リリスはあえて聞き流し、

「いいか戦闘員ども、お前達の大好きな美少女だ！　新入りの美少女キメラが思い出の場所を奪われ、悔しい思いをしているぞ！　バカなお前達でも、ここまで言えばさすがに分かるか!?」

「「「「おおおおおおおおおおおおおおお！」」」」

今度はさすがに分かったらしい。

「今から魔王の下へ行く！　戦闘員は武器を取れ！　トラ男は皆をまとめろ！」

やる気満々の戦闘員達に、リリスが声を大にして宣言した。

「魔王の城へ！　殴り込みだ――！」
「話し合いはどうなったんですか、リリス様ー！」
　戦闘員の歓声が響く中、ロゼの声が掻き消された――
「――これより作戦任務を与える。まずは怪人トラ男！　戦闘員を引き連れて、魔王国へちょっかいをかけろ。この際交戦中の隣国、トリスは無視だ。一時的に領地を取られても、後で取り返してやればいい。この戦争を一日で終わらせればそもそも侵攻すらされないだろう」
「つまり俺達は、いつも通りの囮をやればいいのかにゃ」
　真面目な顔で敬礼しながら語尾に「にゃ」を付けるのは止めて欲しい。
「その通り、君達は敵を引きつける役だ。だがいつもの国境での小競り合いじゃなく、今回は魔王国自体へのちょっかいだ。かなり派手な事になるが、任

せていいかい？」

「俺に任せろリリスにゃん。派手なドンパチは久しぶりだから腕が鳴るにゃー」

　言葉の通り実際に指の骨をボキボキ鳴らし、不敵に笑うトラ男。

「頼んだぞトラ男。あと、次にリリスにゃんと呼んだら触手の刑だ」

「もう呼ばないにゃ、リリスにゃん」

　即座に触手の刑に処されたトラ男が、宙に吊り下げられたままにゃんにゃんと謝る中。

「続いて戦闘員六号！　お前はロゼと共に僕と一緒に付いてこい」

「了解っス、リリス様。まぁ、護衛って事ですね」

「頑張ってリリス様をお守りします！」

拳を握りながらのロゼの言葉に、リリスが少しだけ微笑んだ。
　アリスがショットガンを肩に置き、そんなリリスをどこか機嫌良さそうに眺めている。
「そしてアリスは…………」
「もちろん自分も付いてくぞ。ポンコツな創造主を放っておくと危ねえからな」
　リリスが指示を出す前に、アリスが言ってくる。
　リリスはそれに答える事なく、楽しげに笑みを浮かべた。
　……と、その時だった。
「待ってくださいリリス様。今回は魔王城攻めって事ですよね？　なら、俺達も囮じゃなく攻撃任務に就きたいです！」
「そういう事なら俺も行きてぇー」

「そうだ、いつもいつも六号ばかり特別扱いされやがって」
「クソチンピラが、古参兵だからって汚えぞ！　囮任務を代われコラ！」
囮にされた十把一絡げの雑魚戦闘員達がピーピーと喚き出す。
困惑の表情を浮かべたリリスは、小さく首を傾げながら……。
「そ、そうかい？　いや、君達がそう言うのなら、六号の代わりになってくれても……」
「おっと何言ってるんですかリリス様。このクソ雑魚どもに、リリス様と長年一緒にいた俺の代わりが務まるワケないでしょう。こんなむさ苦しい連中は囮ぐらいしか役に立たないんです。一度決めたことを撤回するなんて、上に立つ者としてはいただけませんよ」
リリスが言い終わるより早く、俺はすかさず口を挟んだ。
それを聞いた雑魚どもが、俺に向かって口々に罵声を浴びせる。

「ああ、分かった分かった、六号も他の戦闘員も落ち着きなさい！　君達の気持ちは理解した。そんなに僕と一緒に行きたいと言うのなら、誰が来てくれても構わないよ。ああ、でも戦闘員十号だけはダメだからね。航空機の操縦が出来る君には、僕を運ぶ仕事があるからね」

自分を慕ってくれる部下達に、ニヤけた顔を隠しきれないままリリスが言った。

「……航空機。ちょっと待ってくださいリリス様、戦闘員十号に航空機なんて操縦させて、一体どんな作戦やらかす気ですか？」

なんとなく不安を覚えた俺は念のために聞いてみる。

それは他の戦闘員達も同じ思いだったのか、リリスの言葉を聞くため静まり返った。

こそうだね……それでは作戦概要を発表する。トラ男が率いる戦闘員達は、魔王国を相手に喧嘩を売る事。出来るだけ派手にやれ。武器に使用する悪行ポイントは気にするな。使いたい武器を申請すれば全部僕が出してやる。そう、今日は奢りだ、好きにやれ！」

いつになく剛気なリリスの言葉にその場の皆が歓声を上げた。

ていうか、リリスの奢りで最新武器も使い放題かよ、俺もそっちに行きたくなってきた……。

「君達が囮になっている隙に、戦闘員十号が操る航空機により、僕を含む四名を敵地のど真ん中に投下する。敵は近代兵器を持たないとはいえ、魔導技術とやらがある。となると対空砲火も予想される。戦闘員十号は、我々を投下した後は直ちに退避。そのまま魔王国とグレイス王国の国境線に戻り、トラ男達を上空から支援せよ」

い　号達を上空から投せる」
……その作戦を聞いた全員がシンと静まり返る中、戦闘員十号だけがコクリと頷く。
敵の本拠地のど真ん中へ上空から放り込む。
天才と呼ばれたはずのリリスの頭の悪い作戦に、さっきまで俺を罵倒していた戦闘員達が皆揃ってソッポを向いた。
「……さて、期待してますよリリス様。俺は他任務に行ってきますから、無事に帰ってきてくださいね」
「待てよ六号、ここは戦闘員の中で最も高い生存力を持つ、お前が行くべきだろう」
「そうだな。リリス様と一番付き合いが長いのは六号だ、魔王殺しなんて大手柄はこの星に先陣を切ったお前のもんだ」

手柄はこの星に失敗させたお前のミスだ」
「へっ、俺達の冗談（じょうだん）真に受けやがって。これまで必死に頑張ってきた、お前の手柄を取るわけねーだろ?」
　アッサリと手の平を返した十把一絡げの戦闘員達。
「てめーらふざけやがって、囮任務と代われコラッ!　むしろ、なんで俺がいつも一番危険な目にばっか遭うんだよ、おかしいだろ!　この星に送られてきたのだって、空間座標が一番不安定な時だったんだぞ!」
　俺が必死に食って掛（か）かるも誰（だれ）一人として相手をしない。
「ど、どうしたんだ君達!　別に六号じゃなくても、志願して僕に付いてきてくれてもいいんだよ!」

「それではリリス様、ご武運を祈(いの)りますにゃん」
　俺達は、地上部隊として先行するトラ男がリリスに敬礼し、出撃するのを見送った。
　トラ男を始めとした戦闘員が魔王国と戦争を始めるまでにはまだ時間が掛かる。
　地上ではどれだけ車を飛ばしても航空機で向かう俺達に勝てるはずもなく、囮が敵主力部隊をおびき寄せるまで、この場で待機する事になった。
　結局残されたのは、俺とリリスにアリスとロゼ、そしてパイロットの戦闘員十号だ。
　まだだいぶ時間があるとはいえ、元々はリリスが一晩で考えた突貫(とっかん)作戦、綿密な打ち合わせをしておくのに越(こ)したことはないはずだ。
「……さて、作戦については先ほど説明した通りだ。我々はトラ男という尊い犠牲(ぎせい)の名の下に、

い犠牲の名の下に、万歳三唱して空を見上げて高笑いする魔王の喉へ食らい付く。まあ、これだけ聞くと無謀極まりない作戦ではあるが、そこはこの僕がいるから問題ない」
　あんたが主導の作戦だからこそ不安なんだぞと、喉まで出掛かるが我慢する。
「戦闘員十号による精密投下が出来れば一番だ。どうせ魔王なんて城の天辺にいるものさ。対空砲火が少なければ、十号にギリギリまで接近してもらい、最上階の窓目掛けて僕達をパージさせる。後は窓をぶち破って魔王を殺し、一件落着！」
「落着したらダメですよリリス様！　あたし、魔王さんと話がしたいんです！」
　リリスはロゼにツッコまれ、本来の目的を思い出す。

「そ、そして二つ目！」
　今のは無かった事にしたいらしい。
「対空砲火が厳しく、城に近付けないようなら、ダミーとして幾つものパラシュートを連続投下。そして、僕達本命は城の裏へと最後に投下してもらう。魔王城がある敵の首都に、空からあちこち何かが降ってくるわけだ。当然街にいる敵戦闘員は落下地点へ散らばっていく。これにより戦力を分散させたところで……。裏から魔王城に押し入って、力業で最上階へ！　後は魔王を見付け次第、始末すればこれにて落着！」
「だから落着しちゃダメですよリリス様！　お話をしに行くって言ったじゃないですか、というか……」
　ロゼが小さく首を傾げ、

「というか、魔王さんのお城は見付けたみたいですが、どうやって中に入るんですか？　まずダスターの塔で手に入る秘宝を使って、城を覆う霧を晴らさないと……」

　……コイツはいきなり何言い出すんだ。

　なんでいきなりRPGゲームの話が出てくるんだ？

　リリスも同じ思いだったらしく、頭に疑問符を浮かべる中、

「城の霧が晴れたなら、魔王城の東西南北に位置する四つの塔に、魔王軍四天王を倒した時に得られる魔導石を収めていきます。そして正しく四つの石を捧げれば……」

「城の結界が解けて、魔王への道が開かれるとかどうせそんなんだろ、知ってるよ」

　俺の言葉にロゼが目を見開いた。

「知ってたんですか隊長!?　これ、結構な機密らしいんですけど……」
秘宝を使って霧を晴らすだの、四天王を倒して得られたアイテムで結界解くだの、RPGあるあるの王道じゃないか。
と、アリスが口を開く。
「おい六号。そもそもこの国の伝承では、導かれた勇者様がやがて魔王を倒す話だっただろ。お前はアホだから覚えてないだろうが、昔、そのダスターの塔って所を勇者様のために落としただろ?」
「だが、塔の秘宝を手に入れたものの、敵の四天王の一人風の何とかが、勇者を道連れにランダムテレポートで消えたとか……」
……そんな事あったっけ?
そういえば、確かにそんな事もあったな……。

「……えーと、それじゃあどうするの？　僕が突然何らかの不思議な力に目覚め勇者として覚醒するとか、そんな超展開はありえないかな」

　リリスがちょっと慌てながら、俺が勇者の話を聞いた時と似たような事を言い始めた。

「まあ、伝承の事はもう忘れろ。なにせ勇者とやらはもういねえし、風の何とかって四天王も消えちまった。ならどのみち王道で行くのは無理ってこった。……そもそも六号、お前今までに幹部を三人倒したけれど、魔導石とやらは回収したか？」

　アリスに言われてみれば、確かにそんなドロップアイテムを拾った覚えがない。

　……いや、ちょっと待て。

「最初に炎のハイネを撃退した時、そんな感じの石を手に入れたじゃん。ほら、ハイネが涙目になって何でもするから返してって頼んでたヤツ。あれ

ら、ハイネが涙目になって何でもするから返してくれって頼んだヤツ、そんなに返して欲しければ、エロいポーズで写真撮(と)ったら考えてやるって言ったの」

「君、そんな事までやってたの？　さすがの僕でも引くんだけど」

そうだ、確かに魔導石なんて物があったはず。

「珍(めずら)しくちゃんと覚えてるじゃねえか。ちなみにその後、お前は魔導石をハイネに返さず地雷(じらい)使って爆破(ばくは)したんだぞ。しかもハイネの目の前で」

……そっちはあんまり覚えてないな。

と、リリスとロゼから向けられる引き気味な視線を浴びていると。

「そもそも、ガダルカンドとやらは魔導石なんて持ってなかったし、水のラッセルはこの国の水不足を解決するためリアルタイムに石を使ってる。もしそれら三つがどうにかなっても、風の何とやらが足りない以上詰(つ)みじゃねえか。やっぱ王道で行くのは不可能だ」

アリスにキッパリ言われてみれば残された方法は一つしかない。
と、それまで聞いていたリリスが不敵に嗤う。

「……ほらね？　やっぱり僕達は悪の組織なんだから、王道なんて無理なんだよ。そして僕達に正攻法なんて必要無い」
開き直ったリリスが宣言する。

「そうさ、キサラギはいつだって常識なんてものは壊してきたんだ。今回も邪道で魔王を仕留めるぞ！」

「だから仕留めちゃダメですよリリス様――！」

「――そろそろ時間だ。お前達、攻め込む準備は出来てるか？」
トラ男達が攻め込んで、半日以上が経った頃。
それまでじっと腕を組み、目を閉じたまま話を聞いていた戦闘員十号は

そう言うと、乗れとばかりに航空機をビッと指差した。
「……う、うん。準備はもう出来てるけど……。ねえ戦闘員十号。君って六号と同じ平のクセに、やけに強烈な個性があるよね？」
「そんな事はない。俺はそこら辺に転がっている、ただの戦闘員さ」
と、俺以外の戦闘員との付き合いが無く、十号の事をあまり知らないのか、リリスが興味を示している。
するとリリスが何かを思い出したように、「あっ！」と小さな声を上げた。
「そうだよ、戦闘員十号だ！　君がやらかしてくれたせいでこの国の王女に文句言われたんだぞ！」
食って掛かるリリスに向けて、十号はニヒルな笑みを浮かべると。
「おっと、心当たりが多過ぎてどれの事だか分からないが、俺は悪の組織の戦闘員。やらかしは日常茶飯事さ……」

「違わい！　そうじゃない、僕だって普通の悪事ならむしろ推奨するさ！　でも、君の場合は違うじゃん！　お姫様（ひめさま）の部屋でうんこしようとしたらしいじゃん！　どうしてそんな事をしようとするんだ！」

……おっと、ロゼが十号に向ける目が、これまでに見た事がないような、理解を超（こ）えた存在を見るものになっている。

「また随分（ずいぶん）な言い草だな、リリス様。数多（あまた）の戦場をくぐり抜（ぬ）け色んな無茶（むちゃ）をどうにかしてきた俺も、さすがに飯も食えばうんこもするさ。それとも何かい、俺に排便（はいべん）するなと言うのか？　クソを我慢するかドラゴンを狩（か）るか、どちらかを選べと言われれば……。迷う事なくドラゴンへと立ち向かう。悪いが俺は、そういう男さ」

「トイレでしろって言ってるんだ」

――もう少しリリスと十号の頭の悪い会話を聞いていたいが、そろそろ時

――もう少しエースと十号の頭の悪い会話を聞いていたいが、そろそろ時間だ。

リリスがポイントを使って取り寄せた航空機、もとい大型の空挺輸送機へアリスが真っ先に乗り込んだ。

「おいお前ら、早く乗れ。十号はいつもの事だがリリス様まで何をうんこうんこ言ってやがる。空の王のうんこに変な執着見せてたし、さすがの自分もドン引きだぞ」

「僕が悪かったよ、もうこの話は止めようか。でも戦闘員十号には一つだけ言わせてほしい。これからはトイレ行け」

まだ言い足りない様子のリリスが輸送機に乗り込むと、全員が搭乗したのを確認し十号が輸送機を飛び立たせた――

「飛んでますよ隊長！　ほらほら、あんなところでスポポッチがモケモケと戦ってます！　帰りに寄って、負けた方を捕らえて煮ましょう！」

初めての飛行体験が新鮮なのか、ロゼが窓から地上を見下ろし騒いでいた。

「どうだ六号、こういうのが文明の利器に触れた現地人の反応というやつさ。これだよこれ、僕が見たかったのはこれなんだよ」

さすリリされたかったリリスは、今さらながらにご満悦のようだ。

「……おい、ちょっといいか？　アレが話に聞いてた空の王じゃないのか？」

と、窓から周囲を見ていたアリスが言った。

俺達は言われるままにアリスが指す方向を見てみると、

「本当だ、アレは空の王ですね。あれだけ大きいと、食いでがありそう……」
「いや、守護獣らしいし食うんじゃないぞ」
不穏な事を口走るロゼに、一応ツッコんではみるものの……。
相当に遠く離れているからよく分からないが、地上では何者かが空の王に追い掛けられているようだった。
大方、空の王の巣穴でも襲撃したのだろう。
遠くてよく分からないが、追われている人影になんとなく見覚えがあるような気も……。
「おう、どうした六号。そんな遠くをジッと見て」
「いや、空の王に人か何かが追われてるみたいなんだが……。これって助けた方がいいのかな？」

これが作戦行動中でなければ、礼金もらいがてら手助けしに行ってもいいのだが。

「……何か大事な物を盗んだか光り物を持っていない限りは、空の王が追ってくる事はありませんよ？　物を盗んだにしてもちゃんと返せば許してくれます。光り物にしても、懐に入れてジッと大事に持っていれば無理に盗っていく事もありませんしね。そんな空の王に追われているというのなら、追われてる方が悪いですよ」

案外手厳しいロゼの言葉に、なんだか見覚えがある気がする誰かには自分で何とかしてもらう事にした。

……と、そんな事より。

「なあ十号。実は俺、さっきから気になってるんだけどさ。お前それ、輸送機の操縦するのにゲームのコントローラー使ってねえ？」

「ああ、俺はこのタイプのヤツが一番使い慣れているからな。ゲームコントロ

ーラーは自分のポイントを使って取り寄せた。コイツさえあれば俺の腕は世界でもトップクラスだ」

世界トップクラスとはまた凄い自信だ。

「そいつは頼もしいな、期待してるぜ十号」

そんな俺達のやり取りに、アリスが興味を示したらしい。

「降下作戦に参加するんじゃなければ自分が操縦するんだがな。しかし、お前さんは一体どこでこんな技術を覚えたんだ？　キサラギでは過去を詮索するのは推奨されてねえが、さすがに気になる」

「フッ、その辺はお互い無事に生き残ってから話してやろう。……まあしいて言うなら、俺の家は特殊な家庭事情があってな。それで、航空機の操縦も独学で覚えたもんさ」

……？

特殊な家庭事情で、それでなんで独学に？

……えっ、独学？

「そろそろ目的地に近付いてきたな。ここからが俺の腕の見せ所だ。ヘッ、腕が鳴るぜ！」

やけに自信がありそうなその言葉に、なぜか頼もしいと思うより先に不安になる。

「よし、皆準備はいいかい？　頼むぞ十号。昨夜、僕が戦闘員達を集めた際に、戦闘機の操縦が可能なヤツはいるかとダメ元で聞いた時、君が見せてくれたあの自信を今こそ示してもらおうか。……それでは各員、降下準備！」

魔王城らしき物がそろそろ見えてきた頃、俺達の間にも徐々に緊張が走り出す。

……誰もが無口になる中で、俺はどうしても聞いておきたい事が出来

た。

「……なあ十号。俺、やっぱそのコントローラーがすごく気になるんだけどさ。独学で勉強したって…………、まさか、レースコンバットで覚えたとか言い出さないよな？」

もちろんこれは冗談だ。

この話を切っ掛けに、どこで学んだのかを教えて欲しいから聞いたのだ。

戦闘員というものは基本的にアホしかいない。

そんな戦闘員の一人のクセに、航空免許を持っているという事に違和感を覚えたのだ。

だがそれを聞いた十号は鼻で笑い飛ばしてみせた。

その十号の様子を見て、俺はむしろホッとする。

「そうだよな、俺が悪かった。変な事を尋ねちまったな」

俺が素直に謝ると、十号は苦笑を浮かべて肩を竦めた。
「ああ、まったくだ。俺を誰だと思ってるんだ？　無印のレースコンバットだなんて舐められたもんだ……。俺がよくやってたのはレースコンバットファイナルだ。あれはオンライン対戦も出来て難易度がメチャクチャ高くてな。当時、妹の貯金箱から金をパクっては課金して、なんと世界十位以内にランキング入りしたんだぜ」
「総員急いでパラシュートを！　アリス、今から操縦は出来そうかい⁉」
「コネクトぶっ挿してみてもいいが、それじゃあ降下作戦自体に支障が出る。この輸送機は諦めてとっとと降下した方が安全だ」
「皆さん急にどうしたんですか？　一体何があったんです？」
蜂の巣を突いたような騒ぎの中、一人ロゼだけが落ち着いていた。
「言ったじゃん！　俺、戦闘員は皆アホだって言ったじゃん！　そうだよ、そんな免許持ってるなら戦闘員なんてやってねーよ！　よく考えたら分かる

だろ畜生が！」
「落ち着け六号、ここは俺に任せとけ。手に馴染んだこのコントローラーさえあれば俺は無敵だ。しかも課金用のＪチューンカードをたっぷり用意してあるから問題ない」
十号の言葉を聞いて、俺は無理やりドアを引き開けた。
一切の躊躇もなくリリスが叫ぶ。
「降下開始――！」

――だだっ広い荒野の中に、所々小さな砂漠が交じる魔王領。
そんな荒野のど真ん中に降下した俺達は……。
「し、死ぬかと思った……！　十号には、生きて帰ったら文句言ってやる！」
というかそもそも、なんでアイツはゲームコントローラーでちゃんと離陸

が出来たんだ。
「で、全員無事かい？　怪我はない？」
「あたしは大丈夫です！　ていうか、空から降りる時楽しかったです！」
「自分は勿論問題ない。もし問題があれば今頃は、動力炉の暴走で辺り一面が消し飛んでるからな」
　リリスが皆の無事を確認するも特に支障はなさそうだ。
　それよりも問題は、まだ魔王の城まで距離がある事だ。
　どこに降下したのか正確な位置は分からないが、ここが魔王領の奥深くという事だけは分かる。
　なら向かう先は、肉眼でボンヤリとだが目視出来る魔王城か、もう作戦失敗とみなしてこのまま撤退するかだが……。

降下した俺達の耳には、既にトラ男が仕掛けているのか、遠く離れたところから現代兵器によると思われる爆発音が響いていた。
「アリス、僕達の現在位置を確認後、最寄りの高台へ移動しよう」
　こんなトラブルにもめげる事なくリリスが素早く指示を出す。
「現在地は魔王城の北北西、およそ十五キロってところか。リリス様の衛星にリンクしてみたがこの辺に高台は見当たらねえな。その代わりこっちに向かってる敵を発見した」
「ああクソ、もう敵が向かってきてるのか！　何重にも張り巡らせた僕の完璧な作戦計画が、一体どうしてこうなった！」
「リリス様がアイツの免許の確認を怠ったからだと思うっス」
　俺が的確にツッコむもリリスに石を投げられる。
「いつもいつも、なぜ僕はこんな目に……！　だってここは普通に考えれば、
頭脳派の僕の作戦が上手く[illegible]

頭脳派の僕の作戦が上手くいきカッコイイところを見せた後、惜しい演出として六号を連れ帰る命令は無しにして、僕が立ち去った後は最高の上司としてさすリリされる流れだろうが！」

それは、日頃の行いと深く考えない頭のせいだと思いたい。

…………んっ？

「おいリリス様、お前今なんつった。六号を連れ帰るのは無しにして、引き続き自分の相棒として置いていくって言ったのか？」

「そうだよ、そう言ったんだ！　だって仕方ないじゃないか！　強欲騎士（ごうよくきし）や電波女だけなら遠慮（えんりょ）無く連れ戻す気だったけど、実は女装キメラじゃなくパトラッシュで、しかもこんなに重い過去を持つ子が懐（なつ）いていたら、さすがの僕でも考え直すさ！」

それを聞いたアリスが動きを止めた。

「……なんつーか、たまに思うんスけどキサラギ幹部ってツンデレが多いです

よね」
「うるさいぞ六号、少なくとも僕はツンデレじゃない、素直で優しいリリス様だ」
　俺達のそんなやり取りに、ロゼが嬉しげにはにかむと、
「あたしバカだからよく分かりませんけど、あたしが隊長に懐いたから、隊長とアリスさんがずっと一緒に居られるって事ですか？」
「居られるって事だよ。ああ、あくまで僕だけの意見だからね！　やったねキメラちゃん、アジトに帰ったらアリスと六号に思い切りたかると良いさ！」
　ちょっとだけ顔を赤くして、半ば投げやり気味にリリスが叫ぶ。
　……このツンデレ上司はどうしてやろう、アリスと一緒にさすリリでもしてくれようか。

――と、そんな事を企む俺の前で一体何を考えているのか、アリスがボーッと空を見上げた、その時だった。

『あー、聞こえますかリリス様。こちらトラ男率いる囮部隊。オーバーにゃん』

リリスの持つ端末に、トラ男からの無線が入る。

『魔王軍主力部隊と交戦しそれなりの戦果を挙げていたが、交戦地帯に突然《砂の王》が出現。現行兵器では分が悪く、現在アジトに撤退中だ。なお、魔王軍も砂の王出現に併せて退却したため、魔王城を攻めれば敵主力と鉢合わせする恐れがある。作戦は失敗、撤退する事を提言する。……にゃん。オーバー』

……………。
せっかくの空気が無粋な報告でぶち壊された。
空を見上げていたアリスが、やれやれと肩を竦めて首を振る。
「……そう上手くはいかねえか。リリス様が任務に失敗して帰還したら、今度こそアスタロト様かベリアル様が出張るだろうな。……まあ、自分を創った創造主の良いとこが見られただけでも収穫だ。あちこちからここに向かっている敵部隊の一つが、おそらくは魔王軍の主力だろう。リリス様、もう一機航空機を転送してくれ。ここはとっとと引き揚げだ」
……まあアリスの言う通り、リリスの良いところとお人好しなところも見られた事だ、今回はコレで良しとするか。
「ロゼ、聞いたな。ちょっと危険も伴うけど今回は撤退するぞ。次はもっと入念に準備して、万全な態勢で乗り込むぞ。ちょっと時間は掛かるけど、お前

の目的はちゃんと叶えてやるからな」
「は、はいっ！　ていうか、今回が急過ぎでしたからね！　遺跡の探索だけでもたくさん情報が得られましたし、あたし的には十分満足です！」
　俺の言葉に笑みを浮かべ、ロゼがそう言って、
『こちらリリス、作戦はこのまま続行する。トラ男達はそのままアジトへの撤退を許可する。砂の王出現は計算外だ。……ああいや、よく考えれば現在までに集まった情報があれば、簡単に予測出来たな、すまなかった。よくやってくれた、引き揚げてくれ。オーバー』
　全ての流れをぶった切って、リリスが無線で呼び掛けていた——

「ああ、分かってる。分かっているとも、僕はいつもミスが多いからね。おかげで皆からポンコツ上司呼ばわりさ。一番その名で呼んでくれたのは、戦闘員六号、君だがね！」

遮蔽物がロクに無い荒野のど真ん中。

こんな所に陣を構えれば、当然向こうからも丸見えだろう。

それでなくとも俺達が降下した姿は魔王領全域から見れただろうし、現にアリスの言葉では続々と魔族が集結中だ。

つまり……。

——現在俺達の前に佇む、数千を超える魔王軍主力部隊だけでなく、こ

れからもドンドン敵が増えるという事だ。

「本気ですかリリス様。相手は魔王軍の主力、言ってみればほぼ全戦力っスよ。先頭にいる褐色おっぱいは見えますか？　あれ、魔王軍四天王の一人、炎のハイネって言うんです」

　そう、俺達の姿を前に、警戒するように動かない魔王軍の先頭には、腕を組んだハイネが立っていた。

「報告書にあった商売敵の幹部だね。褐色おっぱいが何だって言うんだ。単にデカけりゃいいってものじゃない、僕はかなりの美乳だぞ」

　どうでもいい情報を寄越してくる貧乳上司は、先ほどから脇目も振らずアリスと共に戦闘準備を行っていた。

「……あの、リリス様、それって一体何をしてるんですか？　あと、本当に戦うつもりなんですか？」
　ロゼが疑問に思うのも無理はない。
「これはね、いざという時には僕が全力を出せるよう、準備をしているとこなのさ」
　準備といっても大した事をしているわけではない。
　転送装置を使って大量に送られてきたありとあらゆる重火器を、リリスを取り囲むように配置しているだけだ。
「それと二つ目の、本当に戦うのかという質問には……。僕の頭の良いところを見せてあげようとだけ言っておこうか」
　周囲を榴弾砲（りゅうだんほう）に囲まれながら上機嫌（じょうきげん）にリリスが言った。
　どうしたのだろう、戦いを前に高揚（こうよう）しているのだろうか。
　この陰キャは元来、こういう真っ正面からの戦いはあまり好まないタイプ

なのだが。
「おい六号。ちょっとコイツを設置するからリリス様の横に運んでくれ」
アリスがそう言って指差したのは、先ほど送られてきたばかりの何かの機械。
「……？　アリスさん、これ一体何ですか？」
「そいつは、自分じゃなくても衛星とリンクが可能になる中継端末だ。コレから延びたコードの先を、リリス様の穴にぶっ挿すんだ」
「言い方！　ちょっとアリス、その言い方は色々とNGだからね！　ロゼ、変な捉え方をしてはいけないよ。僕の体には改造手術で、このコードの先っぽのジャック部分を挿せる端末が埋め込まれているだけだからね。大事な事だから覚えておくんだ、僕は人より穴が多いだけだから。これはエッチな意味じゃないからね」

勝手にドンドン自爆（じばく）していくリリスをよそに、次々と戦闘準備が整えられていく。

リリスは数多（あまた）の火砲（かほう）から延びたコードを手に取っては、白衣の下でゴソゴソしていた。

……白衣の下は今どうなっているのか、凄く気になる。

「リリス様、俺もコード挿す作業手伝いましょうか」

「ノーサンキューだ。君に手伝わせたら絶対に大惨事（だいさんじ）になる。具体的にはエロい事に」

次々に出現する見慣れない火器を前に、ハイネを始めとした魔王軍の連中がいよいよ警戒を強めていく中、

「なあアリス、これって止めなくていいのか？　大変な事になる気がする」

「アレだな、リリス様もずっとお前と会えない事で色々ストレス溜まってたんだろ。言ってみればストレス解消も兼ねた、採算度外視の大盤振る舞いだ。相手はどうせ商売敵だ、ここは盛大に暴れてもらおう」

さすがは血も涙もないアンドロイド、考え方が実にドライだ。

「……ただ、リリス様が溜め込んだ悪行ポイントは本来地球での決戦用だ。この星でこれだけの火器が一斉に火を噴けば、弾薬補充だけであっという間にマイナスポイントになっちまうぞ」

確かにリリスはキサラギの最高幹部なだけはあり、保有している悪行ポイントは計り知れない。

今までに作ったえげつない兵器の数々で稼いだポイントだけでも、キサラギ内で一、二を争うのがリリスだろう。

しかし……。

こそれこそ、ヒーローや巨大ロボを相手に使うための大事なポイントなんだろ？　どう考えても採算合わねえじゃん」
「そうだな、地球から兵器や弾丸を送ってもらう場合、メチャクチャ割高なポイントにされるからな。……多分、ここでポイントを使い果たしてマイナスになっても、それはそれで悪くないと思ってるんだろ」
……ポイントがマイナスのまま地球に帰れば、制裁を食らうんだぞ？
頭に疑問符を浮かべる俺に、なぜかちょっとだけ嬉しそうなアリスが肩を竦めてみせた。

――火砲から延びるコードを軒並みリリスに挿し終えた頃。
それまで俺達を警戒し、遠巻きに見ていた魔王軍が動き出した。
正確にはそれらを率いていたハイネがこちらへと歩いてくる。
らが、俺達との距離が近づくと、ハイネが初めて口を開

やがて俺達との距離が二十メートルを切った辺りで、ハイネがこちらに呼び掛(か)けてきた——

「おい、戦闘員六号。お前こんな所で何やってるんだ。また何かを企(たくら)んでるのか？」

ハイネは既(すで)に事情を知っているのか、ニヤリと楽しげに笑みを浮かべ。

「それとも、お前のところの囮(おとり)がアタシ達を引きつけてる間に、魔王様の命でも狙(ねら)いに来たのか？」

……これはバレてるな。

だってそれ以外に、トラ男が攻(せ)め込んだタイミングに合わせ、俺達がこんな所にいる理由が無いもんな。

「アタシは一応お前の事を認めてる。……だからこそ、争うっていうのなら全

軍で相手をさせてもらう。卑怯だなんてお前が言うなよ？　そうでもしなけりゃ小狡いお前には勝てないからな」

……コイツ、なんでわざわざそんな事を警告するんだ。

「……だが、もしお前が投降して水のラッセルと身柄を交換するって言うなら、交渉に応じる用意はあるぞ？」

ああなるほど、コイツはまだラッセルを取り返す事を諦めてなかったのか。

でも残念な事にアイツはもう手遅れだ。

女装に抵抗を感じなくなった手遅れ感も勿論あるが、戦闘員達の食事を作ったり洗濯したり、世話をして頼られる事に喜びを覚えてしまっている。

と、その時。

「六号、アレが魔王軍幹部の一人かい？」
戦闘準備を終えたのか、リリスが声を掛けてきた。
「そうです。アイツが魔王軍四天王、炎のハイネです」
　それを聞いたリリスは拡声器を転送させると、ハイネに向けて呼び掛けた――
「《テストテスト。おいそこのおっぱい女、僕の声が届いているか？》」
　突然の大声と日本語に相手が首を傾げる中、リリスがこちらの現地語で呼び掛けた。
「そこの魔王軍幹部に告ぐ。我々への投降をお勧めする。これは警告である。我々との戦端が開かれる時、黒のリリスの名において、この地は地獄と化すだろう」

……と、それを聞いてキョトンとした表情を浮かべるハイネを除き、その後に控える魔王軍の面々が爆笑した。
ゲラゲラと声を上げる魔王軍の中、しかしただ一人笑わなかったハイネがスッと片手を上げると、笑い声がピタリと止んだ。
「お前達が言うんだ、タダの脅しって事はなさそうだね。おい六号、ソイツは何だ？」
警戒を崩さぬままこちらに呼び掛けてくるハイネに対し。
「この人は俺の上司で、ウチの組織の最高幹部、リリス様だよ」
「お、お前のところの最高幹部……」
俺達を認めているとの言葉の通り、それを聞いたハイネは緊張で汗を垂らした。
「そこのアリスの例もあるし、子供相手でも舐めたりしない。というか、この大軍を前にしてそれだけ落ち着き払ってるんだ、多分嘘を言ってるフシがや

大軍を前にしてそれだけ落ち着き払ってるんだ、多分嘘を言ってる訳じゃないんだろうね」

警戒色を強めたハイネは改めてこちらの出方を覗（うかが）っていた。

それを見たリリスが、予想通りとでも言いたげに小さな笑みを浮かべてみせる。

「……で、どうなんだ炎のハイネ。我々に降伏（こうふく）するのかい？　僕としても本気を出すと、割と懐（ふところ）が痛いんだ。ここは話し合いで解決してくれると助かるんだがね」

実際にはどちらでもいいと言わんばかりのあまりやる気のなさそうなリリスの態度に、ハイネが更（さら）に警戒を深めた。

得体の知れない武器とコード塗（まみ）れのリリスの姿にハイネが迷っているのがよく分かる。

「……たったそれだけの人数を相手に引き下がったら魔王軍の名折れさ。そっちこそ投降する気はないか？　ラッセルを返してくれれば、その後はちゃんとお前等も解放する。……そっちは女のガキばかりじゃないか。魔族は血の気が多いんだ、戦闘になったらもうコイツらを止める事は出来なくなるぞ？」

……なるほど、次は脅してきたか。

まあしかし、それが戦争ってもんだろう。

俺達だって悪の組織だ、凄惨な現場はいくらでも見てきている。

だから、俺は言ってやった。

「──おいアリス、今の聞いたか？　ハイネの野郎、リリス様に降伏しろだなんて抜かしやがったぞ。俺達キサラギも随分舐められたもんだよなあ？」

荒野（こうや）に響（ひび）く俺の言葉に、ハイネはおろか、なぜかリリスまでもがギョッとする。

「おう、自分や六号程度に苦戦していたクセによほどの命知らずらしいな。リリス様が本気を出せばこの場にいる全員が五秒で蒸発するぞ。もうハイネと会う事もねぇのか。商売敵とはいえ、寂（さび）しいもんだなあ……」

更に続けられたアリスの言葉に、ハイネがさあっと顔を青くした。

……というか、リリスまで顔が青く見えるのは気のせいか？

「い、いやっ!?　ああ、アタシは別に、その人を舐めてるわけじゃあ……！」

「ろろ、六号、アリス、今は僕が交渉しているからね、ちょっとだけ待っててね！」

ここまでくれば腹は括った。
こうなったらトコトンまで付き合ってやろう。
「リリス様、背中は俺達に任せてください。リリス様に比べればひよっこな俺達ですが、邪魔にならない程度に背後を守るぐらいは出来ますから」
「バックアップも任せとけ。万が一に大怪我しても、最高の治療をしてやるからな」
慌てるハイネとリリスをよそに、俺とアリスが武器を構える。
この大軍を前にして、Rバッソー一本でどこまでやれるか分からない。
だが……。
「リリス様ならこの程度の大軍を相手にしたってビクともしねえ！　俺達が負けたとしても、お前らは全員生きて帰れないと思えよ、コラァ！」

「おう、お前ら全員終わったぞ。なんせ相手は黒のリリスだ、世界一高額な賞金を懸(か)けられてるのは伊達(だて)じゃねえからな」
　そんな俺とアリスの啖呵(たんか)を前に、魔王軍の兵士達が憤(いきどお)る。
　と、気勢を上げた俺達にハイネが体を震(ふる)わせながら。
「ややややや、やるってのか!?　やや、やるんだな、この大軍を相手に！　いいんだな!?　本気なんだな!?　部下の手前、アタシも舐められるわけにはいかないからね！　まあ、六号のせいでえらい姿で城に送られて、もう恥(はじ)は晒(さら)してるから今さらだけど！」
「ややややや、やろうじゃないか！　僕としても部下の前で弱いところは見せられないからね！　まあ僕も、六号のせいで上司としての威厳(いげん)は散々なんだけどさ！」
　二人は互(たが)いに目配せすると、どこかホッとしたように息を吐(は)き——

「ま、まあそうは言っても、あんたのところのトラ男ってのとやり合った後で被害も大きいからな、今日のところは痛み分けって事で引いてやってもいいかもな!?」
「そ、そうだね、トラ男が弱らせたところを僕が襲うのも、彼の手柄を奪うみたいで申し訳ないからね！　それにウチの組織にも多少は被害が出ただろうし、今日はこのぐらいで勘弁してあげても……」
　俺は油断なくRバッソーを構えながら、リリスを援護すべくハイネの後ろの魔王軍に向かって罵声を飛ばす。
「おうおう、キサラギを舐めんじゃねえぞ！　お前ら雑魚どもは全員まとめて八つ裂きだ！　アリスとロゼも言ってやれ！」
「こいつら、殺すまでもねえ。全員捕らえて実験サンプルにしてやるよ！」
「せ、戦闘キメラですから、戦いは望むところです！　美味しそうな方がた

くさんいますし、あたし、本気でいきますから！」

俺は青い顔をした二人の幹部からギョッとした顔を向けられながら叫びを上げる。

「俺達は悪の組織、秘密結社キサラギだ！　魔王軍がなんぼのもんじゃい！　みんなまとめて掛かってこいや――！」

可愛い部下の援護を受けて、リリスも同じく叫びを上げた。

「煽っちゃダメ――！」

覚悟を決めた表情のハイネに続き、魔王軍兵士達が一斉にこちらへ駆ける中。
「バカ！　六号のバカ！　報告書では、あのハイネって幹部は君達にトラウマ持ってるみたいだから、交渉で何とかなると思ったのに！」
「今さら何言ってんスか、ここまで戦闘準備しておいて交渉だなんて思いませんよ」

そう、火砲に囲まれた今のリリスの姿は俗に言う本気モードだ。
「これは僕の覚悟と本気モードを見せて脅したんだよ！　地球じゃこの姿を見せただけで大概の軍が降伏したんだ！　この兵器群もただの見せかけだ！　悪行ポイントを温存するために、穏便に済まそうと思ったんだよ！」
なるほど、そういう事か。

でも……。
「リリス様、ここは地球じゃないんでアイツら本気モードとか知らないっス」
「ち、ちくしょー！」
魔王軍との距離（きょり）は遠いようでいて遠くない。
荒野に広がる大軍が、俺達の下（もと）に殺到（さっとう）するまでは三分と掛（か）からず着くだろう。
そんな迫（せま）り来る敵にショットガンを撃（う）ち込みながら、アリスがリリスへ発破を掛ける。
「おう、シャッキリしやがれ創造主！　自分の製作者なんだからいいとこ見せろ！」
「アリス、君には後で話があるぞ！　アホな六号はともかく、君は分かっていて煽ったろ！　そんなに僕をこの星に引き留めたいのか、甘えんぼなアンド

ロイドめ！」
　そんな事を言ってる間に、ハイネが炎を纏いながらリリスに迫る。
「煽りに弱い部下が迷惑掛けたね！　子供は嫌いじゃないけれど、あんたを倒せばこっちの勝ちだ！　この状況だ、手加減しないよ！」
「悪の組織なだけあって、お互いヤンチャな部下で苦労するね！　手加減しないなんて言葉は聞かなくなって久しぶりだ！　地球じゃ危険人物リストのトップだからね、それが聞けただけでも来た甲斐あったよ！」
　ハイネは炎の塊を連打しながらリリスの懐へと飛び込んでいく。
　どうやら周囲の兵器を見て、遠距離タイプであると見抜いたようだ。
　だが——
「ひい!?　な、なんだこりゃー！」
　数多の触手に炎塊が片端から跳ね返され、ハイネがあっという間に触手

に捕らえられる。
「ハハハハハハハ、悪の女幹部はエロい目に遭うのも仕事のウチさ！　見たまえ六号、触手の刑だ！」
「さすがっスリリス様、戦闘員心が分かってるっス！　これからハイネを部下の前でひん剝くんスね！」
「や、やめろぉーー！」
「お前らちょっとは真面目にやれ！　何で戦闘員見習いが一番頑張ってんだ！」
　アリスの言葉に前線を見れば、ロゼが炎を吐いて威嚇していた。
「ああっ、本当に火を吹いた！　アリス、彼女を地球に持ち帰れば——」

ニエコでクリーンなエネルギー源になるって言うんだろ、そんな事は出会った時に考えたさ！　そろそろ本気出せ創造主！」
　アリスに襲い掛かってきたオークをRバッソーで迎え撃ちながら、俺はロゼに呼び掛けた。
「ロゼ、一旦下がれ！　今からリリス様が本気を出すぞ！」
「ちょっ!?　まだ本気を出すなんて言ってな……！　ああもう！」
　ロゼが大きく飛び退り、触手に絡まれていたハイネが魔王軍へ放り投げられる。
「あああああっ!?　こ、この……っ！」
　地面に投げ出されたハイネが毒突こうとした、その瞬間。
　自由になった全ての触手が魔王軍へと向けられた――

「わあああああ！　ちょっ！　待っ……！」
突然の大爆発と轟音に、頭から地に転がったハイネがワケも分からず声を上げる。
混乱に陥ったハイネの視線の先では、リリスの触手から放たれる無数の銃弾、電撃や熱線に、魔王軍の兵士達が逃げ惑っていた。
「ヒャッハー！　オラオラ逃げろ逃げろ！　これがキサラギの力だ、よく見とけ！」
「おう、自分の製作者を舐めんじゃねーぞ！」
「隊長もアリスさんも、リリス様の後ろから言うのは止めましょうよ！」
何人かの兵士が矢や魔法をリリスに放つも、それら全てが触手に防がれ……。
「なな、なんだこりゃー！　さっ……、下がれー！　全員下がれー！」

未だ地に伏せたままのハイネが喚くが、それを尻目に脳をフル回転させて目を赤く充血させたリリスが叫びを上げる。
「これは最後の降伏勧告だ！　今のは僕の本気の、僅か十パーセントに過ぎない。ああ、そんなのはただのハッタリだって？　その言葉は負けフラグ？　よろしい、ならば力の一端をお見せしよう！」
ハイネを始めとした魔王軍の目には、遠く離れた上空に突然黒い塊が現れたのが映っただろう。
呼び出された兵器群のほとんどはハッタリ用だが、衛星へのリンクが可能な転送端末は本物だったようだ。
衛星と脳みそを直接リンクさせ、遥か上空を座標として指定したのだろう。
キサラギ本部から転送された対軍爆雷が遠く離れた地に投下され――

「次は、これをお前達の頭上に落とす！　だがそれをやれば、追い詰められてヤケクソになったお前達は最後の一兵になるまで戦うだろう！　繰り返す！　これは最後の降伏勧告だ！　……お前らのせいでポイントがマイナスになったら、この星にずっと居座るからな！　僕はどっちだっていいんだぞ！　六号やアリスやロゼと共に、ここで楽しく暮らすのも――」

リリスが最後まで言う前に、轟音と共に巨大な爆煙が立ち上った――

6

魔王軍との全面戦争……というか、たった一人の幹部による一方的な蹂躙が終結した。

ハイネが早めに降伏したおかげで意外にも死者は少なく、怪我を負った者も俺の部隊の自称衛生兵であるアリスが治療し、現在は治療を終えた魔族達が一箇所に集められ寝かされていた。

そして今、リリスの前には……。

「リリス様、魔王軍幹部、炎のハイネをお連れしましたぜ」

「おうコラ、とっとと歩け。デケぇ乳しやがって捥がれてぇのか」

「ひいっ、や、やめて……」

俺とアリスに両脇を押さえられ、完全降伏したハイネが連れてこられていた。

「どうしやすかリリス様。この魔王軍幹部ハイネのヤツは、何度も俺達の前に現れては散々邪魔してくれたメスなんでさあ」

「そうだな、コイツが現れる度に自分達はいつもいじめられたもんさ」

「ええっ!?　ちょっと待って、アタシそんな事した覚えない……！　いや、邪魔は確かにしたかもだけど、むしろこっちが被害者で……！」
　リリスの前に正座させられた炎のハイネは、俺とアリスの理不尽な告げ口に、涙を浮かべて抗弁していた。
　と、そんな俺とアリスの姿に。
「……ねえ君達。この星に二人を送ってから、日に日におかしくなっていないか？」
「そりゃ上司に似たんスよ」
「自分は製作者に似たんだな」
　即答する俺達に、リリスが悔しそうな顔をする。
「で、この女はどうしますかリリス様。やっぱ軍事裁判スか。軍事裁判するんですか。俺としてはこの女に、おっぱい刑三年を求刑します」

「自分は、下っ端戦闘員としてこき使ってやるのがいいと思うぞ」
　俺とアリスの提案にハイネがブルブルと震え出す。
「軍事裁判は行わないよ。我が秘密結社キサラギは魔王軍と交戦状態にはあるものの、あくまで戦闘員を派遣しているだけだからね。言ってみれば傭兵部隊みたいなもんだ。魔王軍と戦争中なのはグレイス王国。なら、僕達にこの子を裁く権利はない」
　ため息を吐きながらのリリスの言葉に、ハイネがキョトンとした表情を浮かべた後。
　徐々に希望を得たような顔になり……。
「おっとリリス様、そいつはひでぇや。つまりこの女は、裁判で保障される最低の権利すら無いって事ですね、コイツはいいぜ」
「さすがは悪の組織の最高幹部だ。リリス様は極悪だな」
「ちょっと待って、僕そんな事言ってない

ちょっと待って　僕そんな事言ってない！　そんな事するつもりもないって
ば、君もそんな顔をするんじゃない！　この二人の言う事は聞かなくていい
から！」

　絶望の表情を浮かべたハイネにリリスが慌てて訴えた。

「まだ解放するわけにはいかないが聞きたい事を聞いたら逃がしてあげても
構わない。何なら、情報次第では多少の願いも聞いてあげよう」

「ッ!?　ほ、本当ですか!?　な、なら図々しいとは思うんだけど、その……」

　リリスの言葉に、ハイネは傷兵の方を見ると……。

「その、アンタ達のとこのキメラの子に、怪我した兵士の傍でウロウロするの
を止めさせて欲しいんだけど……」

「こらっ、そんなところで何やってるんだ！　人語を喋る魔獣の仏さんは食

こちゃいけないと言ったけど、まだ生きてるヤツも食うんじゃない！」
　命を落とした魔族にごちそうを見る目を向けていたロゼに、人型を食うなとは注意したのだが……。
「そ、そっちは後でちゃんと注意しておく。それより、君に聞きたい事があるんだよ……」
「——魔王城への入り方、ですか……」
「ああそうだ。魔王の城へ入るには、何かアイテムを揃えないといけないんだろう？」
　リリスがハイネに尋ねたのは、魔王の城への入り方、もしくは城を守っている結界を解く方法。
「……その、城の東西南北にある塔に、カイジョキー？　と呼ばれている魔導石を置けば」

[illegible]」

「それならもう知っているよ。でも、その魔導石とやらが手に入りそうにないから言ってるのさ」

魔導石が無いと絶対に入れないというのならお手上げだ。

その際には、リリスが結界の上から大量の爆発物をばらまくか、魔王国の住人を人質に開城交渉をする予定だ。

「……アタシの聞いた話だと魔導石は塔の防衛機能を止める効果があるらしい。つまり、塔そのものを壊しても城を守る機能は無くなるって事さ。とはいえ普通に考えたら、塔を壊すなんてバカな話なんだけど……」

「なるほど。まあ僕なら、塔の四つや五つの破壊ぐらい容易いね」

なんだ、いきなり解決じゃないか。

「で、でも四つの塔はその周辺に、常に濃い霧が掛かって隠されている。コイツ

はダスターの塔の秘宝を使わない限り解除する事は出来ないんだ。ちなみに、アタシは炎の塔の所在地しか分からないからね？　こ、これは本当だから！」

「……おいアリス。ダスターの塔の秘宝って、確か俺達が手に入れて国に差し出さなかったっけ？」

「アレなら行方（ゆくえ）不明になった勇者が預かってたはずだ。つまり秘宝も行方不明だな」

使えない、勇者本当に使えない。

……と、その時だった。

「いや、そういう事なら方法があるよ」

どうやら何かを思い付いたらしいリリスの言葉に。

「なんスか、扇風機っスか？　デッカい扇風機で霧を吹き飛ばして探すんでしょう」

「誰(だれ)がそんな事をするか。というか、四つの塔とやらは常に霧に覆(おお)われているんだろう？　なら話は簡単じゃないか」

　何でもない事のように言うリリスは、とびきり邪悪な笑(え)みを浮かべた。

7

「おいハイネ、本当だな？　本当に塔の近くに、お前んところの国の住人はいないんだよな？　いたら困るのはお前だからな？　あの人、別にお前んところの住人が滅(ほろ)んでも、鼻ほじりながらフーンで済ますような人なんだからな」

か」
「本当だよ、あんな力を前にして嘘なんか言わないって！　ていうか正気なのか？　塔が隠されているはずの霧が広がってる地域一帯ごと吹き飛ばすなんて、お前ら絶対おかしいだろ！」
　リリスの考えとやらは、塔が霧で隠れているのならむしろ霧で覆われているところを重点的に爆撃するというものだった。
　既にアリスが衛星とリンクし、霧が立ち込めている場所を特定している。
「本当だ、ここから東西南北の四つの箇所にみっしりと霧が立ち込めている所があるね」
「遥か上空から見ると、ココに何かありますよと教えているようなもんだな」
　マッドサイエンティストとその創造物は、ウキウキで霧に覆われている箇所の座標をメモっている。

「ああ、今日はなんて日なんだ……。あの人が、あの紙切れをどこかに送ったら塔の上にさっきのヤツが降り注ぐのか……。悪夢だ、今日は魔族にとって滅びの日だ……。城の結界が解かれたら、魔王城の上にもアレが降り注ぐんだろう。いよいよこの国は終わりじゃないか……」

俺は、いよいよグスグスと泣き始めたハイネに言った。

「いや俺達は別に城を爆撃するつもりはないぞ。ほら、あそこにウチのキメラがいるだろ？　アイツ、お前んところの魔王にちょっと聞きたい事があるらしくってな。それでこうして話し合いに来たってわけだ」

ハイネの目が見開かれ、コイツは何を言っているんだと言わんばかりに口が思い切り開けられた。

「は、話し合い？　お前今、話し合いって言ったのか？　これだけの事をやら

かしといて、しかもあれだけ煽って、話し合いに来たっつったのかお前！　コイツぶっ殺す！　そして、アタシの仲間の下に送ってやるよ！」

「おっ、なんだこの負け犬女。お前、今自分が捕虜だって分かってんのか？　後、俺は死んだら地獄へ落ちるだろうから、仲間の下へ送るって事はそいつらも地獄にいるんだな！」

と、俺とハイネが喧嘩を始めた、その時だった。

ここから遠く離れた地で、ドーンという重い音が聞こえた後、やがて振動がビリビリと一拍遅れてやってきた。

見ればリリスとアリスがメモの転送を終えている。

「ああ、やりやがった……。っていうか、魔王様に話があるなら交渉だって出来たのに……。なんでお前らってこんなに力尽くで押し通すんだよ……」

そりゃあ悪の組織の者ですから。

「──おいロゼ、こっち。ちょっとお前こっち来い」

「…………？」

その後、リリスを交えてハイネと誠意を持った話し合いをした結果。

「ロゼ。このハイネが魔王に話を通して、魔王城にある遺跡を案内したり、魔王と話をする事は出来るってよ。でも俺達としては、そんなもんを待つまでもなくこれから城へカチコミに行き、魔王に体で分からせてやる案も出ている」

それを聞いたロゼが即答する。

「話し合いで！　話し合いでお願いします！」

ロゼのその言葉を聞いて、それまで泣きそうだったハイネの顔が希望を見付けたように明るくなった。

ちなみに、話し合いなどせずこのまま殴り込むべきだ案が今のところ三票だ。

つまり、ロゼ以外は全員が今日中に決着を付けるつもりだったのだが……。

「本当にそれでいいのか？　コイツらが約束守らないかもしれないし、何時になるかも分からないぞ。でも今ならリリス様も付いてるし、今日一日で全てが終わるぞ？」

と、そんな俺の囁きにも、ロゼはプルプルと首を振り。

「……いえ、あたし、出来れば穏便なお話がしたいです。でも、ここまで来れたのは隊長やリリス様にアリスさんのおかげですし、一応その、あたしとしては話し合いに一票って事ですが、あまり強くは言えません……」

「……なるほど。そういう事なら穏便に話し合おうか。当社のキサラギシス

テムでは、当事者の一票は百票分の力があるからね」
そんなリリスの一声で、今後の方針は決まったようだ。
その言葉にハイネがホッと息を吐き、ロゼが嬉しそうにはにかんだ。
――リリス様、俺キサラギシステムなんて聞いた事無いですよ？
「――それじゃあ六号、アジトへ帰るぞ。今日は死ぬほど脳みそを使ったから糖分をたらふく取ってやる。それからそろそろ報告書を書き上げないと。君達もいい感じのヤツを書くんだぞ。それこそ、僕が指一本で魔王軍をねじ伏せたり、ドラゴンをワンパンしたりといくら盛ってもいいからね」
「…………」
ロゼのために適当な嘘を吐いたんだと俺が勝手に思っていたけど、この人、単に早く帰りたかっただけじゃないだろうな――

8

「どういう事よ！　なんでそんな大作戦にこの私が呼ばれてないの!?」

俺達が魔王軍に対する電撃作戦を行った、その翌日。

俺は、今更ながらにそれを聞きアジトに怒鳴り込んできたグリムの苦情を受けていた。

「うああああ！　あふうっ、あああああああーっ！」

……。

「私達仲間でしょう？　どうしてハブられなきゃいけないの！　しかも私って、ロゼと一番仲がいいのに！」

「いやだって作戦が決まったのは夜遅くだし、そもそも俺、お前の家を知らないもん。大体決行したのは早朝だぞ。お前、朝弱いじゃん」
「私の家ぐらい隊長にならいつでも教えてあげるわよ！　あと、いくら何でもロゼのためなら頑張って朝も起きるわよ！」
「あぐうっ！　うえええっ、ぶあああああ！」
………。
ここに駆け込んできたのは目の前のグリムだけではない。
完成したばかりのアジトの綺麗な床を涙で汚しながら、薄汚れたスノウが号泣していた。
「……ねえ隊長。ちょっとアレ、何とかしなさいよ」
「どうしろっつーんだあんなもん。一応アイツにも声を掛けようとはしたんだぞ？　でも、グレイスの街のどこ探してもいなかったんだ。それで話を聞いてみれば……」

この業の深い欲深女は、俺が空の王に攫われた日から今までずっと毎日のように空の王の巣に通い詰め、宝の強奪を図っていたようだ。

……そう、俺達が魔王城に行く途中、空の王に追われていたのはどうやらコイツだったらしい。

そして自分が留守にしている間に、俺達が魔王軍相手に大暴れし大戦果を挙げた事を今さら聞いて、こうして号泣しているわけだ。

そんなスノウを憐れに思ったのか、ロゼがよしよしと頭を撫でながら顔を拭ってやっていた。

「……期間が短いとはいえ、一応アイツ、お前の元隊長なんだろ？　ここに置いとくと迷惑だから街の方へ連れ帰ってくれよ」

「いやよ、だってあの子住むところがないはずだもの。街に連れ帰ってどこかその辺に放流するの？　それはさすがに私には無理よ。私が借りている部

屋は単身者用だし……」

もう、コレに構うのも面倒臭いので泣き疲れて寝るまで放っておこう。

それに俺にはもっと大事な用がある。

リリスに呼び出しを受けた俺は、アジトの転送室に足を向けた――

「――やあ六号、待ってたよ」

最終調整が完了し、キサラギ本部への転送テストを既に終えたガラスポットの前には、大きなリュックを背負ったリリスが待っていた。

「随分と文句を言われていたね。まあ、僕が同じ事をされたら文句ぐらいでは済まなかっただろうから、後であの二人にフォローでもしてあげなさい」

「いや、俺にも言い分があるんスよ。片方は夜行性で朝に弱い上自分で歩け

るのに歩かないから面倒臭いし、もう片っぽなんてそもそも街にいませんでしたし」

　そんな俺の言い訳に、リリスが楽しげに苦笑した。

「僕としては未だにあの二人はよく分からないし、まだ身内というより敵に近い感じだけど、まあいいさ。しばらくの間は君の近くにあの子達が侍るのも許してあげよう」

「俺が女を侍らせるのに許可がいるって言うのなら、リリス様が俺に侍ってくださいよ」

　からかうようにそう言うと、リリスがニヤニヤと笑みを浮かべ。

「そうかい、なら侍ってあげようか？　でも実際に僕がそういう事をしようとすると、どうせ……。ごめん、僕また間違えた。っていうか、君はそういう

人じゃなかったね　本当にごめん　違うから、たまにこういう事言って　からかってみたくなるんだよ！　ほら、青春物のラノベみたく！」
　俺が手を広げて近付くと、リリスが後退りながら捲し立てた。
　相変わらずのビビリで小心者め、いつか本当に一線を越えてくれようか。
「な、なんだよその目は、上司に向ける目じゃないぞ！　アリス、アリース！　こっち来てー！」
　転送装置の具合を見ていたアリスが、リリスに呼ばれてやって来る。
「もうそろそろ時間だろうに何を最後までキャッキャしてやがるんだ。……自分に何か用なのか？」
「……これから本格的な侵略の始まりだが、六号は甘いからね。これまでの現地人との付き合いを見るに情にほだされないか心配でね。そこで二人には、今後の大まかな指示を与えようと思う」
　そういうリリスこそ、今回思い切り情にほだされていたクセに。

と、それまでリラックスしていたリリスが腰に手を当て、真剣な声音で言ってきた。

「命令！」

俺とアリスは背筋を伸ばし、気を付けの姿勢を取る。

「戦闘員六号。美少女型アンドロイド、キサラギ＝アリス。お前達二人はこのアジトを拠点とし、周辺諸国へのスパイ活動及び侵略工作を開始せよ。それと並行し、アジトを起点として、この地に人類が生存可能な町を作ること。この荒れた大地を蘇らせ、森林を開拓し地球人を移住させる基盤を作りたまえ」

「…………。」

「リリス様、質問してもいいですか？」

「まだ説明の途中なんだけど……。まあいいや、質問を受け付けよう」

しょうがないヤツめと言わんばかりのリリスに。
「周辺諸国へのスパイ活動と侵略工作は、まあ分かります。既(すで)に十分な結果を出してるはずなんで、本当はアリスと一緒(いっしょ)に地球に帰りたいですけどね」
しかし、悪行ポイントがマイナスのまま帰れば大変な事になるので、それは置いとく。
……まあ、正直言ってここに愛着も湧(わ)いたしな。
「分からないのは町作りですよ。なんスかその、頭使いそうな任務は。俺は自分で言うのもなんですけど、あんまり頭は良くないですよ？　政治だの統治だの、そんなん出来る自信はないんですけど」
リリスは、分かっているとばかりに頷(うなず)くと。
「君がアホなのは誰(だれ)よりも僕が知っている。もちろんマトモな都市開発なんて出来るとは思ってないさ」

この人も、またしばらくのお別れだってのにちょくちょく毒吐くな。
「町の統括者はキサラギ＝アリスだ。君はアリスの相棒として主に荒事を担当してくれ。何せこのような場所に一から町を作るんだ、問題が起こらないはずがない。近隣諸国とのトラブルに、森から来る蛮族や魔獣達。町が出来て人が増えれば治安も悪くなるだろう。我々以外の犯罪組織も当然利権を狙ってやって来る。君の仕事はそれらの問題を力で解決する事だ」
……なるほど、それならいつもの仕事だ。
「六号、君はシミュレーションゲームはやるかい？　世にいう、サバイバル系だのクラフト系だのというヤツだ。現地で素材を集めて拠点を作り、周辺のモンスターを倒しながら縄張りを増やしていくヤツさ」
「俺は基本エロゲーしかやらないっス」
「そ、そうか、ならいい。まあ、とにかくだ……。放射能もなければ化学物質もない、美しいこの世界に我々の根を生やすのだ！　幸いにも未開拓の土

地は大量に余っている。手付かずの土地は人の手を入れ、既に国が興っていれば入念な調査の末に、侵略せよ！」

俺とアリスはリリスの言葉に戦闘員式の敬礼で返事をした。

リリスはそんな俺達を見て、楽しげに笑みを浮かべると。

「君達二人には期待してるよ。それじゃあ僕は、これで帰るけど……。あまりこの星にばかりかまけてないで、たまには僕達三人の事も思い出してくれ」

リリスはガラスポットに入りながら、そう言ってはにかんだ。

「じゃあなリリス様。最初来た時は何だこのポンコツはと思ったけれど、最後はちょっと見直したぞ。自分の創造主として、恥ずかしくないように生きるんだぞ」

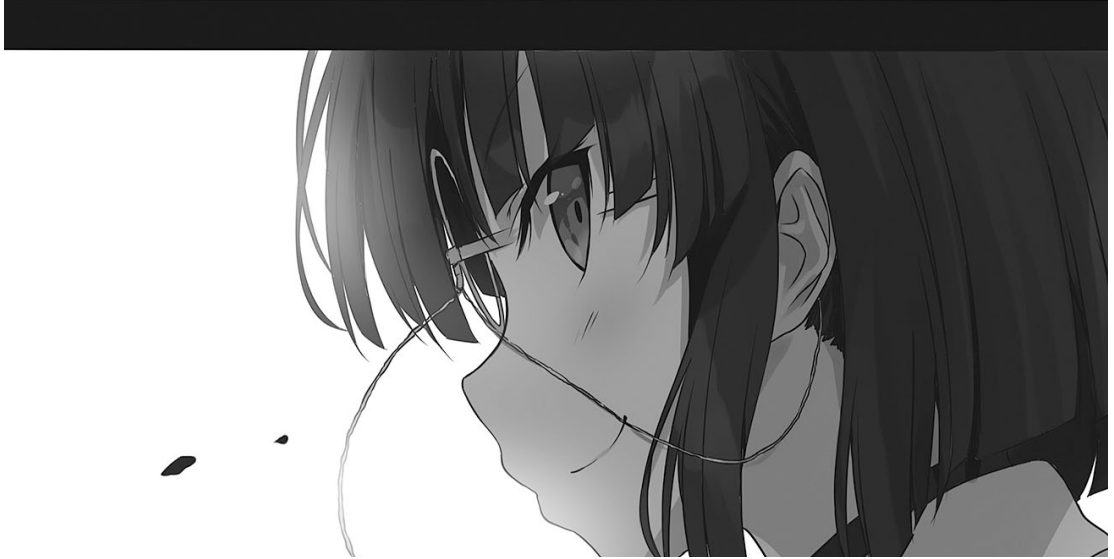
「どっちが親か分からないんだけど！　まあ、アリスが自慢する親を目指す

としようか」
　そう言ってはにかむリリスを見て、俺は今更になって思い出した。
「リリス様。俺もリリス様に言い忘れてる事があるんですよ。ていうかアジトの屋上で、リリス様に遮(さえぎ)られたって言いますか」
　そう、あれはリリスが半泣きになり、自分達の事を忘れるなと訴(うった)えかけてきた時の事。
　確か俺はこう言い掛(か)けたのだ。
「俺は、三人の事を忘れた日はありませんよ。だって……」
　リュックを背負ったリリスは、いつになく赤い顔で挙動不審(ふしん)な動きを見せる。
「俺、毎晩ちゃんと三人を思い出してます！　それだけはちゃんと言いたくて！　なぜ夜に思い出すかと言いますと、こっちはエロ本すらポイントかか

るんで……」

「最低だ！　やっぱり君は最低だ！　二度と地球に帰ってくるな！　この事はアスタロト達に言い付けてやるから覚えてろ、この変態部下め！」

何かを期待してたっぽい、俺達の自慢の上司は。

そんな捨て台詞（ぜりふ）と共に、でも意外とまんざらでもなさそうな顔で消え去った——

エピローグ

そこは秘密結社キサラギの、巨大転送装置が置かれた部屋。
いつもなら派遣戦闘員の物資転送要請に応えるため、少数の事務員達が詰めているのだが、今日に限っては様子が違った。
地球外惑星、仮称『第二アース』に派遣した黒のリリスを迎えるため、二人の最高幹部が今か今かと待ち構えていた。
とその時、転送装置のガラスケースに紫電が走る。
すると、特に魔法陣が現れるわけでもなく、眩い光が走るでもなく。
幹部二人の目の前に、リュックを背負ったリリスが上機嫌な笑みを浮かべて立っていた。

て立っていた

　二人の姿に気付いたリリスは、機嫌が良いのを隠そうともせず、ウキウキした足取りで外に出る。

「二人とも、ただいま！　いやあ、わざわざ僕を出迎えてくれたのかい？　まったく、仕事をほったらかしてしょうがないね。でもまあ、僕達は結成当初からの付き合いだし、これだけ離れていた事もなかったから仕方ないか」

　見当違いな事を言いながら、リリスはリュックをドサリと置いた。

「これが何だか分かる？　向こうの星から持ってきた宝石や金貨だよ。いや、最初はなんて腹黒くて酷いお姫様だと思ったけれど、グレイス王国のティリス姫は素晴らしいね！　僕の大活躍に対しこれだけの財宝を用意してくれたよ。いや、六号じゃないけれどいっそ向こうの子になりたくなるね！」

　アスタロトの冷えた視線にも気付かぬまま、リリスの言葉はなおも続く。

「いやあ、今回の僕の活躍を見せたかったよ。六号やアリスからもう報告書

は届いてるかい？　実はその事で話があってね……」
「リリス」
　と、突然アスタロトが放った一言に、リリスがビクリと身を震わせた。
「……えっ、何？　どうしたの？　ちょっと顔が怖いんだけど。ていうか、冷気漂わせないでくれる？　その、なんか怖いし、寒いんだけど……」
　軽く怯えた表情で、床に下ろしたリュックを背中に庇って後退る。
……と、ベリアルがそんなリリスに近付くと、ガッと肩に手を回した。
「リリス、お帰り。そんなに現地は楽しかったか？」
「ベリアル、ただいま。ああ、楽しかったとも！　向こうではまず、バカデカいトカゲに出くわしてね、まずコイツをぶっ倒してやったのさ。するとトカゲの巣には、何と謎の地下遺跡があってだね……熱い！」

途中まで言い掛けたリリスが悲鳴を上げた。
ベリアルの今の感情を表すように、真っ赤な髪が燃え上がるように揺らめいている。
リリスが肩に回された手を剥がそうとするもよほど強い力で掴んでいるのか離れない。
「ちょっとベリアル、暑苦しいよ！　そんなに僕に会いたかったの⁉　ていうかぶっちゃけ暑いんだけど！　いや、凄く暑いんだけ……熱いッ！　これ、火傷する方の熱さだって、離れ……おい離れろ！」
リリスが堪えきれずに触手を使って離そうとすると、ベリアルがスッと身を離す。
と、そんなリリスに向けてアスタロトが、クスクスと笑みを浮かべ。
「ふふっ、まったくリリスったら、相変わらず落ち着きがないわね。寒かったり

暑かったり、一体どうして欲しいのよ？」
「常温でいいんだよ、常温で！　ていうかなんなの？　二人とも機嫌悪くない？」
　ようやく空気を察したのか、リリスが怯えた表情で訴える。
　酷薄な笑みを浮かべていたアスタロトはそっと目を閉じ。
「それは自分で考えなさい。その小さな胸に手を当てて、よく思い出してごらんなさいな」
　リリスはその言葉に、素直に自らの胸に手を当てる。
「……僕の美乳に手を当ててみても、これはとても良い物だという感想ぐらいしか浮かばないけど……」
「おいアスタロト、コイツちっとも反省してねえ」
「というか随分余裕があるみたいね」

「さし[illegible]」
　二人はそんなリリスの発言に、突然態度を豹変させた。
「な、何だよ、一体何なんださっきから！　……ははーん、分かったぞ、お土産か。お土産が欲しいんだな、この強欲娘め。まったくもう、これは僕が貰ったボーナスなんだ。二人に分け与える理由はないんだからね？　その代わり、今日は僕に敬語で敬うんだぞ」
　そんな事を言いながら、二人の手の平にそっと宝石を置くリリス。
　……と、その瞬間、アスタロトの手に置かれた青い宝石が瞬く間に霜に覆われ砕け散り、ベリアルの手に置かれた赤い宝石が炎に包まれ溶け落ちた。
「酷い！　なんて事してくれるんだ、今渡した石の色を見ただろ⁉　それは二人のカラーに合わせ、悩みに悩んで選んだんだ！　信じられない、これが現地で頑張ってきた僕に対する仕打ちなのか？　不機嫌だね！　今日は

もう、二人の顔は見たくない！　まあそれは捨てる予定だった安物だけど！　僕はこれで……」
　帰らせてもらう。
　リリスがそう言い終わる前に、アスタロトとベリアルから肩を掴まれ、動きを止めた。
「お土産だとか宝石だとか、そんな事はどうでもいいのよ。ねえリリス、もう一度聞いてあげるわ。現地では随分楽しんできたみたいね」
「楽しんできたよ。なんだよもう、悪かったよ。僕一人で六号とイチャついてたから機嫌が斜めになったのかい？　それならお門違いってヤツさ。だって三人の幹部の中から、六号が僕を選んだんだからね」
　余計な事を口走るリリスに、アスタロトのコメカミがひくついた。
「バカねリリス、私はそんなくだらない事で怒っているんじゃないわ」

「えー、そうなのか？　お前、アリスから六号とリリスの仲良さそうな動画が送られる度、コメカミピクピクさせてたじゃんか」

「バカねリリス、私はそんなくだらない事で怒っているんじゃないわ」

　ベリアルの言葉を完全にスルーし、同じ言葉をくり返すと。

「あなた、一体現地へ何しに行ったの」

…………アスタロトの一言に、辺りの空気が固まった。

「……いやいや、待ってアスタロト。何しに行ったも何も、現地で大活躍してきたよ。ある時は大森林を守る遺跡の主と、またある時は泥の王と呼ばれる厄介な生物と、そしてまたある時は、偉大なる空の王と激戦を繰り広げ……。そして最後には商売敵を……」

「商売敵を仕留める前に、地球に帰ってきちゃったのね」

……。

「違うんだ」

「報告書には、デカいトカゲとスライム、後は雀を相手に戦っただけで、美人コスプレイヤーにビビって引き籠もったと書いてあるな」
　ベリアルが一枚の紙を読み上げるとリリスの顔が引き攣った。
「違う！　いや、違わないけど違うんだ！　デカいトカゲは巨大ロボットで、スライムは国の地下を埋め尽くすほどの巨大なヤツさ！　しかも雀を相手にって聞くとバカみたいだけど、デカいんだ！　なにせ空を飛ぶ害獣を捕食する雀だからね！　あれはタダの雀じゃないよ、僕が昔飼っていた子にすら匹敵する、それは見事な雀でね！　そして何て言ったって天使だよ、コスプレイヤーじゃなくて天使なんだ！　いや、アレはほんとヤバいって、見れば分かるさ！　あと僕は、逃げ帰ってきたんじゃなくて……」
　不利を感じ取ったのか、リリスが早口で言い募る。
　そんなリリスに向けてベリアルが、さらに一枚の紙を読み上げた。

「……お前さぁ。女装した年端もいかない男の娘の、ちんこ見たってほんとなの？」
「……見たか見てないかで言えば、まぁ見たさ。でもそれがどうかした？　だって僕、相手はキメラちゃんだと思ってたんだ。それがなんと、キメラ君だったのでした！」
　おどけたように言い放つリリスに向けて、アスタロトとベリアルが同時に言った。
「「制裁」」
　それと同時にリリスがバッとその手を振り払い、背中に庇っていたリュックを抱いて逃げようと……！
「しかし、回り込まれた！」
　かの有名なゲームの台詞を叫びながらベリアルが素早く道を塞ぐ。

顔を引き攣らせたリリスの背後から、笑みを浮かべたアスタロトがゆっくりと……。
「あなたの仕事は商売敵を殲滅(せんめつ)して六号を連れて帰ってくる事でしょう？　誰(だれ)が現地で遊んで帰ってこいだなんて言ったのよ。しかも何なの、そのお土産は。殲滅任務に失敗したんだからそのリュックは没収(ぼっしゅう)よ」
「へっへっ、その手に抱いているお宝をこっちに寄越(よこ)してもらおうか。おっと、逃げられると思うなよ？　一人だけ楽しい思いしやがって。コイツ、ほっぺが艶(つや)々(つや)してやがる！」
前門のベリアルに後門のアスタロト。
キサラギが誇(ほこ)る最高幹部に挟(はさ)まれて、絶対絶命の状況(じょうきょう)に陥(おちい)った、甘さが残るポンコツ幹部は……。
「おのれ、僕が必死になって手に入れた宝を横取りしようとは、さすが悪の

幹部、汚いな。……アレだろ、結局僕が羨ましいんだろ。六号に懐かれ、ご指名を受けたこの僕が。ああそうさ、現地ではアイツと散々遊んできたさ！　謎に満ちた惑星を大冒険してイチャついたさ！　そんなに六号に会いたいのなら、素直になって自分で会いに行けばいい！　そんなに宝が欲しければ、悪の幹部なら奪ってみせろ！　バーカバーカ！」

　そんなリリスの逆ギレに、アスタロトとベリアルのコメカミに血管が浮き上がる。

　絶対に渡すまいとリュックを抱き締め、リリスは全ての触手を解放させると……！

「掛かってこい、この悪党どもめ！　この僕は、魔王も逃げ出す黒のリリスだ!!」

あとがき

このたびは、『戦闘員、派遣します！』４巻を手に取って頂きありがとうございます。

４冊ともなれば束ねて懐に入れておけば防弾チョッキ代わりにもなる分厚さであり、読者様のおかげでここまで続いております。

このすばといい戦闘員といい、飽き性の自分がよくこれだけ続くなと考えていたら、そもそも同じ仕事を五年も続けられたのが初めてという事に気が付きました。

おっと、ダメ人間を見る目は止めてもらおうか。

長寿シリーズになるといいなあと思いつつ、それでは戦闘員のお話を。

1巻でちょっと触れましたが、このシリーズは魔王を倒す事がゴールではありません。
いろいろと限界に近い地球に代わり、他惑星を侵略し人類を生き残らせる。
異世界の人類を救うため魔王を倒すという目的を与えられた本格異世界王道ファンタジーのこのすばと同じく、主人公にはそんな、重くシリアスな任務が課せられています。
キサラギと人類のためにこの星を侵略するのか、それともいつも焦らしてばかりでちっとも餌をくれない上司達をアッサリ見捨て、新しく出来た部下のため、主人公が現地側に付いて反旗を翻すのか。
この星は広く未開拓で、まだまだ謎に満ちています。
というわけで今後は、科学の力で巨大都市を建造しながら、世界各地を

というわけで今後は、科学の力で巨大都市を建造しながら、世界各地を探索し惑星の謎を解き明かしていく冒険活劇に――！

まあ本質はコメディなので、そこら辺はあまり期待しないで欲しいのですが。

本格的な冒険物が読みたい方には自分が書いている別シリーズ、このすばをオススメしておきます。

この本が発売されている頃には劇場版が公開されているかと思いますので、シリアスな予告PVと合わせてお楽しみ頂ければと思います。

というわけで今回も、色んな方々にご迷惑をお掛けしながらも本を出す事が出来ました。

イラストレーターのカカオ・ランタン先生をはじめ、担当Kさんに校正さ

ん、デザインさん、営業さん、その他たくさんの方々にお詫び(わ)と感謝の言葉を述べつつ、いつものもので締(し)めさせていただければ。

この本を手に取ってくれた全ての読者の皆様(みなさま)に。深く感謝を！

暁(あかつき)　なつめ

著者　暁なつめ

福井県、越前市出身の小説書き。
連日の猛暑の中、北極への移住を真剣に考える。
ホッキョクグマに遭遇した際の対処法として、学ぶべき格闘技は打撃系か絞め技系かで半日悩むが、北極にはネット回線が繋がっていないと知り断念する。
ここは他惑星への転送装置を開発すべく、今から科学者を目指すべきか……。

イラスト　カカオ・ランタン

ちょうど空の王描いている時に外からたくさんのスズメの鳴き声が聞こえてました。
あのまん丸いふわふわのお腹を触ってみたい今日この頃です。

カバーイラスト／カカオ・ランタン

あ-6
5-4

戦闘員、派遣します！4

暁なつめ

角川スニーカー文庫

　アンデッド祭りが終わり、完成したばかりのアジトが吹っ飛んでから一週間。自暴自棄になった六号は『一度は完成した』ことを理由に、キサラギの最高幹部をご招待！　お相手は――
「リリス様でお願いします」『ええ!?　ぼ、僕!?』
　危険が危ない未知の惑星に自分を送り込んでくれた張本人、黒のリリスを騙して呼びつけ、日頃のストレス解消を計画する！
　さらに、反抗期が来たらしいアリスは創造主であるリリスを『バカ』呼ばわりで、終始リリスを涙目にさせるが――？
「幹部なのに……。これでも最高幹部の一人なのに……！」
　秘密結社キサラギの絆が試される!?　異世界コメディ第４巻！